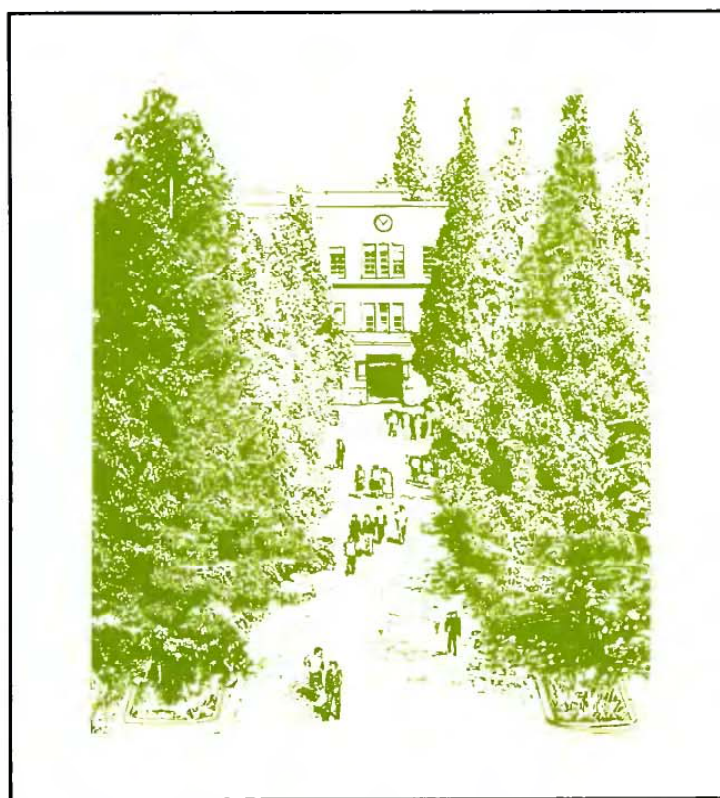


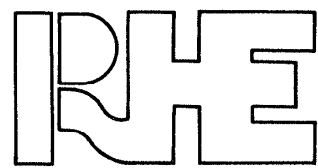
ファカルティ・デベロップメントに関する 文献目録および主要文献紹介

伊藤彰浩 編



伊藤彰浩 編

ファカルティ・デベロップメントに
関する文献目録および主要文献紹介



広島大学 大学教育研究センター

は し が き

現代において産業社会諸国の高等教育の改革課題は量的に拡大した大学教育の質の維持・向上をいかなる方策で実現するののかということである。質の向上を単に大学院の拡充・強化と狭義に解するのではなく、量的に拡大した学部段階の教育の質が問われているのだととらえるべきである。1980年代にアメリカにおいてカーネギー教育振興財団（会長E. ボイヤー）をはじめ、全国レベルの諸機関・団体が提案した高等教育改革の報告書は、期せずして「学部段階の教育改革」を基調としたものであったことも偶然ではないのである。

さて、高等教育の量的拡大は、学生の多様化・大衆化をもたらすにとどまらず、教師の多様化・大衆化をもたらすものである。この点をいち早く認識していたのはイギリスであったといえるかもしれない。高等教育の量的拡大政策を提言した1963年のロビンス報告は、教育内容・方法の改善についても提言した。これをうけて60年代にイギリスの各大学は、実際に高等教育研究所や大学教授法研究部門を続々と設置した。1970年代にはイギリスの大学は、これらの各研究機関の研究成果をふまえて、自主的に新任教員の教授法習得等を中心とする教育研修、つまりスタッフ・デベロップメント活動を制度化したのである。

アメリカの大学も1970年代の青年人口減少による大学「淘汰」競争、教師の平均年齢上昇、学際的教育の必要性の高まり等の背景の中で、ファカルティ・デベロップメント（教員能力開発）活動を活発に展開している。現代においては欧米諸国のみならず、ソ連・東欧諸国やアジア、オセアニア諸国の大学も、スタッフ・デベロップメントあるいはファカルティ・デベロップメント活動に取り組んでいる。

わが国では、80年代半ばに至って一般教育学会をはじめ、一部の私立大学がこの種の活動に取り組みはじめた。しかし今日もなお日本の大学ではファカルティ・デベロップメント活動とは何か、それはいかなる意味をもつのか、どのようにすれば、それを大学において展開できるのか等について十分な理解が得られているとは考えにくい状況である。

以上に論じた高等教育の改革課題への対応の重要性に鑑み、広島大学・大学教育研究センターでは、専任研究員を中心としてファカルティ・デベロップメントに関する共同研究プロジェクトを発足させ、『教職員開発の国際比較的研究』（文部省・科学研究費補助金・一般研究A：昭和62・63，平成元年度）を実施してきた。本文献目録の作成は、この共同研究の一環として実施したものである。本文献目録には、直接にファカルティ・デベロップメントにかかわる文献だけでなく、その重要な基礎的領域というべきカリキュラムやティーチング・学習、大学教育の評価等に関する文献も含めている。同目録の企画・編集は、資料担当の本センター助手伊藤彰浩氏が全面的に担当・実施した。さらに本共同研究プロジェクトの研究会でメンバー各位からファカルティ・デベロップメントに関する海外の主要文献が紹介されたが、それもこのなかに収録した。本資料が、わが国の大学教育の改革論議の基礎的資料として寄与するところがあれば、われわれにとって、これ以上の喜びはない。

1989年12月27日

教職員開発に関する国際比較研究プロジェクト研究代表者

関 正 夫

目 次

はしがき	iii
------------	-----

第一部 ファカルティ・デベロップメントに関する文献目録

凡例	3	6. 専門教育	32
I 和文編		7. 大学評価	33
1. ファカルティ・ デベロップメント	6	7.1 大学評価	33
2. 教員一般・教員論	8	7.2 教員・授業評価	34
3. ティーチング・学習	10	II 英文編	
3.1 大学教育一般	10	1. ファカルティ・デベロップメント	38
3.2 授業・講義論	14	2. 教員一般・教員論	47
3.3 教授法	16	3. ティーチング・学習	49
3.4 教育工学	19	3.1 大学教育一般	49
3.5 学習	20	3.2 講義論・教授法	51
4. カリキュラム	23	3.3 教育工学	56
5. 一般教育	25	3.4 学習	57
5.1 一般教育論	25	4. 大学評価	59
5.2 一般教育カリキュラム・ 総合科目	30	4.1 大学評価	59
		4.2 教員・授業評価	60

第二部 ファカルティ・デベロップメントに関する主要文献紹介

1. Bergquist 他著『ファカルティ・デベロップメントのためのハンドブック —A Handbook for Faculty Development』	67
2. Gaff 著『教授団の活性化をめざして —Toward Faculty Renewal』	75
3. Dressel 著『大学教育評価のハンドブック —Handbook of Academic Evaluation』	81
4. Clark 他編『教授団の活力と機関的生産性：高等教育の批判的展望 —Faculty Vitality and Institutional Productivity』	90
5. Eble 他著『ファカルティ・デベロップメントによる学部課程教育の改善 —Improving Undergraduate Education Through Faculty Development』	96
6. ボイヤー著『アメリカの大学・カレッジ』	103

第 一 部

ファカルティ・デベロップメント に関する文献目録

凡 例

- (1) 収録した文献は、1970年以降のファカルティ・デベロップメントに関連した和文・英文の図書、雑誌論文、各種報告書、パンフレットなどである。

和文文献は、国立国会図書館編集『雑誌記事索引』、早稲田大学企画調整部・大学問題研究資料室編集『大学関係雑誌等記事文献目録』などを参考に選択した。英文文献は、ファカルティ・デベロップメント関連の著作に掲載された文献目録および英米の高等教育関係雑誌記事索引（Higher Education Abstracts, Research into Higher Education Abstracts 等）に掲載されたものを中心にとり、さらに大学教育研究センター所蔵文献を加えた。

- (2) 目録の構成は、和文編においては、まず大項目として、1. ファカルティ・デベロップメント、2. 教員一般・教員論、3. ティーチング・学習、4. カリキュラム、5. 一般教育、6. 専門教育、7. 大学評価、をたて、さらに必要に応じて小項目を設けた。また、英文編では大項目として、1. ファカルティ・デベロップメント、2. 教員一般・教員論、3. ティーチング・学習、4. 大学評価、をたて、さらに小項目を設けた。

- (3) 各文献の記載は、単行図書類（各種報告書、パンフレットを含む）に関しては、著者名、文献名、発行地（英文文献のみ）、発行所、発行年、頁数の順とし、雑誌論文に関しては、著者名、文献名、掲載雑誌名、巻号、発行年、掲載頁の順とした。また、文献の配列は、各分類項目内で、単行図書と雑誌論文とを区別し、前者を先にまとめた。さらに文献は発行年順に配列し、同年発行の文献は著者のアイウエオ順（英文文献はアルファベット順）とした。

- (4) カリキュラム・一般教育・専門教育の分類項目に属する文献は、内容が特定学問分野に限定されているものは除外している。また、英文文献は、紙数の関係上、分類項目を絞るとともに、比較的入手しやすい文献に限って収録した。データソースの限界により、英文文献のなかには書誌的データが不完全なものも含まれている。以上のように、本目録はファカルティ・デベロップメントに関連する文献を網羅的に収録したものにはなっていない。重要文献の遺漏も少なくないと思われるが、ご容赦願いたい。

本文献目録の編集は伊藤彰浩が担当した。なお、文献データの収集や分類方法等に関して、共同研究プロジェクトのメンバーおよび大学教育研究センター資料室のライブラリアンから様々の協力を得た。記して感謝したい。

和 文 編

1. ファカルティ・デベロップメント

- 馬越 徹：英国における大学教員教育（Staff Development in Universities）の展開 高等教育研究紀要 2 1981年 pp13-27
- 小谷 正雄：大学教員の研修を考える 私学研修 88 1981年 pp4-9
- 有本 章：大学教師の職業的社会的な教育の視点を中心に 教育学論集 14 1985年 pp43-55
- 有本 章：学問の構造と大学教育の関係—大学教師の職業的社会的な視点を中心に 教育学論集 15 1986年 pp27-40
- 関 正夫：Faculty Development に関する一考察—英・米の場合 一般教育学会誌 第8巻 第1号 1986年 pp60-71
- 原 一雄：大学教員研修プログラムの実践的課題 一般教育学会誌 第8巻 第2号 1986年 pp61-65
- Faculty Development〈特集〉 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp3-258
- 一般教育学会FDアンケート調査実施委員会：Faculty Development に関するアンケート調査報告 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp64-172
- 扇谷 尚：ファカルティ・デベロップメントについて—どう考え、どう取り組むか 私学経営 152 1987年 pp10-13
- 扇谷 尚：ファカルティ・デベロップメントとは何か 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp52-55
- 香川大学一般教育部FD研究委員会：香川大学における Faculty Development に関するアンケート調査（Faculty Development〈特集〉） 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp3-63
- 加野芳正：Faculty Development を考えるための文献解題（Faculty Development〈特集〉） 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp79-94
- 絹川正吉：なぜ Faculty Development か IDE 284 1987年 pp25-30
- 小池和男：Faculty Development—2, 3の問題（Faculty Development〈特集〉） 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp235-242
- 清水畏三：FDをめぐる関連諸課題—米国は Teaching 優先時代へ— 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp56-60
- 滝川一幸：Faculty Development から見た大学の国際化について—地方国立大学の一教官から見て（Faculty Development〈特集〉） 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp203-225
- 林 俊夫：わが国における Faculty Development 研究の現状—1986一般教育学会課題研究集会の報告（Faculty Development〈特集〉） 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp243-258
- 藤原章司，豊田治視，梅垣明美：“Faculty Development”と体育 香川大学一般教育研究 32 1987年 pp15-28
- 堀地 武：Faculty Development に関する検討事項（Faculty Development〈特集〉） 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp65-77
- 堀地 武：大学改革と Faculty Development 日本の科学者 22 (11) 1987年 pp8-13
- 持続するスタッフ・デベロップメント活動（タイ）—海外情報 IDE 295 1988年 pp59-60
- 一般教育学会FD実態調査実施委員会：FD関連活動に関する実態調査報告I—調査実施の概要 一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp42-61
- 及川雅勝：教員の資質能力の向上方策について—私学経営講座（29） 学校法人 10 (11) 1988年 pp30-35
- 及川雅勝：初任者研修制度の創設について—私学経営講座（34） 学校法人 11 (5) 1988年 pp31-33
- 扇谷 尚：課題としてのファカルティ・デベロップメント 大学時報 199 1988年 pp66-73

- 香取草之助他：欧米における Faculty Development の調査研究—第2報—英国の高等教育における Staff Development の最近の動向とわが国の Faculty Development の今後について 一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp79-85
- 絹川正吉：ファカルティ・ディベロップメントの試み—国際基督教大学 文部時報 1341 1988年 pp36-39
- 絹川正吉：ファカルティ・ディベロップメント—大学教員評価の視点— セミナーハウス 第110号 1988年
- 新堀通也：ファカルティ・ディベロップメント 週刊教育 PRO 18巻18号 (1988.7.5) 1988年 pp4-5
- 新堀通也：ファカルティ・ディベロップメントの動向 私学経営 165号 1988年 pp2-3
- 高橋金雄：学校教職員の研究・研修制度について (1) 学校法人 10 (10) 1988年 pp6-9
- 高橋金雄：学校教職員の研究・研修制度について (2) 学校法人 10 (11) 1988年 pp13-16
- 高橋金雄：学校教職員の研究・研修制度について (3) 学校法人 10 (12) 1988年 pp24-27
- 林 義樹：学生参画による授業開発とFDの課題 一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp50-54
- 原 一雄：FD (ファカルティ・ディベロップメント) とSD (スタッフ・ディベロップメント)—大学教職員の生涯学習プログラム 学校法人 11 (7) 1988年 pp2-6
- 原 一雄：日本私立大学連盟とFD活動 大学時報 199 1988年 pp86-93
- 藤原章司他：“Faculty Development”と体育—2—総合か、分化か? (総合〈特集〉) 香川大学一般教育研究 33 1988年 pp107-125
- 堀地 武：わが国におけるFD活動の可能性—全国大学関係者からのアンケート調査から 大学時報 199 1988年 pp74-85
- 安岡高志他：東海大学におけるFDアンケート調査 東海大学紀要 (教育研究所教育工学部門) 第1号 1988年 pp5-9
- 安岡高志他：東海大学におけるFDアンケート調査 一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp69-78
- 吉川政夫他：欧米の大学における Faculty Development に関する調査研究 東海大学紀要 (教育研究所教育工学部門) 第1号 1988年 pp1-4
- デイビッド・ルー：アメリカにおけるファカルティ・ディベロップメント 大学時報 199 1988年 pp94-99
- 有本 章：外国の大学授業—FD/SD の動向と実態 片岡・喜多村編『大学授業の研究』玉川大学出版部 1989年 pp242-254

2. 教員一般・教員論

- W. K. カミングス (岩内亮一他訳) : 日本の大学教授
至誠堂 1972年 491p
- 鴻生田努: 大学教授を斬る—知識売人になり下がった偽
善者たち—教授能力調査レポート— 日新報道 1978
年 217p
- 新堀通也: 日本の学界—〈学勢調査〉にみる学者の世界
日本経済新聞社 1978年 187p
- 有本 章: 大学人の社会学 学文社 1981年 234p
- 新堀通也編: 学者の世界 福村出版 1981年 233p
- 原 正敏, 浅野 誠: 大学教師の仕事 (大学における教
育実践第1巻) 水曜社 1983年 213p
- 新堀通也編: 大学教授職の総合的研究—アカデミック・
プロフェッションの社会学 多賀出版 1984年 437
p
- 相良憲昭 (研究代表者) : 大学教授資格の史的変遷と諸
類型に関する研究 (昭和62・63年度科学研究費補助金
一般研究B 研究成果報告書) 1989年 112p
- ○
- 新堀通也他: 大学の教師 (座談会) 厚生補導
49 1970年 pp2-21
- 岡本洋三: 大学の教員人事制度についての若干の考察
鹿児島大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学篇)
25 1974年 pp174-196
- 鳴沢 暁: 期待される大学教師像 東海大学紀要 (学生
生活研究所) 4 1974年 pp63-70
- マーチン・トロウ (喜多村和之訳) : アメリカの大学教
師と学生—その意識・態度は変化したか I D E
181 1977年 pp81-90
- 有本 章: 米国における大学教員の任用と昇任 大学史
研究 1 1979年 pp36-50
- 馬越 徹: 韓国における大学教員の養成と任用 大学史
研究 1 1979年 pp65-77
- 和田英夫: 大学における教育と研究—体験的の大学教師論
大学時報 28 (145) 1979年 pp42-45
- 大学人論〈特集〉 I D E 210 1980年 pp2-54
- 浅野 誠, 小田切忠人: 大学教員の教育活動意識と授業
実態の検討—琉球大学教育学部教員対象アンケート分
析 琉球大学教育学部紀要 第1部 25 (1) 1981
年 pp221-243
- 奥島孝康他: 大学教育のあり方—良き研究者は良き教育
者か〈座談会〉 大学時報 32 (168) 1983年
pp20-34
- 黒羽亮一: 問われる大学教員の質 リクルート・カレッ
ジ・マネジメント 5 1984年 pp28-31
- 田村皖司: 大学教師の資質・能力を考える—1—一般教
育としての「教育学」担当の1年間の経験を通して
杉野女子大学紀要 21 1984年 pp49-78
- 宇治芳雄: 教官一般公募—信州大学経済学部の挑戦 中
央公論 (1985.8) 1985年 pp108-118
- 児玉邦二: 教員登用の開放 大学時報 34 (182)
1985年 pp58-61
- ディヴット・タイタス, 浅香 正: アメリカの大学にお
ける教員の雇用および昇進 大学時報 34 (183)
1985年 pp36-41
- 谷 啓輔: 細くてもよい, パイプ役に—民間人の教官登
用 大学世界 60 1985年 pp28-34
- 苅谷剛彦: T A制度にみる日米大学教育比較考 (1)
I D E 278 1986年 pp71-76
- 苅谷剛彦: T A制度にみる日米大学教育比較考 (2)
I D E 279 1987年 pp75-80
- 苅谷剛彦: T A制度にみる日米大学教育比較考 (終回)
I D E 280 1987年 pp72-77
- 堺 隆司: 「大学教員にも競争原理を導入」—広島市の
教育改革推進懇談会 内外教育 3842 1987年 p8

土屋博映：教師は教職者であることを忘れるな リク
ルート・カレッジ・マネジメント 26 1987年 p46

有本 章：アメリカの大学教授職における衰退の徴候と
背景 教育学論集 17 1988年 pp21-32

玉岡賀津雄：大学教授陣の監理運営参加問題 I D E
298 1988年 pp70-76

中川秀恭：教員資質の向上とこれからの私学 私学経営
159 1988年 pp39-47

文部省教育助成局教職員課：教員の資質能力の向上方策
等について—教育職員養成審議会答申(大学審議会〈特
集〉) 大学資料 103・104 1988年 pp130-159

いま大学教授は〈特集〉 I D E 304 1989年
pp5-52

3. ティーチング・学習

3.1 大学教育一般

日本経営者団体連盟教育特別委員会：大学改革実現に関する要望 1971年 3p

日本教育学会大学教育研究委員会：大学教育についての研究 中間報告（第30回大会研究発表報告書）1971年 199p

文部省大学学術局大学課：大学改革に関する各大学の審議状況について 1971年 58p

五十嵐良雄編：学生・単位・教師—だいがくかいたい—（反教育シリーズ2） 現代書館 1972年 126p

国立国会図書館：大学改革の進展状況に関する調査—日・米比較 1972年 86p

国立大学協会：大学改革の問題点に関するアンケート 1972年 103p

国立大学協会大学運営協議会：大学改革に関する調査研究報告書 1973年 108p

D. リースマン他（荒木泰子訳）：大学の実験—学問とマス教育 みすず書房 1973年 318p

日本教育学会大学教育研究委員会：宮城教育大学の大学改革 1974年 142p

平木典子：大学教育におけるカウンセリング 日本私立大学連盟 1978年 135p

松本賢治：大学教育と教育学 協同出版 1978年 318p

天城勲編：動きはじめた大学改革（大学から高等教育へ2） サイマル出版会 1979年 244p

寺崎昌男，田中征男編：日本の学力-大学教育 日本標準 1979年 401p

大沢 勝，高木修二編：日本の大学教育-現状と課題 早稲田大学出版部 1981年 297p

中央大学研究・教育問題審議会：中央大学における大学改革の歩み 1981年 58p

中央大学研究・教育問題審議会：中央大学における大学改革の歩み 資料編（I） 1981年 190p

中央大学研究・教育問題審議会：中央大学における大学改革の歩み 資料編（II） 1981年 261p

広島大学・大学教育研究センター：大学における教育機能 (Teaching) を考える—第9回（1980年度）研究員集会の記録—（大学研究ノート 第50号） 広島大学・大学教育研究センター 1981年 93p

琉球大学庶務部企画調査室：大学改革に関する答申書—琉球大学大学改革委員会— 1981年

大沢 勝他編：講座日本の大学改革2（大学教育の改革1） 青木書店 1982年 293p

大沢 勝他編：講座日本の大学改革3（大学教育の改革2） 青木書店 1982年 320p

広島大学・大学教育研究センター：大学における教授と学習-第10回（1981年度）研究員集会の記録（大学研究ノート 第54号） 広島大学・大学教育研究センター 1982年 99p

教師と学生（IDE教育資料 第44集） 民主教育協会 1983年 55p

春日耕夫：大学生の「在学態度」に関する研究—「高等教育の社会学」への一試行—（広島修道大学研究叢書 第24号） 広島修道大学 1983年 112p

岩田龍子：学生達が目を輝かすとき 龍溪書舎 1984年 195p

潮木守一：京都帝国大学の挑戦-帝国大学史のひとつま 名古屋大学出版会 1984年 211p

広島大学・大学教育研究センター：大学における教育と研究の接点を求めて—第12回（1983年度）研究員集会の記録—（大学研究ノート 第59号） 広島大学・大学教育研究センター 1984年 78p

岡 昌宏：大学教育論 行路社 1985年 131p

「大学教育に関する全国調査」プロジェクト：日本の大学教育の現状・課題・展望—カリキュラムとティーチングを中心に—（大学研究ノート 第62号） 広島大学・大学教育研究センター 1985年 87p

堀江宗生：大学教育の理論—大学法制と学生指導 鷹書房 1985年 213p

国際化と大学教育の課題—国際化時代の大学教育研究委員会報告（J.U.A.A. 内外大学関係情報資料11） 大学基準協会 1986年 91p

石田 剛：イエール大学の教育システム 溪水社 1986年 666p

石田 剛：高等教育の社会学—イエール大学の教育 溪水社 1986年 266p

喜多村和之：学生消費者の時代—アメリカの大学「生き残り」戦略 リクルート出版部 1986年 245p

潮木守一：キャンパスの生態誌 中央公論社 1986年 198p

R. ピアド, J. ハートレイ（平沢茂訳）：大学の教授・学習法 玉川大学出版部 1986年 451p

D. リースマン,（喜多村和之, 江原武一, 福島咲江, 塩崎千枝子, 玉岡賀津雄訳）：高等教育論—学生消費者主義時代の大学 玉川大学出版部 1986年 345p

天城勲編：相互にみた日米教育の課題—日米教育協力研究報告書— 第一法規出版 1987年 296p

石田 剛：イエール大学における学問開発システム 溪水社 1987年 609p

市川昭午編：教育の効果 東信堂 1987年 260p

K. E. エブル（高橋靖直訳）：大学教育の目的 玉川大学出版部 1987年 294p

喜多村和之：大学教育の国際化（増補版） 玉川大学出版部 1987年 318p

土戸 清：大学教育とカウンセリング・マインド—キリスト教の視点から 新地書房 1987年 138p

J. B. L. ヘファリン（喜多村和之, 石田純, 友田泰正訳）：大学教育改革のダイナミクス—カリキュラムをいかに変革するか 玉川大学出版部 1987年 227p

和光大学「大学教育における入門課程の実践的研究」グループ：他大学視察訪問記録その I 1986年度共同研究報告 II 1987年 11p

和光大学「大学教育における入門課程の実践的研究」グループ：大学入門期に関する和光大学生意識調査 1986年度共同研究報告 III 1987年 21p

和光大学「大学教育における入門課程の実践的研究」グループ：大学入門期指導に関する全国国公立大学調査 1986年度共同研究報告 I 1987年 24p

喜多村和之編：大学教育とは何か 玉川大学出版部 1988年 241p

関 正夫：日本の大学教育改革—歴史・現状・展望 玉川大学出版部 1988年 246p

E. ボイヤー（喜多村和之, 館昭, 伊藤彰浩訳）：アメリカの大学・カレッジ リクルート出版 1988年 363p

○ ○

田浦武雄：大学教育の論理—大学教育改革の教育学的視点 思想 522 1970年 pp131-142

宇川勝美：大学の大量化と教育方法の改革 香川大学一般教育研究 2 1972年 pp1-7

アメリカ高等教育における研究報告—3—大学の研究・教育体制の研究（高等教育総合研究・比較研究部門研究報告—3—） 国立教育研究所紀要 84 1974年 pp1-145

高橋正夫：教育尊重の大学づくりの提言—教育の不在・軽視を克服するために 自由 18（1・2） 1976年 pp182-193

扇谷 尚：一般教育と専門教育の内面的関連性の研究—統合理論の樹立をめざして— 大学論集 第5集 1977年 pp103-118

- 内田祥哉：一般教育と専門教育のあり方を考える〈インタビュー〉 大学世界 1 (3) 1978年 pp77-81
- 大田 堯：学問の体質をかえること（大学における教育の仕事〈特集〉／誌上シンポジウム・大学における教育の仕事） 教育 28 (11) 1978年 pp31-38
- 田中征男：大学教育研究運動の前進のために一日教組大学部教研第八回集会（教育情報） 教育 28 (1) 1978年 pp138-141
- 藤岡貞彦：大学教育を教育科学研究の対象に（大学における教育の仕事〈特集〉／誌上シンポジウム・大学における教育の仕事） 教育 28 (11) 1978年 pp6-7
- 堀尾輝久：学問の質の問い直しと教師としての自覚を（大学における教育の仕事〈特集〉／誌上シンポジウム・大学における教育の仕事） 教育 28 (11) 1978年 pp39-44
- 石川忠雄：大学の大量化と学生の意識と行動—大学はそれにどう対応すべきか（諸外国の学生指導の現況〈特集〉） 厚生補導 160 1979年 pp2-6
- 松永裕二：卒業生を通してみた大学教育への期待—因子分析法を用いて（岩橋文吉教授・岩井龍也教授退官記念） 九州大学教育学部紀要教育学部門 25 1979年 pp205-223
- 米山喜久治：大学教育—現場からの一試論 明治学院論叢 280 1979年 pp11-23
- 麻生 誠：学生の多様化と大学文化の変容 一般教育学会誌 第2巻 第1・2号 1980年 pp57-63
- 伊藤恒夫：大学教育への関心と熱意を 一般教育学会誌 創刊号 1980年 pp40-43
- 大山俊一他：教育・研究の充実について〈パネル・ディスカッション〉 私立大学の充実に関する研修会報告書—第3回 1980年 pp89-113
- 蒲生芳郎：大学における情操教育—一般教育とのかかわりを中心に 大学時報 29 (153) 1980年 pp94-97
- 喜多村和之：大学における Teaching の問題—日米比較的考察 IDE 212 1980年 pp50-59
- 喜多村和之：大学の教育機能についての再検討—大学における Teaching の問題（伊藤恒夫教授記念号） 松山商大論集 31 (4) 1980年 pp35-51
- 喜多村和之：高等教育におけるイノベーション—原理的・比較的考察の試み— 大学論集 第10集 1981年 pp17-38
- 橋高知義：大学生生活と学習意欲 中国・四国地区学生補導研究会紀要 第9集 1981年
- 大学生の学習生活〈特集〉 IDE 232 1982年 pp2-72
- 今日の日本—教師と学生〈特集〉 日本の科学者 17 (5) 1982年 pp4-30
- 大橋正夫，吉田俊和，坂西友秀：大学における教師—学生の間関係—1—（資料） 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 29 1982年 pp279-297
- 喜多村和之：大学における教育機能について—teaching とカリキュラムに関する比較的考察— 大学論集 第11集 1982年 pp103-122
- 丹野朝栄：「大学教育」論の前提—典型的な私立大学を手懸かりに 東洋大学社会学研究所年報 14 1982年 pp79-101
- 大学教育の改善〈特集〉 大学と学生 209 1983年 pp4-44
- 江尻美穂子他：現代の学生と大学教育—意欲のある学生に育てるには〈座談会〉 大学時報 32 (170) 1983年 pp20-37
- 大村好久：大学の教育機能に関する一研究（1）—受講態度調査の結果から— 武蔵大学人文学会雑誌 第15巻 第2号 1983年 pp59-70
- 喜多村和之：「教師の大学」と「学生の大学」のあいだ—D.Riesman の“Student Consumerism”論をめぐって— 大学論集 第12集 1983年 pp17-36
- 鶴岡靖彦：大学教育と高校教育との連続関係樹立について 一般教育学会誌 第5巻 第1号 1983年 pp2-8

- 鶴岡靖彦：学問の大衆化と学部教育の課題 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp75-81
- 西田耕三：大学教育改革のために—組織論からの考察をもとに（曲がり角に立つ大学教育〈特集〉） 経済評論 32（12） 1983年 pp45-55
- 室伏 武：大学における学習センター 亜細亜大学教養部紀要 28 1983年 pp29-45
- 井上英治：「大学教育と高校教育の連係」に想う 一般教育学会誌 第6巻 第2号 1984年 pp114-127
- 大村好久：大学の教育機能に関する一研究（2）—受講態度調査の結果から— 武蔵大学人文学会雑誌 第15巻 第4号 1984年 pp162-178
- 関 正夫：日本の大学におけるカリキュラムとティーチング—全国大学調査結果の概要 IDE 251 1984年 pp48-54
- 山崎博敏：大学におけるティーチングの組織論的文脈 大学論集 第13集 1984年 pp103-122
- 吉田俊和, 坂西友秀：大学における教師—学生の人間関係— 2—（資料） 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 31 1984年 pp211-225
- 大学教育に将来はあるか〈特集〉 現代の理論 22（5） 1985年 pp5-77
- 喜多村和之：アメリカ合衆国における高等教育研究—教育機能との関連において— 大学論集 第14集 1985年 pp311-330
- 黒羽亮一：今後の大学教育 一般教育学会誌 第7巻 第2号 1985年 p23
- 清水畏三：Undergraduate 教育の本質・使命を求めて 一般教育学会誌 第7巻 第1号 1985年 pp16-17
- 文部省大臣官房調査統計課：高等教育の質の改善—全米高等教育問題審議会報告の要点（アメリカ合衆国） 文部時報 1301 1985年 pp93-95
- 喜多村和之：アメリカン・キャンパス・レポート（8）—学生が作る履修案内／クラス・アクション リクルート・カレッジ・マネジメント 17 1986年 pp22-27
- 喜多村和之：大学の教育機能の見直し—一日米の大学改革論議から（諸外国の教育改革の動向〈特集〉） 文部時報 1310 1986年 pp29-34
- 喜多村和之：学生のための大学—一日米大学比較考 大学と学生 242 1986年 pp4-10
- 佐々木直：私学における特色ある教育研究活動について 大学と学生 241 1986年 pp27-33
- 竹内 啓：シリーズ教育を改革するために—2—大学教育はどうあるべきか 世界 493 1986年 pp219-225
- アメリカの学部教育〈特集〉 高等教育研究紀要 7 1987年 pp3-69
- 阿部美哉：大学のティーチングと大学の個性化 IDE 286 1987年 pp19-26
- 植村 進：高度の研究に裏打ちされた教育 大学時報 36（195） 1987年 pp104-109
- 片岡徳雄, 八並光俊：学生文化からみた大学教育の分析 広島大学教育学部紀要 第1部 36 1987年 pp43-51
- 須之部量三：大学の教育機能について 臨教審だより 29 1987年 pp20-21
- 関 正夫：学部教育改革の一方向—一般教育と専門教育の関連性を中心に（教育・医学における理想と現実〈特集〉） 教育と医学 35（1） 1987年 pp15-23
- 関 正夫：大学教育改革の方法試論—自己改革の条件の検討— 大学論集 第17集 1987年 pp1-22
- 竹内 啓：大学教育はいかにあるべきか 世界 505 1987年 pp72-81
- 角田昌子, 須田康之：大学教育の教育観分析 広島大学教育学部紀要 第1部 36 1987年 pp63-73
- 山崎博敏：高等教育における研究機能と教育機能—分化と統合 広島大学教育学部紀要 第1部 36 1987年 pp53-61
- 吉田準三：大学における研究と教育のジレンマ 大学時報 36（193） 1987年 pp94-97

黒羽亮一：一般教育と専門教育の融合—実現の可能性は私学にある 私学経営 160 1988年 pp2-3

古賀正義：地方私立大学の教育的機能に関する実証的分析—1—事例研究に向けての予備的考察 秋田経済法科大学経済学部紀要 8 1988年 pp89-101

関 正夫：日本の大学教育の改革方法に関する一考察—組織変革論と経営システム論からのインプリケーションを求めて— 大学論集 第18集 1988年 pp1-28

学生カウンセリング〈特集〉 大学と学生 第281号 1989年 pp4-43

谷口 且：良き大学教育とは 東海大学紀要（教育研究所教育工学部門） 第2号 1989年 pp51-54

3.2 授業・講義論

エリクセン, S. C. (塩見邦雄他訳)：高等教育の心理学 新曜社 1978年 217p

尾形 憲：学びへの旅立ち—マスプロ授業を超えて— 時事通信社 1981年 267p

海野道郎：知的練達をめざして—ゼミ活動の記録—（教育開発研究シリーズ5） 関西学院大学総合教育研究室 1985年 212p

渡辺 峻：講義室のうちそと 文理閣 1985年 146p

河西宏祐：戦後日本の争議と人間—千葉大学教養学部の教育実践記録 日本評論社 1986年 471p

大島襄二：野外共同調査論—フィールド・スタディの記録（教育開発研究シリーズ7） 関西学院大学総合教育研究室 1987年 251p

○ ○

寺崎昌男：大学における教育実践の自覚と教育改革—立命館大学法学部の事例に即して（大学教育の問題〈特集〉） 教育学研究 41 (4) 1974年 pp316-327

学生と教師〈特集〉 厚生補導 107 1975年 pp2-42

栗冠正利：教師と学生とのコミュニケーション論（学生と教師〈特集〉） 厚生補導 107 1975年 pp2-12

梅津耕作：学生の悩みと教師（学生と教師〈特集〉） 厚生補導 107 1975年 pp18-24

浦上清：甘やかすな・甘えるな（学生と教師〈特集〉） 厚生補導 107 1975年 pp25-30

中島直忠：大学教育における個性即応（個性即応の教育をめざして〈特集〉） 教育と医学 24 (11) 1976年 pp1068-1077

香川正弘：イギリスの大学における構外教育活動の実態（Ⅰ） 佐賀大学教育学部研究論文集 25 (Ⅱ) 1977年 pp49-72

大学における教育の仕事〈特集〉 教育 28 (11) 1978年 pp5-56

香川正弘：イギリスの大学における構外教育活動の実態（Ⅱ） 佐賀大学教育学部研究論文集 26 (Ⅱ) 1978年 pp73-96

田中征男：文献紹介・大学における教育実践について（大学における教育の仕事〈特集〉） 教育 28 (11) 1978年 pp51-56

中野 光：プロ・ゼミナールと私（大学における教育の仕事〈特集〉／誌上シンポジウム・大学における教育の仕事） 教育 28 (11) 1978年 pp24-31

松本賢治：大学の授業について 横浜国立大学教育学部紀要 18 1978年 pp1-18

三上和夫：学生生活と自治と大学教育実践（大学における教育の仕事〈特集〉／大学教育特別分科会に参加して） 教育 28 1978年 pp49-50

ヨゼフ・ロゲンドルフ他：大学における人間指導（特集・高等教育を語る）（座談会） ソフィア 28 (1) 1979年 pp36-55

浅野 誠：大学教育実践論の構想—その原理と教育主体の確立を中心にして 教育方法学研究 6 1980年 pp1-8

- 井上喜博：大学における教育の仕事—学生にとって魅力のある講義とは、教師とは（80年代の日本教育の担い手を育てる〈特集〉—「大学における教育の仕事」をめぐる三論稿について（〔教科研〕高野山・大学教育特別分科会報告）） 教育 30（1） 1980年 pp25-29
- 講義と教師〈特集〉 IDE 216 1981年 pp5-67
- 石田定夫：教育の工夫 大学時報 30（158） 1981年 pp34-37
- 鈴木慎一：マスプロ授業と成績評価 IDE 224 1981年 pp15-22
- 山川 純：よい授業とは学生に興味をおこさせる授業である（私の提言）（よい授業への方法—授業実践と体育の科学を結ぶ） 体育の科学 32（12） 1982年 pp906-907
- 尾形 憲：大学授業活性化の試み—足もとの教育改革から（大学生諸君！？—いま、大学をレポートする〈特集〉） 世界 463 1984年 pp77-90
- 高橋 勉：大学生の活字離れと教授学習過程の工夫 大学時報 33（175） 1984年 pp34-41
- 中島直忠：学生の学習目標と大学の教育目標 学校法人 7（5） 1984年 pp2-5
- 平田幸正：私の授業を考える 大学時報 34（183） 1985年 pp76-79
- 井上 茂：研究と講義 IDE 268 1986年 pp63-69
- 金子貞吉：大学教育とゼミナール 会報（大学基準協会） 58 1986年 pp51-64
- 河合秀敏：講義の周辺 大学時報 35（186） 1986年 pp100-103
- 桜井 勇：講義と体験学習 大学時報 35（187） 1986年 pp84-87
- 高橋貞夫：講義を考える—学生の実態調査から 大学時報 35（190） 1986年 pp86-91
- 中島昭和：「授業」哀歎 大学時報 35（186） 1986年 pp112-118
- 原田信一：講義雑考 大学時報 35（189） 1986年 pp74-80
- 平沢 茂：大学における教授・学習に関する一考察 亜細亜大学教養部紀要 34 1986年 pp1-17
- 三浦徳弘：講義アラカルト 大学時報 35（190） 1986年 pp92-95
- 渡辺 峻：マンモス大講義室からのため息 大学時報 35（186） 1986年 pp104-111
- 和田英夫：講義を考える 大学時報 35（187） 1986年 pp76-79
- 講義を考える〈特集〉 大学時報 36（194） 1987年 pp54-65
- 阿部美哉：教授の芸術性と表現力—高等教育のイノベーション⑩ リクルート・カレッジ・マネジメント 26 1987年 pp40-42
- 石綿知治：丑三つ時の野外授業—生きた講義に—工夫—実学的教育私論 大同工業大学紀要 23 1987年 pp169-191
- 高沢貞三：講義の意味について 大学時報 36（192） 1987年 pp94-97
- 武内 清：授業の中の学生たち IDE 281 1987年 pp16-22
- 村岡 亘：手さぐりの一年生教育 大学時報 36（195） 1987年 pp98-103
- 山本和郎：学習指導と学生相談室の役割—事例を通して考える（修学指導〈特集〉） 大学と学生 256 1987年 pp27-32
- 横山卓雄：いつまで頑張れるか—講義を考える 大学時報 36（196） 1987年 pp102-107
- 大学は高校の延長じゃない！—こんなにも違う授業の内容と取り組み方 週刊読売（1988.6.10） 1988年 pp19-21
- 大学と予備校の教室に潜り込んでみました！—早稲田大学予備校研究会 週刊朝日（1988.9.15） 1988年 pp198-201

なんと四国学院大学の教壇に！—黒木香「教養講座」の
カリキュラム 週刊文春（1988.6.23） 1988年
pp193-194

桂 文珍, 谷沢永一：ワーオ！教室はパニック状態—
関西大学講師初授業，壁に耳もあった121人の受講生
潮 351 1988年 pp108-117

桂 文珍：無知に甘えていることが恥ずかしい—連載：
桂文珍関西大学講義録② 潮 355 1988年
pp187-201

新堀通也・島田博司：授業を中心とした大学教育の現状
と課題 武庫川学院教育研究所研究レポート 1988年
pp1-44

杉林俊雄：夢また夢—講義を考える 大学時報
198 1988年 pp140-143

田中国夫：一回生相手の小集団教育実践から—講義を考
える 大学時報 199 1988年 pp130-135

富山和夫：講義と専門領域・ゼミナール等を巡って—講
義を考える 大学時報 202 1988年 pp102-107

中村尚司：あるく・みる・きく調査の演習—講義を考
える 大学時報 203 1988年 pp162-167

長谷川教佐：一般教育における前期ゼミナール教育の課
題と方法 麗沢大学紀要 46 1988年 pp109-134

有本 章：大学教育の見直し—授業改善の必要性 OK
Dニュース No.185 1989年 pp41-46

関 正夫：動機づけの科学と大学教師 医学教育 第20
巻・第1号 1989年 pp11-16

3.3 教授法

ロナルド T.ハイマン編（山田敏訳）：教授論—教授
の概念・理論・評価— 現代情報社 1972年 427p

余田博通：私のセミナー—大学における小集団教育の実
験（教育開発研究シリーズ1） 関西学院大学総合教
育研究室 1979年 105p

坂元 昂：授業改造の技法（授業研究全書9） 明治図
書出版 1980年 328p

仲原晶子：大学における授業実験（教育開発研究シリー
ズ2） 関西学院大学総合教育研究室 1980年 132
p

余田博通：続私のセミナー—大学における小集団教育の
実験（教育開発研究シリーズ3） 関西学院大学総合
教育研究室 1981年 132p

東海大学教育工学研究所プロジェクト研究委員会：学生
の授業に対する実態調査（東海大学教育工学研究所研
究報告別冊） 東海大学出版会 1982年 149p

広島大学・大学教育研究センター：講義のてびき—大学
の授業の改善のために（I）（RIHEシリーズ1）
広島大学・大学教育研究センター 1982年 8p

広島大学・大学教育研究センター：講義の実際と評価—
大学の授業改善のために（II）（RIHEシリーズ2）
広島大学・大学教育研究センター 1982年 8p

ロンドン大学教育研究所大学教授法研究部（喜多村和之
・馬越徹・東曜子訳）：大学教授法入門—大学教育の
原理と方法 玉川大学出版部 1982年 239p

国立大学一般教育担当部局協議会：「一般教育における
少人数教育（いわゆる教養ゼミナール）に関する総合
調査研究」報告書 国立大学一般教育担当部局協議会
1983年 81p

仲原晶子他：第三の授業実験—教職課程教科教育法—（教
育開発研究シリーズ4） 関西学院大学総合教育研究
室 1983年 193p

萩原 力：新時代の大学教育フィードバックシステム導
入の試み 旺文社 1983年 200p

W. J. マッキーチ（高橋靖直訳）：大学教授法の実際
玉川大学出版部 1984年 361p

和光学園教育実践シリーズ出版委員会：大学教師の実践
記録—和光大学の場合（和光学園教育実践シリーズ5）
明治図書 1984年 255p

D. A. ブライ（山口栄一訳）：大学の講義法 玉川大学
出版部 1985年 332p

- 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト
編：昭和57・58・59年度大学教育方法等改善経費による研究プロジェクト報告書 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト 1985年 194p
- 武内 清：大学におけるゼミ・演習の内部課程に関する実証的研究 1986年 135p
- F. B. ニュートン, エンダー, K. L. (岡 国臣, 中川 米造監訳)：大学の学生指導—成長モデルの理論と実践 玉川大学出版部 1986年 335p
- 関 之：大学における私の教育実験の報告(研究資料5) 中央学院大学大学院総合科学研究所 1987年 139p
- J. ローマン(阿部美哉, 塩崎千枝子他訳)：大学のティーチング 玉川大学出版部 1987年 358p
- K. E. エブル(箕輪成男訳)：大学教授のためのティーチングガイド 玉川大学出版部 1988年 283p
- 関 正夫・藤本黎時他：教育方法等改善専門委員会答申 広島大学将来構想検討委員会中間答申 1988年 110p
- 寺崎昌男：大学における教授法を考える(講演) 明治大学教職員組合情報宣伝部 1988年 15p
- L. エルトン(香取草之助監訳)：高等教育における教授活動—評定と訓練 東海大学出版会 1989年 260p
- 片岡徳雄・喜多村和之編：大学授業の研究 玉川大学出版部 1989年 264p
- ○
- 林 秀生：学内におけるワーク・サンプリング実習の考察 広島工業大学研究紀要 6(1) 1971年 pp183-194
- 田村 司：大学教育における一つの微視的な試み—「教育原理」(講義)の実験的な教育の方法 日本デュイ学会紀要 13 1972年 pp136-140
- 吉村喜好：大学教育の講義課程におけるR. A利用についての研究 長崎大学教育科学研究報告 20 1973年 pp17-40
- 長谷山八郎：私の講義—大学教授学の一つの試み 天理大学学報 25(4) 1974年 pp12-26
- 田村悦一：大講義改善の一施策—討論方式併用の経験の報告 立命館法学 129・130 1976年 pp727-745
- 山本銀次：小集団教育開発の一方 東海大学紀要(文学部) 25 1976年 pp75-84
- 伊藤堅二：私立大学における教育革命運動—立命館大学の小集団教育の実践(今日の大学問題と入試制の改革〈特集〉) 国民教育 33 1977年 pp135-151
- 浅野 誠：大学における講義についての教育方法論的考察(試論)—高等教育論の実践レベルでの展開のために 琉球大学教育学部紀要 第1部 22 1978年 pp113-122
- 浦田まり子：高等教育における教育方法の改革へ向けて—1—東京女子大学の学生と学習 東京女子大学論集 29(1) 1978年 pp165-188
- 汲田克夫：大学における私の教育実践—学生の学習意欲をどうひきだすか(大学における教育の仕事〈特集〉/誌上シンポジウム・大学における教育の仕事) 教育 28(11) 1978年 pp8-16
- 尾形 憲：感動の記録と「法政ランチ」—ある教育実践のなかから 経済志林 46(2・3) 1978年 pp227-256
- 坂元 昂：大学における授業改善の工夫 大学世界 1(5) 1978年 pp64-75
- 浦田まり子：高等教育における教育方法の改革へ向けて—2—東京女子大学論集 29(2) 1979年 pp219-246
- 大学の授業法〈特集〉 IDE 212 1980年 pp5-34
- 馬越 徹：ヨーロッパにおける大学教授法研究の動向 IDE 212 1980年 pp67-74
- 川合治男：現代における大学教育のあり方と教育方法 筑波フォーラム13 1980年 pp4-11
- 坂元 昂：大学教授法の改善 IDE 212 1980年 pp60-66

- 仁保寛二, 石桁正士, 西川喜良: スモール・ステップ・テストによる理解状態の把握 大阪電気通信大学研究論集人文・社会科学篇 16 1980年 pp105-119
- 平木典子: アメリカの大学における学生指導 大学時報 29 (154) 1980年 pp36-39
- 林 貞子他: 多人数教育における選択とコミュニケーション 東海大学紀要(学生生活研究所) 11 1981年 pp1-15
- 海保博之他: 私の授業法—その改善について 筑波フォーラム 17 1982年 pp93-100
- 田中弘子: 体験学習における Report の評価に関する一考察 新潟大学教育学部紀要人文・社会科学編 24 (1) 1982年 pp145-150
- 中沢次郎: 集団カウンセリングを応用したセミナー—学生の価値観の確立のために 大学と学生 191 1982年 pp36-44
- 林 貞子他: 多人数教育における「注意」の機能について 東海大学紀要(学生生活研究所) 12 1982年 pp35-41
- 山口栄一: 大学における教育方法改善の試み—ティームティーチングによる「教育方法学」の授業 玉川大学文学部論叢 23 1982年 pp27-49
- 山本銀次: “開発的”グループ経験の効果性 東海大学紀要(文学部) 38 1982年 pp82-98
- 木村良夫: 大学における授業の改革—私の経験から 日本の科学者 18 (3) 1983年 pp36-41
- 桑田正行他: 学生実験における学習技能の開発—調査用紙の作成とその改善 電気通信大学学報 33 (2) 1983年 pp271-284
- 谷 慶郎: 報告—MLによる集団指導 秋田大学教育学部教育研究所報 20 1983年 pp17-25
- 小川正賢: 大学教育における授業方法改善の可能性を求めて—同一時空性原理を越えて 茨城大学教育学部紀要教育科学 33 1984年 pp1-15
- 尾崎康弘: 多様性に富む多人数学生に対する一つの教育方法 一般教育学会誌 第6巻 第1号 1984年 pp27-32
- 栗山容子: 学習者自身による客観テストの作成と評価の試み 教育研究 国際基督教大学学報1—A 26 1984年 pp107-121
- 塩谷政憲: 大教室における体験学習導入の試み 国士館大学教養論集 18 1984年 pp91-93
- 山本純一: 事例教育法(ケース・メソッド)の実践的研究 甲南経営研究 24 (3) 1984年 pp1-31
- 大学の教材を考える〈特集〉 I D E 267 1985年 pp5-51
- 仲原晶子: 大学における教授法の改革 教育学科研究年報(関西学院大学) 11 1985年 pp41-43
- 平山満義: 大学教育の改善のための基礎研究—北海道教育大学における「多人数教育」に関する調査より 教育方法学研究(日本教育方法学会) 11 1985年 pp131-144
- 浅野 誠: 大学教育実践の教育学的検討をめぐって(教育実践と教育学研究〈特集〉) 教育学研究 53 (3) 1986年 pp258-267
- 林 義樹: 大学における授業実践—1—大学における授業の開発と学生の参画 季刊教育法 63 1986年 pp115-119
- 林 義樹: 大学における授業実践—2—第1部学生参加の実践的方法—1—確かな情報交流による授業の活性化—「感情ラベル」と学びの自覚化 季刊教育法 66 1986年 pp141-147
- 三浦典郎: 大学教育と教授法の改善 大学時報 35 (190) 1986年 pp96-100
- 大野連太郎: 多人数を対象とした講義式授業改善のために—講義を考える 大学時報 36 (197) 1987年 pp96-101
- 橋高通泰: 授業形式に変化を持たせて—講義を考える 大学時報 36 (197) 1987年 pp102-106

片岡徳雄他：高等教育における教授改善に関する社会的学的研究 教職カリキュラムにおける理論と実習の統合に関する実証的研究（広島大学教育学部教育方法改善委員会） 1978年

林 義樹：大学における授業実践—3—第1部学生参加の実践的方法—2—学生の知的生産力を鍛える授業—学びを開く「作品化法」のすすめ 季刊教育法 69 1987年 pp151-157

林 義樹：大学における授業実践—4—第1部学生参加の実践的方法—3—確かな認識力へと導く授業（前）—「ラベル思考」と「人間図解」 季刊教育法 70 1987年 pp172-176

日比野正己：学生の能力を開発する“おもしろ大学教授法”〈事例研究〉—住居学スゴロク・カルタを作成させる リクルート・カレッジ・マネジメント 27 1987年 pp48-50

ディートリッヒ・フォン・クヴァイス（別府昭郎訳）：西ドイツにおける大学教授学の発生と課題 教職・社会教育主事課程年報 No.11 明治大学 1988年 pp19-25

武内 清：社会学演習における小グループ研究の試みとその成果—武蔵大学での実験 武蔵大学人文学会雑誌 20 (2) 1988年 pp1-41

竹内弘高：ケース・メソッドを考える—ハーバードと一橋での経験から 一橋論叢 99 (4) 1988年 pp455-472

林 義樹：大学における授業実践—5—第1部学生参加の実践的方法—3—確かな認識力へと導く授業（後）—「ラベル思考」の原理とその活用 季刊教育法 71 1988年 pp130-135

林 義樹：大学における授業実践—6—第2部学生参画の実際的方式—1—授業に全員参画の発表活動を—クラスみんなの「認識の探検的登山法」—前— 季刊教育報 73 1988年 pp145-149

松本雄雄：多人数教育における教育技法の問題点—特に講義の客観的評価について 親和女子大学研究論叢 21 1988年 pp56-78

明治大学教職員組合：大学における教授法の実態—アンケートの集計結果— 明大組合ニュース 1422号 1988年 pp1-16

今井重孝：西ドイツの大学教授学—フーバーの論文に基づく紹介— 大学史研究 第5号 大学史研究会 1989年 pp39-43

別府昭郎：西ドイツにおける「大学教授学」制度化の動向 高等教育研究紀要 9（特集：主要国における高等教育改革—大学の大衆化は何をもたらしたか—） 1989年 pp57-68

3.4 教育工学

熊本大学教養部教育方法改善プロジェクト：一般教育への視聴覚教材導入の試み（報告） 1979年 29p

石桁正士（研究代表者）：電子計算機を用いた学習評価と概念構造の検出（昭和56年度科学研究費補助金—一般研究C—研究成果報告書） 1982年 99p

末武国弘：大学における教育方法の改善に関する教育学的研究 1985年 179p

○ ○

市川義孝：大学における視聴覚教育 経済集志 40（別号）（人文・自然科学編） 1970年 pp82-87

五十嵐耕一：英米の高等教育における放送利用について（特集・日本の電気通信政策） ジュリスト 530 1973年 pp60-67

末武国弘：教育工学センターの研究活動—12完—高等教育における教育改善の試み—東京工業大学の教育工学開発センター 教育と情報 216 1976年 pp25-33

関口茂久他：大学教育における教育工学的方法に関する研究—1—視聴覚教育機器の整備充実に関する報告 滋賀大学教育学部紀要教育科学 27 1977年 pp1-16

伊能 敬：Overhead Projector の利用について（杉本栄教授記念号） 武蔵大学人文学会雑誌 10 (1) 1978年 pp93-104

- 月本治豊：コンピューターを媒介とする教授と学生との対応について 岡山商大論叢 13 (3) 1978年 pp15-24
- 村本鉦他：金沢工業大学C A Iシステム (第1回) システム概要 事務管理 18 (1) 1979年 pp60-64
- 村本鉦他：金沢工業大学C A Iシステム (第2回) ハードウェアシステム 事務管理 18 (2) 1979年 pp60-64
- 村本鉦他：金沢工業大学C A Iシステム (第3回) ソフトウェアシステム 事務管理 18 (3) 1979年 pp60-64
- 村本鉦他：金沢工業大学C A Iシステム (第4回) コースウェアシステム 事務管理 18 (4) 1979年 pp59-64
- 村本鉦他：金沢工業大学C A Iシステム (最終回) システムの運用と管理 事務管理 18 (5) 1979年 pp59-64
- 木村捨雄：大学教育改善における Milestone C A Iシステムの実践的利用 筑波フォーラム 17 1982年 pp55-61
- 石桁正士他：データベースによる教育の支援 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp119-125
- 寺下陽一：金沢工業大学におけるC A I I D E 258 1985年 pp49-53
- 林 伸夫：パソコンC A I—想像を絶する日本の立遅れ—アメリカの教育界を歩いて I D E 258 1985年 pp54-60
- INS を利用した大学教育の実験—遠隔講義を始めた国際基督教大学 リクルート・カレッジ・マネジメント 16 1986年 pp12-16
- 広がる電子大学ネットワーク, 講義も試験もオンライン 日経パソコン (1986.6.6) 1986年 pp215-219
- 池田 央：コンピュータを大学教育にどう使うか リクルート・カレッジ・マネジメント 20 1986年 pp12-18
- 伊藤義之：大学教育におけるコンピュータ利用の可能性 天理大学学报 155 1987年 pp139-161
- 海野保樹：アメリカの高等教育におけるメディア利用 I D E 288 1987年 pp53-56
- 塩崎千枝子：コンピュータ通信の教育利用—アメリカンオープンユニバーシティの実践に学ぶ 教育と情報 358 1988年 pp36-41
- 徳武 靖：求められる「手厚い長期的取り組み」—諸外国における新教育機器に関する教員研修の実態報告書 内外教育 3931 1988年 pp2-5

3.5 学習

- 中村菊男：学生生活方法論—学習・レポート・ゼミ— 慶応通信 1974年 167p
- 林 達：学習作法—大学における合理的学習の実際と方法— 中央大学生協出版局 1975年 170p
- 橘高知義, 山田 幸：大学低学年における能動的学習の一試行 1980年 5p
- 東海大学学生生活研究所編：卒論・卒研—多様化する大学教育の中で— 東海大学出版会 1980年 174p
- 橘高知義：多人数クラスにおける能動的教授学習システム (岡山大学教養部教育方法等改善報告書 第5号) 1981年
- 橘高知義, 西平直美：課外学習実験と学習者の反応分析 1981年 48p
- 林 潔：大学生の学習技術 新書館 1981年 107p
- 大阪電気通信大学：学習意欲 (やる気) 調査結果 (第1集) 1982年 26p
- 大阪電気通信大学：学習意欲 (やる気) 調査結果 (第2集) 1983年 30p
- 尾形 憲：素顔の学生たち—学びとの出会い 青木書店 1983年 274p

林 潔：大学とスタディスキルズ訓練 新書館 1984年
127p

武内 清：現代大学生の受講態度とその関連要因の研究
—武蔵大生の行動とファッションを中心に—（武蔵大
学社会調査報告 No.6） 1985年 99p

大阪電気通信大学：学習意欲（やる気）調査結果（第4
集） 1986年 38p

齊藤喜門：大学・短大課題レポート作成の基本発想から
提出まで 蒼丘書林 1986年 157p

齊藤喜門：速く書く講義・講演筆記の技法 蒼丘書林
1987年 126p

○ ○

岡野 弘：学習指導に関する一調査結果 防衛大学校紀
要 27 1973年 pp655-668

矢野 弘：「教員—学生関係」の分析—「カレッジ・イ
ムパクト」研究（IV） 山口大学教育学部研究論叢
23 第3部 1974年 pp15-26

山本銀次：自己覚知に関する教育プロジェクトの検討
東海大学紀要（文学部） 21 1974年 pp90-100

井上正明：大学の授業における受講前と受講後の認知の
変容に関する実験的研究 福岡教育大学紀要
26 1976年 pp53-60

堀江宗生：イギリスの大学における学生指導の理論と実
際 東海大学紀要（学生生活研究所） 6 1977年
pp129-139

小宮隼人：学習主体の形成を求めて（大学における教育
の仕事〈特集〉／大学教育特別分科会に参加して）
教育 28（11） 1978年 pp45-46

深井耀子：もっと学習主体の分析を（大学における教育
の仕事〈特集〉／大学教育特別分科会に参加して）
教育 28（11） 1978年 pp48-49

岩崎重剛：学習意欲としてのやる気の調査とその処理—
1— 大阪電気通信大学研究論集 人文・社会科学篇
15 1979年 pp111-133

馬場道夫：大学教育における理解過程の研究—アナライ
ザの利用による 茨城大学教育学部紀要 教育科学
28 1979年 pp195-209

岩崎重剛，石桁正士：学習意欲としてのやる気の調査と
その処理—2—やる気の調査方法の信頼性 大阪電気
通信大学研究論集 人文・社会科学篇 16 1980年
pp87-104

静岡大学法経学会調査委員会：学生の勉学に関する意識
実態調査—1979年11月 法経研究（静岡大学人文学部）
28（3・4） 1980年 pp140-234

岩崎重剛，石桁正士：学習意欲としてのやる気の調査と
その処理—3—やる気と教授学習環境のかかわりの考
察 大阪電気通信大学研究論集 人文・社会科学篇
17 1981年 pp101-118

仁保寛二他：スモール・ステップ・テストによる理解状
態の把握—2— 大阪電気通信大学研究論集 人文・
社会科学篇 17 1981年 pp119-134

学生文化と学力〈特集〉 I D E 235 1982年
pp5-54

岩崎重剛他：学習意欲としてのやる気の調査とその処理
—4—大学等のやる気の比較研究 大阪電気通信大学
研究論集 人文・社会科学篇 18 1982年
pp93-116

仁保寛二，石桁正士：スモール・ステップ・マルチチ
ョイス・テストによる理解状態の把握—3— 大阪電
気通信大学研究論集 人文・社会科学篇 19 1983年
pp77-95

林 潔：学生の Study Skills について—2— 相談学
研究 15（2） 1983年 pp66-74

飯沼 稔：学生の勉学態度 東海大学紀要（学生生活研
究所） 14 1984年 pp63-70

岩崎重剛他：学習意欲としてのやる気の調査とその処理
—6—やる気の調査方法の信頼性 大阪電気通信大学
研究論集 人文・社会科学篇 20 1984年 pp49-66

田野崎昭夫：社会学学生の学習意識と学習条件の比較研
究 中央大学文学部紀要 117 1984年 pp63-139

林 潔：学生の Study Skills について—3— 相談学
研究 16 (2) 1984年 pp71-77

安藤延男：大学生の意欲減退と留年（学習意識を育てる
—動機づけの再考） 教育と医学 33 (2) 1985年
pp163-170

藤田一美他：学生の生活態度と学習への意欲 東海大学
紀要（学生生活研究所）15 1985年 pp82-89

R. M. Beard, I. J. Senior（白石義郎訳）：高等教育に
おける学生の動機づけ—1— 久留米大学論叢
35 (1) 1986年 pp43-52

遠藤郁夫：修学指導の現状と課題（修学指導〈特集〉）
大学と学生 256 1987年 pp7-12

沖原 豊：修学指導の在り方（修学指導〈特集〉） 大
学と学生 256 1987年 pp4-6

三上 修：新入生に対する修学指導—プレオリエンテー
ションから合宿研修まで中部大学における実例（修学
指導〈特集〉） 大学と学生 256 1987年 pp13-18

平沢 茂：大学生の学習不適應に関する研究 亜細亜大
学教養部紀要 36 1987年 pp57-72

坂井 純：留学生への学習指導—その1— I D E
297 1988年 pp71-76

坂井 純：留学生への学習指導—その2— I D E
298 1988年 pp62-69

4. カリキュラム

- 日本私立大学連盟：カリキュラム委員会・基礎科目・教授負担などに関するアンケート調査結果 1975年 15 p
- 国立大学協会第2常置委員会：大学の履修課程に関するアンケート（継続）結果の報告 1977年
- 広島大学・大学教育研究センター：大学教育とカリキュラム—第11回（1982年度）研究員集会の記録—（大学研究ノート 第57号） 広島大学・大学教育研究センター 1983年 91p
- 井門富二夫：大学のカリキュラム 玉川大学出版部 1985年 302p
- ○
- 香川大学一般教育部：授業科目区分の弾力化の措置に関する試案 香川大学一般教育研究 7 1975年 pp63-88
- 萩原 力：高等教育におけるカリキュラム開発について -1- 教育のシステム化を焦点に 専修商学論集 19 1975年 pp217-233
- 萩原 力：高等教育におけるカリキュラム開発について -3- 専修語学ラボラトリー論集 第4集 1975年
- 大学におけるカリキュラムの在り方〈特集〉 早稲田フォーラム 13 1976年 pp1-61
- 大学のあり方とカリキュラム—東北地区 I D E セミナー報告書 学生生活研究 1976年 pp26-40
- 井門富二夫：新大学におけるカリキュラム構成の基本原理解 筑波フォーラム 1 1976年 pp21-29
- 萩原 力：高等教育におけるカリキュラム開発について -2- 専修商学論集 20 1976年 pp189-206
- 茂木 勇：教育課程編成上の諸問題 筑波フォーラム 3 1977年 pp41-48
- 萩原 力：高等教育におけるカリキュラム開発について -4- そのデザインのプロセスに焦点を絞って 専修商学論集 23 1977年 pp133-150
- 萩原 力：高等教育におけるカリキュラム開発について—そのデザインのプロセスに焦点を絞って—5- 専修商学論集 24 1977年 pp95-122
- 浅川 淳：科目選択弾力化のために一科目選択弾力化の功罪 大学時報 27 (142) 1978年 pp52-55
- 篠置昭男：学科制度の改革をめぐるある経験—カリキュラムの自由化ないし弾力化に関連して 大学時報 27 (142) 1978年 pp56-60
- バーナード・クリッシャー：バーナード・クリッシャーのハーバード日記12—コア・カリキュラム必修課目制への逆戻りで質の向上をねらうアメリカの大学 週刊朝日 (1979.6.15) 1979年 pp145-149
- 清水畏三：ハーバード大がめざす“米国式”教養人像—コア・カリキュラム改革をめぐる 朝日ジャーナル (1979.7.27) 1979年 pp80-89
- バーン・ステッドマン（大塚豊訳）：アメリカの高等教育におけるカリキュラム改革の動向 大学論集 第7集 1979年 pp175-190
- 田浦武雄：アメリカ高等教育におけるカリキュラムの動向—アンダーグラデュエート段階を中心として 名古屋大学教育学部紀要 教育学科 26 1979年 pp1-10
- 中原章吉：アメリカの大学のカリキュラムについて—テキサスの一大学の実例を中心に 駒沢大学経済学論集 10 (4) 1979年 pp117-122
- 大野一石：大学カリキュラム類型化による図式 I D E 220 1981年 pp73-79
- マルコム・G・スクーリィ（船戸英夫訳）：新コア・カリキュラム順調に進行、とハーバードの一学部長語る、批判の声すくなくなる 大学時報 30 (159) 1981年 pp98-103
- 後藤邦夫：大学新生生に対するカリキュラム上の考慮について—とくに入試の実態と学生像の変化に関連して— 一般教育学会誌 第4巻 第2号 1982年 pp32-34

関 正夫：戦後期大学教育のカリキュラムに関する史的
考察—帝国大学における法学・医学教育を中心として
— 大学論集 第11集 1982年 pp123-152

井門富二夫：大学教育とカリキュラム—カレッジ・レベ
ルを中心として— 大学論集 第12集 1983年
pp139-162

金子忠史：アメリカのカレッジ・カリキュラムの現実と
動向 日本比較教育学会紀要 9 1983年 pp26-34

後藤邦夫：フレッシュマン・プログラムとしての桃山学
院大学のカリキュラムについて 一般教育学会誌 第
7巻 第1号 1985年 pp9-15

井門富二夫：新制（度）大学でのカリキュラム（1）
学校法人 10（12） 1988年 pp2-10

井門富二夫：新制（度）大学でのカリキュラム（2）
学校法人 11（1） 1988年 pp15-20

井門富二夫：新制（度）大学でのカリキュラム（3）
学校法人 11（2） 1988年 pp6-14

井門富二夫：新設学部カリキュラムの動向—人文・社会
系の学際課程を中心に I D E 293 1988年
pp5-14

関 正夫：旧制高等学校のカリキュラムに関する考察
一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp40-49

5. 一般教育

5.1 一般教育論

民主教育協会九州支部：資料大学の一般教育に関する改革案（各大学等の改革案抜粋） 1970年 140p

文部省：新しい大学設置基準—一般教育—（広報資料56） 1970年 182p

東京大学教養学部一般教育研究センター：戦後大学改革を語る—一般教育を中心に— 1971年 128p

お茶の水女子大学一般教育研究会：一般教育研究資料 昭和51年度（教育方法等改善経費総合科目研究プロジェクト本報告書） 1977年 119p

上智大学一般教育幹事会：一般教育に関する学生の意識 1977年 26p

福島大学：一般教育アンケート調査報告書 1977年 102p

東京工業大学：一般教育の現状と展望—一般教育の改革をめざす調査報告— 1978年 129p

関西大学一般教育等研究センター：一般教育等に関するアンケート調査報告書 1979年 139p

高等科学技術教育研究プロジェクト：諸外国における一般教育および科学技術教育改革の動向（大学研究ノート 第37号） 広島大学・大学教育研究センター 1979年 58p

大学基準協会：一般教育研究委員会中間報告—一般教育の回顧と展望—（大学基準協会 内外大学関係情報資料 7）大学基準協会 1980年 220p

和光大学一般教育委員会：一般教育報告 1979年度 No. 1 1980年 43p

徳島大学教養部：徳島大学における一般教育改善のためのプロジェクト報告書 1981年 224p

和光大学一般教育委員会：一般教育を考える 1981年 110p

和光大学一般教育委員会：一般教育を考える（続） 1982年 110p

お茶の水女子大学一般教育研究会：一般教育研究資料—昭和58年度— 1984年 46p

大学基準協会：新制度の入学者を迎える大学—昭和57年高校学習指導要領改訂と大学の一般教育— 一般教育研究委員会緊急報告（内外大学関係情報資料 8）大学基準協会 1984年 25p

千葉大学教養部・新潟大学教養部・金沢大学教養部・岡山大学教養部・長崎大学教養部・熊本大学教養部：6大学教育方法等改善プロジェクト「一般教育に関連した Remedial Course」に関する報告書 1985年 100p

近藤精造, 吉田 治：大学一般教養課程履修読本 蒼丘書林 1986年 174p

鈴木啓介：一般教育を考える（教育開発研究シリーズ6）関西学院大学総合教育研究室 1986年 188p

大学基準協会：大学における一般教育—一般教育研究委員会報告— 復刻版 大学基準協会 1987年 390p

越前喜六（代表者）：上智大学学内共同研究「大学教育改革と一般教育の使命」（一般教育研究資料集—これからの一般教育のあり方を目指して—） 1989年 388p

国庫助成に関する全国私立大学教授会連合：公開シンポジウム報告集 一般教育改革の基本的視点 1989年 41p

○ ○

伊東俊太郎：大学における一般教育 思想 550 1970年 pp109-113

小川博久, 菊地竜三郎：大学における一般教育の陶冶性について—学問の分化とその統合への可能性 教育学研究 37 (2) 1970年 pp11-22

- 国立大学協会教養課程に関する特別委員会：大学における一般教育と教養課程の改善について(昭和44年11月) 大学資料 34 1970年 pp78-84
- 新開長英：アメリカ合衆国及びカナダの諸外国における一般教育の動向について 九州産業大学教養部紀要 6 (2) 1970年 pp1-22
- 平井啓之：「一般教育」の20年 思想 522 1970年 pp119-130
- 平井久他：大学の一般教育を考える(座談会) 世紀 247 1970年 pp19-36
- 最首 悟：一般教育・その二重の幻 朝日ジャーナル 12 (17) 1970年 pp17-22
- 稲生勁吾：大学における人間形成と一般教育の問題 青山学院大学一般教育部会論集 11 1971年 pp177-184
- 小林博英：大学における一般教育の理論的基礎づけに関する一考察 アカデミア 81 1971年 pp179-197
- 滝内大三：一般教育の再検討 京都府立大学学術報告 人文 23 (別冊) 1971年 pp95-110
- 堀地 武：一般教育を対象とする科学の成立 香川大学一般教育研究 1 1971年 pp37-83
- 村井資長他：大学の一般教育課程の再検討(座談会) 大学時報 20 (98) 1971年 pp11-31
- 天野和夫：大学における人間形成—一般教育の意義— 一般教育研究(立命館大学) 10 1972年 pp1-13
- 菊地立身：一般教育を充実する方向—立命館大学を中心として— 一般教育研究(立命館大学) 10 1972年 pp14-27
- 小中 正：一般教育における順序的構造 鳥取大学教養部紀要 6 1972年 pp137-172
- 教養課程に対する人びとの態度 [京都大学の卒業生、在職者を対象とした調査] 人文(京大教養部)特別号 1973年 pp1-124
- 阿部重美：大学についての私見—2— 一般教育 神戸海星女学院大学・短期大学研究紀要 12 1973年 pp97-100
- 伊藤恒夫：大学における「一般教育」と新しい「教養」 松山商大論集 24 (3・4) 1973年 pp19-47
- 香川大学一般教育研究室：一般教育関係資料の調査について [各大学発行の要・便覧類リスト] 香川大学一般教育研究 3 1973年 pp111-120
- 玉蟲文一：大学における一般教育の立場から見た現下の教育問題 教育委員会月報 25 (6) 1973年 pp13-20
- 水野義男：一般教育に関しての主張 中京女子大学紀要 8 1973年 pp1-9
- 文部省大学学術局大学課：国立大学の教養課程の改善に関する動きについて 大学資料 48 1973年 pp42-52
- 一般教育〈特集〉 IDE 145 1974年 pp5-39
- 田中征男：現代日本における大学一般教育観の分析(大学教育の問題〈特集〉) 教育学研究 41 (4) 1974年 pp328-335
- 新田雅章他：中京大学における一般教育の現況と展望(座談会)—上— 中京大学教養論叢 14 (3) 1974年 pp149-195
- 渡辺格司：日本唯一の女子教養学部(帝塚山大学10周年記念/女子教養学部10年) 帝塚山大学論集 8 1974年 pp74-78
- 香川大学一般教育部一般教育研究室：一般教育部の研究活動に関する試案 香川大学一般教育研究 8 1975年 pp63-81
- 関 正夫：一般教育運動試論 大学論集 第3集 1975年 pp20-36
- 滝川一幸：一般教育とは何なのか?—その教育機能と目的の考察— 香川大学一般教育研究 8 1975年 pp1-11

- 日本科学者会議広島県支部大学部：広島大学の教養部改革・総合科学部創設問題—1—日本の科学者 10 (5) 1975年 pp218-222
- 日本科学者会議広島県支部大学部：広島大学の教養部改革・総合科学部創設問題—2—日本の科学者 10 (6) 1975年 pp268-273, 281
- 仙波克也：一般教育に関する実態および意見調査—福教大学生の意見を中心として 福岡教育大学紀要 第4部教職編 26 1976年 pp1-14
- 教養課程〈特集〉 I D E 177 1977年 pp5-58
- 大学における一般教育〈特集〉 早稲田フォーラム 16 1977年 pp1-44
- Daniel Bell: アメリカの大学における一般教育の改革 (要約資料) 早稲田フォーラム 16 1977年 pp89-92
- A. R. Williams: 高等教育における一般教育(要約資料) 早稲田フォーラム 16 1977年 pp80-88
- 石躍胤央：学生の学習権と一般教育 (今日の大学問題) 国民教育 34 1977年 pp108-129
- 遠藤真二：学生の勉学意欲と一般教育について (新入生指導〈特集〉) 厚生補導 129 1977年 pp2-8
- 扇谷 尚：一般教育の理念—その復活原理の探求 研究センター報 (関西大学一般教育等研究センター) 創刊号 1977年 pp48-52
- 関西大学一般教育等研究センター：[一般教育関係] 資料 研究センター報 (関西大学) 創刊号 1977年 pp59-147
- 寺崎昌男：日本の大学一般教育—その戦後史と課題 立教大学教育学科研究年報 21 1977年 pp10-25
- 友松芳郎：一般教育の理念—私にとっての一般教育とは何か 研究センター報 (関西大学一般教育等研究センター) 創刊号 1977年 pp39-47
- 山村嘉己：大学における一般教育の問題点 研究センター報 (関西大学一般教育等研究センター) 創刊号 1977年 pp1-9
- 阿部美哉：ハーバードの一般教育課程強化 I D E 194 1978年 pp66-71
- 石田武雄：高度テクノロジー時代の教養課程 大学世界 1 (3) 1978年 pp68-76
- 友松芳郎：一般教育における研究と教育 研究センター報 (関西大学一般教育等研究センター) 2 1978年 pp79-84
- 堀江宗生：教養課程論 東海大学紀要(学生生活研究所) 8 1978年 pp83-96
- 堀地 武：一般教育論の方法と価値問題—「国立大学一般教育責任体制に関する調査検討報告書」の作成を顧みて 香川大学一般教育研究 14 1978年 pp1-26
- 小野忠信：一般教育の目指すもの 明治学院論叢 277・278 1979年 pp1-24
- 高山達雄：一般教育の授業における学生の授業態度の変容について 秋田大学教育学部教育研究所報 16 1979年 pp76-104
- 一般教育を検討する〈特集〉 大学世界 3 (3) 1980年 pp8-38
- 阿部 宏：教養部改革と一般教育 一般教育学会誌 創刊号 1980年 pp18-23
- 飯島宗一：〈講演〉80年代の大学と一般教育 一般教育学会誌 第2巻 第1・2号 1980年 pp2-8
- 今村温之：オルテガの一般教育理論 一般教育学会誌 第2巻 第1・2号 1980年 pp69-75
- 扇谷 尚：一般教育の方向と研究課題 一般教育学会誌 創刊号 1980年 pp30-36
- 関西大学一般教育等研究センター：「一般教育等に関するアンケート調査」報告書 研究センター報 (関西大学一般教育等研究センター) 4 1980年 pp95-230
- 小林哲也：一般教育概念の国際比較 一般教育学会誌 第2巻 第1・2号 1980年 pp23-30
- 後藤邦夫：“一般教育”概念整理のための枠組み 一般教育学会誌 第2巻 第1・2号 1980年 pp9-16

- 清水長三：「大学大衆化」時代における一般教育—ハーバード改革：「一般教育の重要性を再主張」 一般教育学会誌 創刊号 1980年 pp2-11
- 寺崎昌男：戦後日本における一般教育理解の変遷と問題 一般教育学会誌 第2巻 第1・2号 1980年 pp17-22
- 友松芳郎：学的基礎をもつ一般教育はいかにして確立できるか 一般教育学会誌 創刊号 1980年 pp12-17
- 西川泰夫：学問の面白さ—一般教育を考える ソフィア 29 (1) 1980年 pp63-75
- 萩原 力：一般教育のビジョン 一般教育学会誌 創刊号 1980年 pp37-39
- 絹川正吉：一般教育における総合の意味—国際基督教大学における経験の立場から— 一般教育学会誌 第3巻 第2号 1981年 pp63-147
- 都築正信：一般教育再建の基盤—アダム・スミスの学問論の検討 一般教育学会誌 第3巻 第1号 1981年 pp13-21
- 西村嘉太郎：カナダ・アメリカの大学における一般教育科目の問題点 一般教育学会誌 第3巻 第1号 1981年 pp35-37
- 橋本昭一：一般教育の改革について—昭和54年度実施のアンケート集計結果を参考にしつつ 研究センター報（関西大学一般教育等研究センター）5 1981年 pp13-60
- 浜田哲郎：大学教養課程学生の進学動機と進学適性 一般教育学会誌 第3巻 第1号 1981年 pp51-55
- 吉村広司：一般教育の充実・高度化に関する一視点 日本の科学者 16 (7) 1981年 pp378-383
- 大学問題シンポジウム—一般教育・教養部改革の反省と展望 日本の科学者 17 (7) 1982年 pp384-390
- 一般教育・教養部改革の反省と展望 日本の科学者 17 (7) 1982年 pp48-54
- 麻生 誠：高校教育と大学一般教育の連節化 I D E 228 1982年 pp13-21
- 天城 勲：高等教育における一般教育〈講演〉 一般教育学会誌 第4巻 第2号 1982年 pp11-17
- 杉山逸男：一般教育の出発から 一般教育学会誌 第4巻 第2号 1982年 pp18-20
- 西村嘉太郎，若林淳之：アメリカの大学における一般教育等の諸問題について—調査報告書 大学資料 82 1982年 pp1-12
- 松井栄一：大学の一般教育と高等学校新教育課程 I D E 228 1982年 pp22-28
- 一般教育の目指すもの〈特集〉 明治学院大学一般教育部付属研究所紀要 7 1983年 pp1-88
- 一般教育を批判する〈特集〉 I D E 242 1983年 pp2-57
- 上村行世：大学一般教育の歴史—上—わが国における大学一般教育のルーツ 女子栄養大学紀要 14 1983年 pp231-237
- 大内 力：一般教育としてのゼミの試み 一般教育学会誌 第5巻 第1号 1983年 pp48-50
- 大田 堯：〈講演〉青年の人生選択と一般教育 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp2-12
- 近藤精造：国立大学教養部における一般教育 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp52-58
- 杉山逸男：一般教育における責任体制と今後の展望 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp64-65
- 丹生久吉：学部担当による一般教育—国立大学の例— 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp59-63
- 伊藤恒夫：「研究」と「教育」の統一を求めて 一般教育学会誌 第6巻 第2号 1984年 pp53-59
- 上村行世：大学一般教育の歴史—中—ヨーロッパのリベラル・アーツ教育の歴史とアメリカにおける一般教育の成立と発展 女子栄養大学紀要 15 1984年 pp51-57
- 鶴飼照喜，嶋田裕司：アメリカの大学における一般教育等の視察報告 大学資料 90 1984年 pp1-14

- 扇谷 尚：高等教育の多様化と一般教育 会報（大学基準協会） 51 1984年 pp1-15
- 扇谷 尚他：シンポジウム I「今後の一般教育のあり方」一般教育学会誌 第6巻 第2号 1984年 pp9-25
- 香月秀雄：〈講演〉放送大学と教養部のかかわりあい一般教育学会誌 第6巻 第2号 1984年 pp2-8
- 竹市良成：一般教育の改善をめぐる一提言 愛知学園大学論叢 一般教育研究 31（2） 1984年 pp243-300
- 館 昭，大倉久美子：現代アメリカにおける一般教育リバイバル—統合化と共同化の潮流— 大学論集 第13集 1984年 pp143-160
- 長谷川教佐：大学教育と一般教育—現代の学生に必要な教養とは何か 麗沢大学紀要 37 1984年 pp215-230
- 本間長世：大学と「教養」—リベラル・エデュケーションの新たな可能性 文化会議 184 1984年 pp2-11
- 名和又介：一般教育の抱える諸問題—一般教育学会第6会大会に参加して 鹿児島経大論集 25（3） 1984年 pp223-232
- 湯木昭八郎他：神戸大学における一般教育科目修得状況調査 一般教育学会誌 第6巻 第2号 1984年 pp60-67
- 大学の一般教育〈特集〉 教育学研究 52（1） 1985年 pp52-63
- 飯塚信雄：大学の一般教育について 明治大学教養論集 184 1985年 pp49-102
- 上村行世：大学一般教育の歴史—下—わが国戦後における大学一般教育の導入と発展 女子栄養大学紀要 16 1985年 pp89-97
- 大浦猛：教養課程の概念と改革 大学世界 61 1985年 pp8-15
- 清水畏三，讃岐和家：シンポジウム世界の大学教育，特にアメリカとヨーロッパにおける一般教育の最近の動向 一般教育学会誌 第7巻 第2号 1985年 pp14-22
- 長谷川教佐：麗沢大学における一般教育の改革 一般教育学会誌 第7巻 第1号 1985年 pp2-8
- 60年度〔國土館大學〕教養学会シンポジウム 國土館大学教養論集 22 1986年 pp71-98
- 一般教育〈特集〉 大学と学生 249 1986年 pp4-39
- 天野郁夫他：大学の一般教育について 臨教審だより 16 1986年 pp6-15
- 扇谷 尚：高等教育における一般教育の位置づけ—一般教育と専門教育の統合を目指して— 一般教育学会誌 第8巻 第2号 1986年 pp75-79
- 勝又猛：教養課程の改善についての一試論 大学世界 67 1986年 pp30-35
- 喜多村和之：一般教育はなぜ問題とされるのか—『一般教育研究委員会報告』（1951）をめぐる考察— 大学論集 第16集 1986年 pp25-40
- 清原岑夫：高等教育における一般教育 一般教育学会誌 第8巻 第2号 1986年 pp80-83
- 小池和男：今日における一般教育の動向—飯島宗一氏のreport 扇谷尚氏の問題提起について 香川大学一般教育研究 29 1986年 pp127-143
- 式部 久：最近のアメリカにおける一般教育改革の動向について 大学資料 99 1986年 pp36-48
- 式部 久：一般教育の本質と今後の運営 一般教育学会誌 第8巻 第2号 1986年 pp84-88
- 杉浦忠夫：危機に立つ一般教育—1— 明治大学教養論集 190 1986年 pp213-235
- 中川秀恭：〈講演〉リベラル・アーツ・エデュケーションとゼネラル・エデュケーション 一般教育学会誌 第8巻 第2号 1986年 pp2-6
- 一般教育再考〈特集〉 I D E 283 1987年 pp7-60
- 大学教育の活性化と一般教育〈特集〉 筑波フォーラム 25 1987年 pp14-235
- 江原武一：学部教育における一般教育改革の動向 高等教育研究紀要 7 1987年 pp3-26

絹川正吉：一般教育の課題と改革の方策（これからの大学教育〈特集〉） 大学と学生 262 1987年 pp7-11

楠川絢一：大学一般教育の在り方をめぐって—展望と課題（大学改革の推進〈特集〉） 文部時報 1330 1987年 pp39-44

近藤精造：千葉大学における一般教育の実施経過とその課題 千葉大学教養部研究報告 B 20 1987年 pp263-273

坂井昭宏，越前喜六，本多正昭，森 毅，館 昭，讃岐和家，式部 久：シンポジウム I 現代社会における一般教育はいかにあるべきか—理念と方法の再検討— 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp12-33

杉浦忠夫：危機に立つ一般教育—2— 明治大学教養論集 202 1987年 pp115-137

福田敏一：現代社会における大学の使命と一般教育（迷走する大学〈特集〉） 世界 505 1987年 pp57-71

福田敏一：〈講演〉現代社会における大学の使命と一般教育 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp2-11

広がりをはじめた一般教育の改革—3 大学の実践事例を見る リクルート・カレッジ・マネジメント 30 1988年 pp36-39

河原 宏：一般教育タテ割りの持つ問題 会報（大学基準協会） 62 1988年 pp28-38

友松芳郎：一般教育改革の構想 一般教育学会誌 第10巻 第2号 1988年 pp68-70

本間長世：教養学部の問題 会報（大学基準協会） 62 1988年 pp1-13

松尾欣治：大学の個性化と一般教育 一般教育学会誌 第10巻 第2号 1988年 pp84-87

小池和男：一般教育の理念と課題をめぐって 香川大学一般教育研究 第35号 1989年 pp1-13

鈴木啓介他：大学一般教育の再検討 総研論集 第11号 関西学院大学総合教育研究室 1989年 pp3-24

5.2 一般教育カリキュラム・総合科目

民主教育協会中国支部：一般教育課程の再編成について 第2回 学生生活研究セミナー資料 1970年 8p

大畑荘一（帯広畜産大学）：総合科目（総合講義）開設状況資料集 1976年 145p

広島大学総合科学部総合科目研究委員会：全国大学総合科目調査—実施状況集計— 1976年 146p

広島大学総合科学部総合科目研究委員会：広島大学における総合科目の現状—その2— 1979年 49p

国立大学一般教育担当部局協議会：「総合科目」関係資料調査報告書 1981年 96p

原 一雄：国際基督教大学における一般教育プログラムの変遷（1.カリキュラム編） 1988年 106p

○ ○

上野直蔵：必修の一般教育科目 会報（大学基準協会） 22 1971年 pp1-12

楠 正三：一般教育カリキュラム試案—昭和薬科大学の場合 昭和薬科大学紀要 6 1971年 pp66-83

笹本正樹：一般教育カリキュラムのための哲学—フィリップ・H・フェニックス「意味の領域」について 香川大学一般教育研究 1 1971年 pp13-25

仲原晶子，倉田和四生：一般教育における総合コースの諸問題 関西学院大学論攷 18 1971年 pp121-140

山内重幸：運動としての一般教育の基本点をどう抑えるか—付「共同研究科目」中間総括 香川大学一般教育研究 1 1971年 pp1-11

堀地 武：後期一般教育科目について—くさび型カリキュラムおよび一般教育責任体制との関連 香川大学一般教育研究 3 1973年 pp45-61

村瀬 裕也：一般教育演習科目について 香川大学一般教育研究 3 1973年 pp11-17

- 扇谷 尚：アメリカの大学における一般教育思想に関する一考察—カリキュラム統合を中心として— 大阪大学人間科学部紀要 第1巻 1975年 pp153-186
- 相見霊三：総合科目の評価と諸問題 筑波フォーラム 3 1977年 pp49-62
- 橋本昭一：一般教育課程の体系について 研究センター報（関西大学一般教育等研究センター） 2 1978年 pp14-36
- 山村嘉己：総合コースを考える—総合コースの改善に関する教養部長への「答申」をめぐって 研究センター報（関西大学） 2 1978年 pp48-51
- 川崎十四三：一般教育における総合コースの一つの試み（大学・教育を考える） 日本の科学者 14（5） 1979年 pp246-249
- 松井宗彦：教養部における総合科目—総合科目にまつわる「若干の検討」および「総合科目を発展させる道」 茨城大学教養部紀要 11 1979年 pp151-154
- 伊藤虎丸：戦後大学改革が残した課題としての一般教育—和光大学における「総合科目」の実践報告を中心に〈講演〉 研究センター報（関西大学一般教育等研究センター） 4 1980年 pp39-55
- 糸山東一：総合科目に関する考察 香川大学一般教育研究 20 1981年 pp1-12
- 井上英治：一般教育におけるコア総合科目の試み—上智大学における「人間学」の場合を踏まえて— 一般教育学会誌 第3巻 第2号 1981年 pp55-62
- 遠藤眞二：一般教育としての総合科目 一般教育学会誌 第3巻 第1号 1981年 pp2-7
- 遠藤眞二：一般教育としての総合科目 一般教育学会誌 第3巻 第2号 1981年 p10
- 扇谷 尚：一般教育の本質面から見た大学第一学年プログラム 一般教育学会誌 第4巻 第2号 1982年 pp27-31
- 山本繁綽：総合科目と一般科目の収斂について 研究センター報（関西大学一般教育等研究センター） 6 1982年 pp27-36
- 扇谷 尚：カリキュラム統合の研究—一般教育の新しいパラダイムの建設を目指して— 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp13-18
- 勝又 猛：一般教育の改善について—総合科目などをめぐって（大学教育の改善〈特集〉） 大学と学生 209 1983年 pp7-11
- 小池和男：中国四国地区の大学における、いわゆる「総合系」学科目の現状—「実験」、「非実験」の区分を中心に 香川大学一般教育研究 25 1984年 pp231-236
- 近藤精造：大学のカリキュラムにおける一般教育 一般教育学会誌 第8巻 第2号 1986年 pp68-74
- 大西珠枝：名古屋大学における一般教育改善の歩み—カリキュラム改革を中心に 大学資料 101 1987年 pp45-56
- 塩谷政憲：今、なぜ、総合科目か（抄） 国土館大学教養論集 24 1987年 pp121-123
- 式部 久：一般教育のカリキュラムと実施体制（Ⅱ） 高等教育研究紀要 7 1987年 pp39-56
- 原 一雄：一般教育のカリキュラムと実施体制（Ⅰ） 高等教育研究紀要 7 1987年 pp26-38
- 本家真澄：アメリカの大学における一般教育の実情視察報告：ハーバード大学のコア・カリキュラム—その理想と現実 大学資料 100 1987年 pp1-10
- 渋谷達明：総合科目について 会報（大学基準協会） 62 1988年 pp52-63
- 長田雅喜，中田 実：名古屋大学における総合科目の現状と今後の方向 一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp2-5
- 永平幸雄：科学入門（総合科目）の経験から 一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp31-37
- 吉田 治：千葉大学教養部における総合科目設置の経緯とその問題点 一般教育学会誌 第10巻 第1号 1988年 pp22-27

6. 専門教育

- 広島大学・大学教育研究センター：大学における専門教育 第5回(1976年度)研究員集会の記録一(大学研究ノート 第31号) 広島大学・大学教育研究センター 1977年 80p
- 大学基準協会専門教育研究委員会：大学における専門教育の問題点一専門教育研究委員会中間報告(J. U. A. A. 内外大学関係情報資料 9) 大学基準協会 1985年 80p
- 大学基準協会専門教育研究委員会：大学における専門教育の問題点一専門教育研究委員会中間報告(追録) 大学基準協会 1986年 27p
- ○
- 大学と職業教育〈特集〉 I D E 183 1977年 pp5-59
- 職業教育と大学〈特集〉 I D E 197 1979年 pp5-40
- 専門領域と教育一大学のカリキュラムを考える〈特集〉 I D E 231 1982年 pp2-59
- 専門教育と一般教育〈特集〉 大学時報 34 (180) 1985年 pp50-103
- 大学における専門教育の改善充実について(まとめ) 会報(大学基準協会) 57 1986年 pp50-60
- 天城 勲：学部の専門教育 I D E 269 1986年 pp2-4
- 豊村泰彦：大学の専門教育, 国際化で提言 私学経営 134 1986年 pp4-6
- 楠山三香男：専門職への道程 学遊 2 (5) 1988年 pp24-25
- 黒羽亮一：大学と成人職業教育 I D E 290 1988年 pp12-18
- グループ・データリサーチ：大学における専門教育と職業一DATAFILE 4 学遊 2 (1) 1988年 pp42-43
- 文科系の学部教育と学生〈特集〉 I D E 302 1989年 pp5-51
- 理科系の学部教育と学生〈特集〉 I D E 303 1989年 pp5-59

7. 大学評価

7.1 大学評価

文部省大学設置審議会：短期大学設置基準の制定について一答申一 1975年 20p

ニューイングランド高等教育機関協会（上野直蔵訳）：高等教育機関協会加入校の基準 自己評価—その目的と方法—（大学基準協会 内外大学関係情報資料 5）大学基準協会 1978年 23p

金子忠史：米国における基準協会について—資格認定をめぐる諸問題—（大学基準協会 内外大学関係情報資料 6） 大学基準協会 1979年 41p

日本私学振興財団私学振興勉強会：高等教育についてのアクレディテーション論集 1980年 264p

大学基準協会：財団法人大学基準協会基準集（大学基準協会資料 第33号） 大学基準協会 1982年 203p

慶伊富長編：大学評価の研究 東京大学出版会 1984年 291p

大学・短大の設置基準と設立実務—質的拡充, 改組転換, 個性化への実践指針—追補版（高等教育シリーズ 第5集） 地域科学研究会 1987年 632p

大学基準協会：大学基準協会基準集 昭和62年7月訂補（大学基準協会資料第36号） 大学基準協会 1987年 202p

大学基準協会自己評価実施方法検討委員会：大学自己評価の実施方法に関する検討結果について（委員会報告） 1987年 21p

筑波大学企画調査室：筑波大学の自己評価と改革の指標 1988年 150p

関西大学社会学部社会調査室：かくれた大学評価 1989年 97p

西部地区基準協会（飯島宗一訳）：アクレディテーション・ハンドブック（大学設置に関する基準及び大学の評価等に関する調査研究 別冊） 大学基準協会 1989年 238p

大学基準協会：大学設置に関する基準及び大学の評価等に関する調査研究—大学設置・大学評価調査研究委員会報告 1989年 271p

日本大学教育制度研究所：私立大学における教育・研究に関する総合的評価—日本大学を中心として— 1989年 170p

関東学院大学人文科学研究所：卒業生における在学経験の評価に関する調査（地域社会における明日の大学の役割—中間報告書—） 1989年 77p

○ ○

原 一雄他：大学教育の総合評価—4—在学生・卒業生・教職員による学生生活の評価の比較研究 国際基督教大学学報（教育研究） 16 1972年 pp35-54

土橋信男：大学の教育的環境の継時的研究—1977年から1979年における北星学園大学の教育的環境について 北星論集 17 1979年 pp115-153

吉川政夫：大学教育のための診断的評価に関する研究 長野大学紀要 1（1・2） 1979年 pp51-59

原 一雄他：国際基督教大学における教育環境調査の試み 教育研究 国際基督教大学学報1—A23 1980年 pp111-129

大学の学習と評価〈特集〉 I D E 224 1981年 pp2-53

植田淳子他：ICUの教育的環境の調査研究—他大学との比較 教育研究 国際基督教大学学報1—A26 1984年 pp65-83

湯田雅夫：私立大学の自己評価と会計の在り方 独協大学経済学研究 41 1985年 pp1-23

細井克彦：「大学設置基準」に関する一考察 人文研究（大阪市立大学文学部） 38（9） 1986年 pp595-622

額額教三：大学の評価 大学時報 36（196） 1987年 pp37-39

- 須永哲雄：一般教育の自己評価—国立大学の場合— 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp34-36
- 武重雅文, 西井克泰：香川大学生の自画像—比較の視点から (Faculty Development <特集>) 香川大学一般教育研究 31 1987年 pp133-178
- 原 一雄：一般教育の自己評価—私立大学の場合— 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp37-43
- 目羅公和：大学評価とリースマン 日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要 18 1987年 pp177-182
- 安原義仁：イギリスにおける大学評価の動き 学術月報 第40巻 第10号 1987年 pp34-38
- 大学の基準をめぐる諸問題 <特集> 会報 (大学基準協会) 60 1988年 pp4-89
- ゴーマン・レポートによる世界の大学ランキング—わがトーダイは67位 リクルート・カレッジ・マネジメント 32 1988年 pp12-15
- <論壇> 大学評価と個別自己点検 全私学新聞 第1086号 (1988.12.23) 1988年
- アメリカでの大学評価 <特集> I D E 298 1988年 pp5-55
- 阿部美哉：アメリカ大学のアクレディテーション I D E 298 1988年 pp16-22
- 奥川義尚：大学の評価研究—アメリカにおける大学院の場合—1— Cosmica 地域研究 17 1988年 pp1-33
- 喜多村和之：大学評価の時代—競争社会アメリカにみる I D E 298 1988年 pp5-15
- 喜多村和之：大学評価の可能性についての考察 大学論集 第18集 1988年 pp53-74
- 慶伊富長：大学の教育機能活性化のために：学位授与権の交付と評価システム導入 大学と学生 274 1988年 pp10-11
- 慶伊富長：アメリカの大学評価—工学チームの現地訪問同行記 I D E 298 1988年 pp37-43
- 鈴木正男：大学の基準と一般教育—立教大学における歩み・現状・課題 会報 (大学基準協会) 62 1988年 pp39-51
- 西原春夫：大学の自己評価 大学時報 200・201 1988年 pp34-49
- 原 一雄：卒業生による I C U 在学経験の評価 国際基督教大学公開講演集 第3集 1988年
- 千 栄子・ムルハーン：大学も品質管理の時代—他流試合の日は近い 中央公論 1235 1988年 pp120-130
- 奥川義尚：大学の評価研究—アメリカにおける大学院の場合 (その2) 京都外国語大学 コスミカ X VIII 1989年 pp1-32
- 喜多村和之：何がアメリカの大学を強くしたのか—ぬるま湯・日本にはない評価と競争— エコノミスト (1989.3.7) 1989年 pp79-85
- 関 正夫：「大学の自己評価の方法」を考える (基調提案) 一般教育学会誌 第11巻 第1号 1989年 pp14-20
- 手塚武彦：大学評価についての訪問調査 フランス教育学会通信 13号 1989年 p3
- 手塚武彦：『大学評価』の調査訪問記 日仏教育学会会報 第14号 1989年 pp7-11
- 手塚武彦：フランスの大学評価をめぐる きょうどう 第3巻 第1号 1989年 pp17-19
- 堀地 武：「大学の自己評価」をめぐる経過と展望 香川大学一般教育研究 第35号 1989年 pp15-56

7.2 教員・授業評価

- 東海大学教育工学研究所編：大学教育における教育効果の評価・測定に関する研究 東海大学出版会 1978年 106p
- 国立大学協会第1常置委員会：大学における教員評価について 1987年 国立大学協会 17p

- ○
- 篠置昭男：大学における教育評価の根本問題—特に評価・試験制度に関連して 人文論究（関西学院大学）21（4） pp1-19
- 木村正史：アメリカの大学における TEACHER/COURSE EVALUATION カンサス大学の場合 経済理論 136 1973年 pp99-109
- 武田勝彦：学生による教員勤評—ハワイ大学を中心に 早稲田フォーラム 1 1973年 pp47-54
- 教員評価の企画・高等教育資料集〈文献紹介〉 外国教育事情 創刊号 1975年 pp37-42
- 荒井忠男：大学教授にも勤務評定—東京理科大の危険な試み エコノミスト 53（52） 1975年 pp32-34
- 三浦徳弘：教員評価の企画・高等教育資料集 外国教育事情 創刊号 1975年 pp37-42
- 今栄国晴：米国における学生の大学授業評価 厚生補導 156 1979年 pp47-52
- 林 敏彦：学生が講義を評定する 経済セミナー 291 1979年 pp86-91
- 井上正明：大学の授業評価に関する実証的研究—2—学生による教師の授業評価 福岡教育大学紀要 第4部 教職編 30 1980年 pp155-168
- 柿内賢信：理解についての評価の事例研究 一般教育学会誌 第2巻 第1・2号 1980年 pp40-49
- 武田勝彦：学生に“勤評”される教授たち—変身，充実をはかる米国の大学 月刊教育の森（1980年1月）1980年 pp44-51
- 海保博之，服部 環：大学における授業の学生による評価 IDE 224 1981年 pp39-45
- 橘高知義：大学教育での自主学習と評価 応用物理 第51巻 第6号 1982年
- 高橋秀行：教官・学生双方による授業評価 一般教育学会誌 第5巻 第2号 1983年 pp38-48
- 村瀬信也：学生による講義評価システム—大学教師の自己点検のために 大学時報 32（173） 1983年 pp80-85
- 喜多村和之：アメリカン・キャンパス・レポート（3）—評価をうける大学教授 リクルート・カレッジ・マネジメント 12 1985年 pp22-26
- 多屋頼典：学生からみた教養部 岡山大学教養部紀要 21 1985年 pp15-37
- 三戸 公：アメリカにおける「年次教員評価」書式と実例（資料） 立教経済学研究 38（4） 1985年 pp186-198
- 井上正明：大学の授業評価に関する実証的研究—5—ビデオ教材視聴によるイメージ変容の実験的研究 教育方法学研究（日本教育方法学会） 12 1986年 pp101-109
- 安岡高志：学生による講義評価 一般教育学会誌 第8巻 第1号 1986年 pp46-59
- 安岡高志他：学生による講義評価 一般教育学会誌 第8巻 第2号 1986年 pp50-60
- 荒井克弘：教育改革から教育評価の改革へ—「テストの国」アメリカ 内外教育 3846 1987年 pp10-11
- 片岡徳雄，八並光俊：高等教育における教授学習過程の研究—学生評価を中心に— 一般教育学会誌 第9巻 第2号 1987年 pp44-50
- 竹中治彦：授業評価についての一試行 人文科学研究（新潟大学人文学部） 72 1987年 pp49-65
- 大学教員評価の制度化（ニュージーランド）—海外情報 IDE 292 1988年 pp48-50
- 業績乏しい大学教授の勤務評定を（論点） 読売新聞（1988.7.28） 1988年
- 伊藤 敬：国立大学の「活性化」＝「教員評価システムの形成」か 日本の科学者 23（6） 1988年 pp35-37
- 岩永雅也：アメリカの大学における教員評価の方法 IDE 298 1988年 pp23-30

北原文雄：教職員の勤務評価の問題—とくに本学の教育
勤務評価について— 私学振興 第210号 1988年

牧 正英他：今日の大学教育（1）：学生への評価—今
日の大学教育：近畿地区 I D E セミナー報告書
（学生生活研究：1987年度版） 27 1988年
pp37-44

吉川政夫他：大学の授業環境に関する研究1—教室環境
評価の試み 東海大学紀要（教育研究所教育工学部門）
第2号 1989年 pp19-30

安岡高志他：学生による講義評価—学生の質と講義評価
の関係について 東海大学紀要（教育研究所教育工学
部門） 第2号 1989年 pp31-34

英 文 編

1. ファカルティ・デベロップメント

- Eble, K. E.: Career Development of the Effective College Teacher. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 089 630) Washington, D.C.: American Association of University Professors 1971.
- Greenaway, H.: Training of University Teachers: A Survey of its Provision in Universities in the United Kingdom (SRHE Pamphlet 2). Guildford: Society for Research into Higher Education 1971 32p.
- Byram, H. M.: Some Problems in the Provision of Professional Education for College Teachers. New York: AMS Press 1972 210p.
- Dressel, P. L., & M. M. Thompson.: Educating College Teachers by Degrees. Iowa City: American College Testing Program 1974.
- Group for Human Development in Higher Education.: Faculty Development in a Time of Retrenchment. New Rochelle, New York: Change Magazine Press 1974.
- Harding, A. G.: Training of Polytechnic Teachers. (SRHE Pamphlet 3) Guildford: Society for Research into Higher Education 1974.
- Bergquist, W. H., S. R. Philips, & G. Quehl.: A Handbook for Faculty Development. Vol.1 Washington, D.C.: Council for the Advancement of Small Colleges 1975.
- Gaff, J. G.: Toward Faculty Renewal: Advances in Faculty, Instructional, and Organizational Development. San Francisco: Jossey-Bass 1975 244p.
- Simerly, R. G.: Faculty Development in Higher Education: From Myths to Research Findings. (Annual Forum of the Association of Institutional Research, ERIC No. ED 124 069) 1975.
- University Teaching Methods Unit.: Issues in Staff Development. University of London: Staff Development in Universities Programme 1975.
- Bergquist, W. H., & W. A. Shoemaker. (Eds.): A Comprehensive Approach to Institutional Development. New Directions for Higher Education, No.15 San Francisco: Jossey-Bass 1976.
- Centra, J. A.: Faculty Development Practices in U.S. Colleges and Universities. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 141 382) Princeton, N.J.: Educational Testing Service 1976.
- Crow, M. L., O. Milton, W. E. Moomaw, & W. R. O'Connell, Jr.: Faculty Development Centers in Southern Universities. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 129 132) Atlanta: Southern Regional Education Board 1976.
- Derek, H., & M. Herrington.: The Probationary Year. London: Routledge & Kegan Paul 1976 93p.
- Katz, J., & R. T. Hartnett.: Scholars in the Making: The Development of Graduate and Professional Students. Cambridge, Mass.: Ballinger 1976.
- Miller, G. W.: Staff Development Programmes in British Universities and Polytechnics. Paris: International Institute for Educational Planning Research Report 18, HEP 1976.
- Rice, R. E., & M. L. Davis.: Program Coordination of Academic Planning and Professional Development. (Final Report to Kellogg Foundation, ERIC No. ED 172 688) 1976.
- Sikes, W., & L. Barrett.: Case Studies on Faculty Development. Washington, D.C.: Council for the Advancement of Small Colleges 1976.
- Smith, A. B.: Faculty Development and Evaluation in Higher Education. (ERIC/Higher Educational Research Report No.8 ERIC Document Reproduction Service No. ED 132 891) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1976 76p.

- Department of Education and Science.: The Training of Teachers for Further Education. (Circular 11-77) London: DES 1977.
- Piper, D. W., & R. Glatter.: The Changing University: A Report on the Staff Development in Universities Programme, 1972/4. Windsor: National Foundation for Educational Research 1977 410p.
- Seldin, P.: Teaching Professors to Teach: Case Studies and Methods of Faculty Development in British Universities Today. New York: Blythe-Pennington 1977.
- Gaff, S. S., Festa, C., & Gaff, J. G.: Professional Development: A Guide to Resources. New Rochelle, New York: Change Magazine Press 1978.
- Greenaway, H., & A. G. Harding.: The Growth of Policies for Staff Development. SRHE Monograph, 34 Guildford: Society for Research into Higher Education 1978 103p.
- Bergquist, W. H., & S. R. Phillips.: A Handbook for Faculty Development. Vol.2. Washington, D.C.: Council for the Advancement of Small Colleges 1979
- Fortunato, R. T., & D. G. Waddell.: Personal Administration in Higher Education: Handbook of Faculty and Staff Personal Practices. San Francisco: Jossey-Bass 1981 384p.
- Teather, D. C. B. (Ed.): Staff Development in Higher Education: An International Review and Bibliography. London: Kogan Page 1979 336p.
- Bland, C. J.: Faculty Development Through Workshops. Springfield: Charles C. Thomas 1980.
- Centra, J. A.: Determining Faculty Effectiveness. San Francisco: Jossey-Bass 1980.
- Dent, R., & D. Hounsell.: Staff Development for the 1980s: International Perspectives. International Conference on Higher Education, 4th, University of Lancaster, 1978. Normal, Ill.: Illinois State University Foundation 1980 227p.
- Freedman, M., W. Brown, N. Ralph, R. Shukraft, M. Bloom, & N. Sanford.: Academic Culture and Faculty Development. Orinda, Calif.: Montaigne Press 1980.
- Nelsen, W. C., & M. E. Siegel.: Effective Approaches to Faculty Development. Washington, D. C.: Association of American Colleges 1980 149p.
- Smith, A. B.: Staff Development Practices in U.S. Community Colleges. National Research Project on the Status of Staff, Program, and Organizational Development in Community and Junior Colleges. American Association of Community and Junior Colleges. 1980.
- Nelsen, W. C.: Renewal of the Teacher Scholar: Faculty Development in the Liberal Arts College. Washington, D.C.: Association of American Colleges 1981.
- Whitcomb, D. B., & L. L. Beck.: Institutional Mission and Faculty Development. (ERIC No. ED 195 198) 1981.
- Boeden, J. A., & J. Anwyl.: Centre for the Study of Higher Education, University of Melbourne. (Attitudes of Australian Academics to Staff Development) Research Working Paper No.82/6 1982 20p.
- Brookes, G. A., & K. L. German.: Meeting the Challenges: Developing Faculty Careers. ASHE/ERIC Higher Education Research Report No.3 Washington, D.C.: Association for the Study of Higher Education 1983.
- Lacey, P. A. (Ed.): Revitalizing Teaching Through Faculty Development. New Directions for Teaching and Learning, No.15 San Francisco: Jossey-Bass 1983.

- Clark, S. M., & D. R. Lewis.: Faculty Vitality and Institutional Productivity: Critical Perspectives for Higher Education. New York: Teachers College, Columbia University 1985 293p.
- Eble, K. E., & W. J. McKeachie.: Improving Undergraduate Education Through Faculty Development: An Analysis of Effective Programs and Practices. San Francisco: Jossey-Bass 1985.
- UNESCO Regional for Education in Asia and the Pacific.: Academic Staff Development in Higher Education-Report of a Regional Workshop at University of New England. 1985 66p.
- ○
- Falk, B.: The Melbourne Approach to Teacher Training for University Staff. Australian University, 8 1970 pp57-66.
- Sanford, N.: Academic Culture and the Teacher's Development. Soundings, Winter 1971.
- Boyer, R. K., & C. Crockett. (Guest Eds.): Organizational Development in Higher Education. Journal of Higher Education(special issue), May 1973.
- Gerth, D. R.: Institutional Approaches to Faculty Development. New Directions for Higher Education, No.1 1973.
- Konrad, A. G.: Staff Development in Western Canadian Colleges. Stoa(later renamed The Canadian Journal of Higher Education), 3(1) 1973 pp47-52.
- Ralph, N., & M. Freedman.: Innovative Colleges: Challenge to Faculty Development. New Directions in Higher Education, No.1 1973.
- Phillips, S. R.: The Many Faces of Faculty Development. College Management, 9 1974 pp14-19.
- Riley, J.: University Teachers on Training Courses. Universities Quarterly, 28(3) 1974 pp450-454.
- Bergquist, W. H., & S. R. Phillips.: Components of an Effective Faculty Development Program. Journal of Higher Education, 46(2) 1975 pp177-211.
- Brinbaum, R.: Using the Calender for Faculty Development. Educational Record, 56 1975 pp226-230.
- Brown, D. G., & W. S. Hanger.: Pragmatics of Faculty Self-Development. Educational Record, 56 1975 pp201-206.
- Buhl, L. C., & A. Greenfield.: Contracting for Professional Development in Academe. Educational Record, 56 1975 pp111-121.
- Francis, J. B.: How Do We Get There from Here? Program Design for Faculty Development. Journal of Higher Education, 46 1975 pp719-732.
- Harding, A. G., & S. Sayer.: The Objectives of Training University Teachers. Universities Quarterly, 29(3) 1975 pp299-317.
- Katz, F. M., & D. V. Connor.: The Indonesian University Lecturers' Scheme: A Teacher Training Programme. Vestes, 17(1) 1975 pp2-10.
- Main, A.: The Training of University Teachers in Britain. Association of Commonwealth Universities Bulletin of Current Documentation, 18 1975 pp2-4.
- Martin, W. B.: Faculty Development as Human Development. Liberal Education, 61 1975 pp187-196.
- Richardson, R. C.: Staff Development: A Conceptual Framework. Journal of Higher Education, 46(1) 1975 pp303-311.
- Toombs, W.: A Three-Dimensional View of Faculty Development. Journal of Higher Education, 46 1975 pp701-717.
- Connel, K. J., et al.: What Dose It Take for Faculty Development to Make a Difference? Educational Horizons, 55 1976 pp108-115.

- Hammons, J. O., & T. H. S. Wallace.: Sixteen Ways to Kill a College Faculty Development Program. *Educational Technology*, 16 1976 pp16-20.
- Koen, F. M.: A Faculty Educational Development Program and an Evaluation of Its Evaluation. *Journal of Medical Education*, 51 1976 pp854-855.
- Linden, G.: Multi-Institutional, Multi-Level Faculty Development Programs. *Educational Horizons*, 55 1976 pp56-63.
- Marty, M. A.: Disciplinary Associations and Faculty Development. In D. W. Vermilye(Ed.), *Individualizing the System*. San Francisco: Jossey-Bass 1976.
- Miller, A. H.: The Preparation of Tertiary Teachers. *Australian University*, 14(1) 1976 pp33-42.
- Neff, C. B.: Faculty Development Tug O'War, or Up Tree with a Turning Fork. *Liberal Education*, 62 1976 pp427-432.
- Wergin, J. F., E. J. Mason, & P. J. Munson.: The Practice of Faculty Development: An Experience-Derived Model. *Journal of Higher Education*, 47 1976 pp289-308.
- Bland, C. J.: Guidelines for Planning Faculty Development Workshops. *Journal of Family Practice*, 5 1977 pp235-241.
- Carroll, J. G.: Assessing the Effectiveness of a Training Program for the University Teaching Assistant. *Teaching of Psychology*, 4 1977 pp135-137.
- Coles, C.: Developing Professionalism: Staff Development as an Outcome of Curriculum Development. *Programmed Learning & Educational Technology*, 14(4) 1977 pp315-319.
- Creaser, H.: Staff Development and the Fourth Revolution. *Journal of Educational Television*, 3(3) 1977 pp75-76.
- Fallon, B. J.: A Note on In-Service Courses for Academic Staff. *Education Research and Perspectives*, 4(1) 1977 pp66-70.
- Galloway, S. W., & C. Fisher. (Eds): *A Guide to Professional Development Opportunities for College and University Administrators*. Washington, D.C.: Office of Leadership Development in Higher Education, American Council on Education 1977.
- Hearnshaw, T.: Staff Development: Some Thoughts on Responsibility. *Journal of Educational Television*, 3(3) 1977 pp80-82.
- McCaig, R.: Institutional Management in Higher Education - A Professional Development Tool for College and University Administrators. *Australian Journal of Advanced Education*, 6(3) 1977 pp9-11.
- O'Banion, T.: Development Staff Potential. *New Directions for Community Colleges*, No.19 1977.
- Pochyly, D. F.: Problem-Oriented Faculty Development in a Medical School. *Education Horizon*, 55 1977 pp92-96.
- Sayer, S.: The Relationship Between Staff Development and Audiovisual Media in British Universities. *Programme Learning & Educational Technology*, 14(3) 1977 pp259-264.
- Simerly, R.: Ways to View Faculty Development. *Educational Technology*, February, 17(2) 1977 pp47-49.
- Spitz, L. W.: Humanistic Approaches to Faculty Development. *Liberal Education*, 63 1977 pp529-36.
- Trickey, S.: Staff Training - A Polytechnic Perspective. *Impetus*, 6 1977 pp15-22.
- Wergin, J. F.: Evaluating Faculty Development Programs. *New Direction for Higher Education*, No.17 1977.

- Yorke, D. M.: Staff Development in Further and Higher Education: A Review. *British Journal of Teacher Education*, 3(2) 1977 pp161-168.
- Bedsole, D. T., & D. C. Reddick.: An Experiment in Innovation: The Faculty Career Development Program at Austin College. *Liberal Education*, 64 1978 pp75-83.
- Booth, D. B.: Development and Chairperson Development. *New Directions for Higher Education*, No.25 1978.
- Centra, J. A.: Types of Faculty Development Programs. *Journal of Higher Education*, 49(March, April) 1978 pp151-162.
- Gaff, J. G., & D. O. Justice.: Faculty Development Yesterday, Today, and Tomorrow. *New Directions for Higher Education*, No.25 1978.
- Hipps, O. S.: Faculty Development: Not Just a Bandwagon. *Nursing Outlook*, 26 1978 pp692-696.
- Hoyt, D. P., & G. S. Howard.: The Evaluation of Faculty Development Programs. *Research in Higher Education*, 8 1978 pp25-38.
- Kozma, R. B.: Faculty Development and the Adoption and Diffusion of Classroom Innovations. *Journal of Higher Education*, 49 1978 pp438-449.
- Baldwin, R.: Adult and Career Development: What are the Implications for Faculty ? *Current Issues in Higher Education*, 2 1979.
- Davis, R. H.: A Behavioral Change Model with Implications for Faculty Development. *Higher Education*, 8 1979 pp123-140.
- Marx, R., J. F. Ellis, & J. Martin.: The Training of Teaching Assistants in Canadian Universities: A Survey and Case Study. *The Canadian Journal of Higher Education*, 9(1) 1979.
- Mathis, B. C.: Academic Careers and Adult Development: Anexus for Research. *Current Issues in Higher Education*, 2 1979.
- Nelsen, W. C.: Faculty Development: Prospects and Potential for the 1980s. *Liberal Education*, 65 1979 pp141-149.
- Ritter, U. P.: Training the Trainers for Staff Development. In Van Trotsenburg, E. A. (Ed.), *Higher Education: A Field of Study*. Frankfurt: Peter Lang 1979.
- Sheehan, T. J.: Faculty Development. *Journal of Medical Education*, 34 1979 p255.
- Smith, R. B., & G. F. Ovard.: Professional Development: A New Approach. *Improving College and University Teaching*, 27 1979 pp40-43.
- Braskamp, L. A.: The Role of Evaluation in Faculty Development. *Studies in Higher Education*, 5 1980 pp45-54.
- Carroll, J. G.: Effects of Training Programs for University Teaching Assistant: A Review of Empirical Research. *Journal of Higher Education*, 51 1980 pp167-183.
- Ciampa, B. J.: Fostering Instructional Improvement Through Faculty Development. *Higher Education*, 9 1980 pp22-27.
- Koerin, B. B.: Teaching Effectiveness and Faculty Development Programs: A Review. *Journal of General Education*, 32 1980 pp40-51.
- Wurster, S. H., & J. F. McCartney.: Faculty Development: Planning for Individual and Institutional Renewal. *Planning for Higher Education*, 9 1980.
- Bagwell, R., & I. Elioff.: Faculty Development for Part-Timers. *Current Issues in Higher Education*, 3(4) 1981 pp13-17.
- Baldwin, R. G., & R. T. Blackburn.: The Academic Career as a Developmental Process: Implications for Higher Education. *Journal of Higher Education*, 52(November/December) 1981 pp598-615.

- Becker, H. W.: A Collegial Approach to Faculty Development. *Liberal Education*, 67(Spring) 1981 pp19-35.
- Chait, R. P., & J. Gueths.: Proposing a Framework for Faculty Development. *Change*, 13(May/June) 1981 pp30-33.
- Evraiff, W., & L. Meshover.: Creative Management for Faculty Development. *Journal of Research and Development in Education*, 14 1981 pp71-78.
- Lane, F. S.: Making Professors More Productive. *AGB Reports*, 23(March/April) 1981 pp4-7.
- Slay, T., & A. McDonald.: Female Professors/Male Professors Career Development: Attitudes, Benefits, Costs. *Psychological Reports*, 48(February) 1981 pp307-314.
- Smith, A.: Staff Development Goals and Practices in U.S. Community Colleges. *Community/Junior College Research Quarterly*, 5(April-June) 1981 pp209-225.
- Stordahl, B.: Faculty Development: A Survey of Literature of the '70s. *AAHE Bulletin*, 33(March) 1981 pp7-10.
- Baldwin, R. G.: Fostering Faculty Vitality: Options for Institutions and Administrators. *Administrator's Update*, 4(Fall) 1982.
- Baldwin, R. G., & R. T. Blackburn.: The Academic Career as a Developmental Process. *Journal of Higher Education*, 52 1982 pp598-614.
- Conrad, C. F., & M. Hammond.: Cooperative Approaches to Faculty Development. *Community College Review*, 10(Fall) 1982 pp48-51.
- Cytrynbaum, S., S.Lee, & D. Wander.: Faculty Development through the Life Course. *Journal of Instructional Development*, 5 1982 pp11-22.
- Dalgaard, K. A.: Some Effects of Training on Teaching Effectiveness of Untrained University Teaching Assistants. *Research in Higher Education*, 17(1) 1982 pp39-50.
- Geyman, J. P.: Faculty Development and Evaluation of Teaching Performance. *Journal of Family Practice*, 14 1982 pp987-988.
- Goldman, J.: Faculty Development and Human Resource Management in the Academic Setting. *Journal of Medical Education*, 57 1982 pp860-865.
- Hammons, J. O.: Staff Development Isn't Enough. *Community College Review*, 10(Winter) 1982 pp3-7.
- Hansen, D. W., & D. M. Rhodes.: Staff Development Through Degrees: Alternatives to the Ph.D. *Community College Review*, 10 (Fall) 1982 pp52-58.
- Hipps, G. M.: Faculty and Administrative Development. *New Directions for Institutional Research*, No.33 1982.
- Meacham, E. D.: Distance Teaching: Innovation, Individual Concerns and Staff Development. *Distance Education*, 3(2) 1982 pp244-254.
- Schwoebel, R., & N. R. Bartel.: An Alternative to Decline: Revitalizing the Faculty. *Challenge*, 14 1982 pp22-24.
- Shears, P.: Staff Development Approaches-A Critical Appraisal. *Vocational Aspect of Education*, 34(April) 1982 pp11-14.
- Smyhe, O., & P. L. Lerabeck.: Faculty and Institutional Development: Bridging the Experience Gap. *New Directions for Experiential Learning*, No.17 1982.
- Whitman, D., & T. Schwenk.: Faculty Evaluation as a Means of Faculty Development. *Journal of Family Practice*, 14 1982 pp1097-1101.
- Cannon, R. A.: The Professional Development of Australian University Teachers: An Act of Faith? *Higher Education*, 12 1983 pp19-33.

- Finlayson, J. (Ed.): Quality in FE/HE: The Management of Staff Development. Coombe Lodge Report, 15(13) 1983 pp1-44.
- Freedman, M., & C. Stomper.: The Effectiveness of a Faculty Development Program: A Process-Product Experimental Study. The Review of Higher Education, 7 1983 pp49-65.
- Hammons, J.: Faculty Development: A Necessary Corollary to Faculty Evaluation. New Directions for Community Colleges, No.41 1983.
- Konrad, A. G.: Faculty Development Practices in Canadian Universities. Canadian Journal of Higher Education, 13(2) 1983 pp13-26.
- Lacefield, W. E., & R. D. Kingston.: Relationships Between Faculty Evaluations and Faculty Development. Journal of Nursing Education, 22 1983 pp278-284.
- Reily, D. H.: Faculty Development No: Program Development Yes. Planning for Higher Education, 11 1983 pp25-28.
- Schwartz, L. L.: Nurturing an Endangered Species: A Constructive Approach to Faculty Development. Improving College and University Teaching, 31 1983 pp65-68.
- Schwen, T. M., & M. D. Soreinelli.: A Profile of Postdoctoral Teaching Programs. New Directions for Teaching and Learning, No.15 1983.
- Sullivan, L.: Faculty Development: A Movement on the Brink. The College Board Review, 127 1983 pp21-30.
- Toobs, W.: Faculty Development: The Institutional Side. New Directions for Institutional Research, No.40 1983.
- O'Connell, C.: College Policies Off-Target Fostering Faculty Development. Journal of Higher Education, 54 1983. pp662-675.
- Baldwin, R. G.: The Changing Development Needs of an Aging Professoriate. New Directions for Teaching and Learning, No.19 1984.
- Boice, R.: The Relevance of Faculty Development for Teachers of Psychology. Teaching Psychology, 11 1984 pp3-8.
- Botman, E. S., & A. D. Gregor.: Faculty Participation in Teaching Improvement Programs. Canadian Journal of Higher Education, 14(2) 1984 pp149 159.
- Jason, H., & J. Westberg.: Microcomputers in Faculty Development: The Florida FAC-NET Project. Journal of Family Practice, 19 1984 pp72-79.
- Mahler S., & D. E. Benor.: Short and Long Term Effects of a Teacher-Training Workshop in a Medical School. Higher Education, 13(3) 1984 pp265-273.
- Ruch, C. P.: HRD-An Organization Approach to Faculty Development. Improving College and University Teaching, 32 1984 pp18-22.
- Tribe, A. J., & C. J. Fletcher.: Self-Confrontation through Video-Playback: A Study of Lecturer's Reactions. Assessment and Evaluation in Higher Education, 9(2) 1984 pp165-173.
- Belker, J. S.: The Education of Mid-Career Professors: Is it Continuing? College Teaching, 33 1985 pp68-71.
- Boice, R.: Differences in Arranging Faculty Development Through Deans and Chairs. Research in Higher Education, 23(3) 1985 pp245-255.
- Cameron, K.: Managing Self Renewal. New Directions for Higher Education, No.49 1985.
- Fuller, J. A., & F. J. Evans.: Recharging Intellectual Batteries: The Challenge of Faculty Development. Educational Record, 66 1985 pp31-34.

- Gaff, J. G.: Ongoing Development and Renewal. In Green, J. S., Levine, A. and Associates. Opportunity in Adversity: How Colleges Can Succeed in Hard Times. San Francisco: Jossey-Bass 1985.
- Hahn, R.: Seeking Outside Help to Facilitate Renewal Efforts. *New Directions for Higher Education*, No.49 1985 pp75-82.
- Menges, R. J.: Career-Span Faculty Development. *College Teaching*, 33(Fall) 1985 pp181-184.
- Moses, I.: Academic Development Units and the Improvement of Teaching. *Higher Education*, 14 1985 pp75-100.
- Wedman J., & M. Strathe.: Faculty Development in Technology: A Model for Higher Education. *Educational Technology* 1985 pp15-19.
- Bland, C. J., & C. C. Schmitz.: Characteristics of the Successful Researcher and Implications for Faculty Development. *Journal of Medical Education*, 61 1986 pp22-31.
- Boice, R.: Faculty Development via Field Programs for Middle-Aged, Disillusioned Faculty. *Research in Higher Education*, 25(2) 1986 pp115-135.
- Byrd, A. M., & A. Smith.: Staff Development Needs of Part-Time Community College Faculty. *Journal of Staff, Program, & Organization Development*, 4(Summer) 1986 pp37-40.
- Cantor, L., & P. West.: Staff Development: The Way Ahead for TAFE. *Australian Journal of TAFE Research and Development*, 2(1) 1986 pp100-106.
- Eble, K. E.: Chairpersons and Faculty Development. *Department Advisor*, 1(Winter) 1986 pp1-5.
- Lipetz, M., M. Bussigel, & R. Foley.: Rethinking Faculty Development. *Medical Teacher*, 8(2) 1986 pp137-144.
- Nickel, D.: Effects of a Staff Development Center. *Journal of Staff, Program, & Organization Development*, 4(Spring) 1986 pp13-15.
- Smith, R., & F. Schwartz.: A Theory of Effectiveness: Faculty Development Case Studies. *Journal of Staff, Program, & Organization Development*, 4(Spring) 1986 pp3-8.
- Valek, M.: Faculty Renewal: Strategies for Vitality. *Journal of Staff, Program, & Organization Development*, 4(Winter) 1986 pp93-98.
- Boice, R.: Is Released Time an Effective Component of Faculty Development Programs? *Research in Higher Education*, 26(3) 1987 pp311-326.
- Kerwin, M.: Teaching Behaviors : Faculty Want to Develop. *Journal of Staff, Program, & Organization Development*, 5(Summer) 1987 pp69-72.
- McKeachie, W. J.: Tactics and Strategies for Faculty Development. *Department Advisor*, 2(Winter) 1987 pp1-5.
- Modoono, S., & W. Evans.: Faculty Training and Adult Development. *Journal of Higher Education Management*, 3(Summer/Fall) 1987 pp39-46.
- Riegle, R. P.: Conceptions of Faculty Development. *Educational Theory*, 37(Winter) 1987 pp53-59.
- Young, R. E.: Faculty Development for the Concept of "Profession". *Academe*, 73(May-June) 1987 pp12-14.
- Acebo, S. C., & K. Watkins.: Community College Faculty Development: Designing a Learning Organization. *New Directions for Continuing Education*, No.38 1988 pp49-61.
- Ashcroft, K., & S. Tann.: Beyond Building Better Checklists: Staff Development in a School Experience Programme. *Assessment and Evaluation in Higher Education*, 13(1) 1988 pp61-72.

- Ashworth, T. E.: Improving the Effectiveness of Part-Time Faculty in Community Colleges. *Community Services Catalyst*, 18(3) 1988 pp15-18.
- Berman, J., & K. M. Skeff.: Developing the Motivation for Improving University Teaching. *Innovative Higher Education*, 12(2) 1988 pp114-125.
- Bland, C., & C. C. Schmitz.: Faculty Vitality on Review: Retrospect and Prospect. *Journal of Higher Education*, 59(2) 1988 pp190-224.
- Boud, D.: Professional Development and Accountability: Working with Newly Appointed Staff to Foster Quality. *Studies in Higher Education*, 13(2) 1988 pp165-175.
- Lacey, P. A.: Faculty Development and the Future of Colleges Teaching. *New Directions for Teaching and Learning*, No.33 1988 pp57-69.
- Lambert, L.: Staff Development Redesigned. *Phi Delta Kappan*, 69(9) 1988 pp665-668.
- Menges, R. J., & Others.: Strengthening Professional Development: Lessons from the Program for Faculty Renewal at Stanford. *Journal of Higher Education*, 9(3) 1988 pp291-304.
- Rostek, S., & D. J. Kladviko.: Staff Development and Training. *New Directions for Community Colleges*, 16(2) 1988 pp37-52.
- Rutherford, D., & Others.: Professional Staff Development in the Future. *Programmed Learning and Educational Technology*, 25(2) 1988 pp159-181.
- Diehl, P. F., & R. D. Simpson.: Investing in Junior Faculty: The Teaching Improvement Program(TIPs). *Innovative Higher Education*, 13(2) 1989 pp147-157.
- Hopkins, B.: The Staff Development Needs of Part-Time Lectures in an FE College. *Journal of Further and Higher Education*, 13(1) 1989 pp3-11.
- West, P.: Designing a Staff Development Program. *Journal of Further and Higher Education*, 13(1) 1989 pp11-17.

2. 教員一般・教員論

- Chase, J. L.: Graduate Teaching Assistants in American Universities: A Review of Recent Trends and Recommendations. Washington, D.C.: Office of Education 1970.
- McGee, R.: Academic Janus: The Private College and Its Faculty. San Francisco: Jossey-Bass 1971.
- Eble, K. E.: Professors as Teachers. San Francisco: Jossey-Bass 1972 202p.
- Axelrod, J.: The University Teacher as Artist: Toward an Aesthetics of Teaching with Emphasis on the Humanities. San Francisco: Jossey-Bass 1973.
- Freedman, M., & N. Sanford. (Eds.): The Faculty Member: Yesterday and Today. New Directions for Higher Education, No.1 San Francisco: Jossey-Bass 1973.
- Manning, C. W., & L. C. Romney.: Faculty Activity Analysis: Procedures Manual. Boulder: Western Interstate Commission for Higher Education 1973.
- Miller, R. I.: Developing Programs for Faculty Evaluation: A Sourcebook for Higher Education. San Francisco: Jossey-Bass 1974 248p.
- Yuker, H. E.: Faculty Workload: Facts, Myths, and Commentary. (ERIC/Higher Education Research Report No.6) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1974 62p.
- Ladd, E. C., Jr., & S. M. Lipset.: The Divided Academy: Professors and Politics. New York: McGraw-Hill 1975 407p.
- Wilson, R. C., J. G. Gaff, E. R. Dienst, L. Wood, & J. L. Bavry.: College Professors and Their Impact on Students. New York: John Wiley 1975 220p.
- Ladd, E. C., Jr.: The Work Experience of American College Professors: Some Data and Argument. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 184 406) Current Issues in Higher Education, 2 Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1979.
- Patton, C. V.: Academic in Transition: Mid-Career Change or Early Retirement. Cambridge, Mass.: Abt Books 1979 212p.
- Shulman, C. H.: Old Expectations, New Realities: The Academic Professions Revisited. (ERIC/Higher Educational Research Report No.2. ERIC Document Reproduction Service No. ED 169 874) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1979.
- Chait, R. P., & A. T. Ford.: Beyond Traditional Tenure: A Guide to Sound Policies and Practices. San Francisco: Jossey-Bass 1982.
- ○
- Gaff, J. G., & R. C. Wilson.: Faculty Cultures and Interdisciplinary Study. Journal of Higher Education, March, 1971 pp186-201.
- Gaff, J. G.: Making a Deference: The Impact of Faculty. Journal of Higher Education, 46 1973 pp605-622.
- King, M.: The Anxieties of University Teachers. Universities Quarterly, 28(1) 1973 pp69-83.
- Morris, C.: A Call for Faculty Reform. Change Magazine, Winter 1973-1974 1973.
- Starr, S. F.: A Fair Measure for Faculty Workloads. The Educational Record, 54(4) 1973 pp313-315.
- Stimart, R. P., & A. L. Taylor.: Predicting Excellence in College Teachers: A Vector Algebra Approach. The Journal of Experimental Education, 42(1) 1973 pp74-76.

- Swanson, R. G.: The Teacher as a Leader. *College Student Journal*, 8 1974 pp40-45.
- Rose, C.: Stalking the Perfect Teacher. *Chronicle of Higher Education*, 8(5) 1976 p24.
- Walker, G. R.: Satisfaction or Frustration: The Dilemma of University Academics. *Vestes*, 19(1) 1976 pp35-38.
- Harman, G.: Academic Staff and Academic Drift in Australian Colleges of Advanced Education. *Higher Education*, 6(3) 1977 pp313-35.
- Scarfe, J., & E. F. Sheffield.: Notes on the Canadian Professoriate. *Higher Education*, 6(3) 1977 pp337-358.
- Gaff, J. G.: Overcoming Faculty Resistance. *New Directions for Higher Education*, No.25 1978.
- Smith, D. K.: Faculty Vitality and the Management of University Personal Policies. *New Directions for Institutional Research*, No.20 1978.
- Blackburn, R. T.: Academic Careers: Patterns and Possibilities. *Current Issues in Higher Education*, No.2 1979.
- Blackburn, R. T., & R. J. Havighurst.: Career Patterns of United States Male Academic Social Scientists. *Higher Education*, 8 1979 pp553-572.
- Farrell, R. V., & S. Seideman.: Role Swapping Can Work to Revitalize Faculty, Teachers. *Journal of Teacher Education*, 30 1979 pp35-36.
- Black, K. L.: Part-Time Community College Faculty: Their Needs for Instruction-Related Assistance. *Community/Junior College Research Quarterly*, 5(April-June) 1981 pp275-285.
- Bruss, E. A., & K. L. Kutina.: Faculty Vitality Given Retrenchment: A Policy Analysis. *Research in Higher Education*, 14 1981 pp19-30.
- Furniss, W. T.: New Opportunities for Faculty Members. *Educational Record*, 62(1) 1981 pp8-15,
- Dowling, N. G., & H. Roland.: Institutional and Faculty Life Cycle Changes. *Community College Review*, 10(Fall) 1982 pp36-40.
- Baldwin, R. G.: Variety and Productivity in Faculty Careers. *New Directions for Higher Education*, No.41 1983.
- Light, D.: Thinking About Faculty. *Daedalus*, 103 1984 pp258-264.
- Baldwin, R. G., & M. V. Krottseng.: Incentives in the Academy: Issues and Opinions. *New Directions for Higher Education*, No.51 1985.
- Hamill, P. J., Jr.: Faculty Incentives at the College of Charleston: A Case Study. *New Directions for Higher Education*, No.51 1985.
- Jacobson, R. L.: New Carnegie Data Show Faculty Members Uneasy About the State of Academe and Their Own Careers. *The Chronicle of Higher Education*, 31 1985 pp1-2,25-28.
- Schuster, J. H.: Faculty Vitality: Observation from the Field. *New Directions for Higher Education*, No.51 1985.
- Wylie, N. R., & J. W. Fuller.: Enhancing Collaboration through Collaboration Among Colleagues. *New Directions for Higher Education*, No.51 1985.
- Mahler, S., & L. Neumann.: The Effect of Personal and Institutional Variables upon Faculty Instructional Behavior. *College Student Journal*, 21(Summer) 1987 pp137-145.

3. ティーチング・学習

3.1 大学教育一般

Burnett, C. W., & F. W. Badger. (Eds.): *The Learning Climate in the Liberal Arts College: An Annotated Bibliography*. Charleston, W.Va.: Morris Havey College 1970.

Cohen, A. M.: *Objectives for College Courses*. Beverly Hills, Calif.: Glencoe 1970.

Keller, J. E.: *Higher Education Objectives: Measures of Performance and Effectiveness*. Berkeley: Office of the Vice-President Planning and Analysis, University of California 1970.

Perry, W. G. Jr.: *Forms of Intellectual and Ethical Development in the College Years; A Scheme*. New York: Holt, Rinehart and Winston 1970 256p.

American Association of State Colleges and Universities.: *Quality and Effectiveness in Undergraduate Higher Education*. Washington, D.C.: American Association of State Colleges and Universities. 1971.

Carnegie Commission on Higher Education.: *Less Time, More Options: Education Beyond the High School*. New York: McGraw-Hill 1971 45p.

Astin, A. W., & C. B. T. Lee.: *The Invisible Colleges*. New York: McGraw-Hill 1972 146p.

Carnegie Commission on Higher Education.: *The More Effective Use of Resources*. New York: McGraw-Hill 1972.

Clark, B. R., P. Heist, T. R. McConnell, M. A. Trow, & G. Youge.: *Students and Colleges: Interaction and Change*. Berkeley: Center for Research and Development in Higher Education, University of California 1972.

Dressel, P. L., & Associates.: *Institutional Research in the University: A Handbook*. San Francisco: Jossey-Bass 1972 347p.

OECD/CERI.: *Interdisciplinarity; Problems of Teaching and Research in Universities*. Paris: Organization for Economic Cooperation and Development 1972 321p.

Bennis, W. G.: *The Leaning Ivory Tower*. San Francisco: Jossey-Bass 1973.

Bersi, R. M.: *Restructuring the Baccalaureate*. Washington, D.C.: American Association of State Colleges and Universities 1973.

Klingelhofer, E., & L. Hollander.: *Educational Characteristics and Needs of New Students: A Review of the Literature*. Berkeley: Center for Research and Development in Higher Education, University of California 1973.

Levine, A., & J. R. Weingart.: *Reform of Undergraduate Education*. San Francisco: Jossey-Bass 1973 160p.

Parsons, T., & G. M. Platt.: *The American University*. Cambridge: Harvard University Press 1973.

Perkins, J. A. (Ed.): *The University as an Organization*. New York: McGraw-Hill 1973.

Solomon, L. C., & P. J. Taubman. (Eds.): *Does College Matter? Some Evidence on the Impacts of Higher Education*. New York: Academic Press 1973.

Trivett, D. A.: *Goals for Higher Education: Definition and Directions*. (ERIC/Higher Education Research Report No.6) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1973.

Maas, J. B.: *The Yellow Pages of Undergraduate Innovation*. New York: Change Magazine Publications 1974.

Sikes, W. W., L. E. Schlesinger, & C. N. Seashore.: *Renewing Higher Education from Within: A Guide for Campus Change Teams*. San Francisco: Jossey-Bass 1974.

- Tinto, V., & Sherman, R. H.: *The Effectiveness of Secondary and Higher Education Intervention Programs: A Critical Review of the Research*. New York: Teachers College Press 1974.
- Riesman, D.: *Can We Maintain Quality Graduate Education in a Period of Retrenchment?* Chicago: University of Illinois at Chicago Circle 1975.
- Trites, D. G. (Ed.): *Planning the Future of the Undergraduate College: New Directions for Higher Education*. San Francisco: Jossey-Bass 1975.
- Trow, M. (Ed.): *Teachers and Students: A Report of the Carnegie Commission on Higher Education*. New York: McGraw-Hill 1975.
- Mayhew, L. B.: *How Colleges Change: Approaches to Academic Reform*. Palo Alto, Calif.: School of Education, Stanford University 1976.
- William, J. G., & Others.: *Mutual Benefit Evaluation of Faculty and Administrators in Higher Education*. Cambridge: Ballinger Pub. Co. 1976 222p.
- Astin, A. W.: *Four Critical Years: Effects of College on Beliefs, Attitudes, and Knowledge*. San Francisco: Jossey-Bass 1977.
- Bowen, H. R.: *Investment in Learning: The Individual and Social Value of American Higher Education*. San Francisco: Jossey-Bass 1977.
- Lenning, O. T.: *The Outcomes Structure: An Overview and Procedures for Applying It in Postsecondary Education Institutions*. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 157 454) Boulder, Colo.: National Center for Higher Education Management Systems 1977.
- McHenry, D. E., & Associates.: *Academic Departments: Problems, Variations, and Alternatives*. San Francisco: Jossey-Bass 1977.
- Lewis, D. R., & W. E. Becker., Jr.: *Academic Reward in Higher Education*. Cambridge, Mass.: Ballinger 1979.
- Maher, T. H.: *Designing New Roles Within Academe*. Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1981.
- Maher, T. H.: *Institutional Vitality in Higher Education*. AAHE/ERIC Higher Education Research Currents (ERIC No. ED 216 668) 1982.
- Boyer, E. L.: *College: The Undergraduate Experience in America*. New York: Harper & Row 1987 328p.
- ○
- Baird, L. L.: *The Functions of College Environmental Measures*. *Journal of Educational Measurement*, 8(2) 1971 pp83-86.
- Winstead, P. C., & E. N. Hobson.: *Institutional Goals: Where to From Here?* *Journal of Higher Education*, 42 1971 pp669-677.
- Sturmer, W. F.: *Environmental Code: Creating a Sense of Place on the College Campus*. *Journal of Higher Education*, 43(2) 1972 pp97-109.
- Uhl, N. P.: *Identifying Institutional Goals*. In P. Caws, S. D. Ripley, & P. C. Ritterbush(Eds.), *The Bankruptcy of Academic Policy*. Washington, D.C.: Acropolis 1972.
- Willingham, W. W.: *Predicting Success in Graduate Education*. *Science*, 183(4122) 1974 pp276-278.
- Skertchly, A. R. B.: *Institutional Self-Renewal in Australian Universities*. *Vestes*, 19(1) 1976 pp14-22.
- Solmon, L. C., & N. Ochsner.: *New Findings on the Effects of College*. *Current Issues in Higher Education*. 1978.
- Kanter, R. M.: *Changing the Shape of Work: Reform in Academe*. *Current Issues in Higher Education*, 1 1979 pp3-10.

Pfnister, A. O., J. Solder, & N. Verroca.: Growth Contrasts: Viable Strategy for Institutional Planning under Changing Conditions? Current Issues in Higher Education. Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1979.

McGarrah, R. E.: Restoring the University from Within. Educational Record, 61 1980 pp70-74.

Fuller, J.: Institutional Resistance to Renewal. New Directions for Higher Education, No.49 1985 pp83-90.

Levine, A.: Opportunity in Adversity: The Case of Bradford College. New Directions for Higher Education, No.49 1985 pp7-12.

3.2 講義論・教授法

Armstrong, R. H. R., & J. L. Taylor.: Instructional Simulation Systems in Higher Education. Cambridge: Cambridge Institute of Education 1970 216p.

LaFauci, H. M., & P. E. Richter.: Team Teaching at the College Level. New York: Pergamon Press 1970 157p.

Mann, R. D., & Others.: The College Classroom: Conflict, Change and Learning. New York: John Wiley 1970 389p.

McKeachie, W. J.: Research on College Teaching: A Review. (AAHE-ERIC/Higher Education Research Report No.6. ERIC Document Reproduction Service No.ED 043 789) Washington, D.C.: ERIC Clearinghouse on Higher Education 1970.

Roose, K. D., & C. J. Andersen.: A Rating of Graduate Programs. Washington, D.C.: American Council on Education 1970.

Wittrock, M. C., & D. E. Wiley. (Eds.): The Evaluation of Instruction: Issues and Problems. New York: Holt, Rinehart, and Winston 1970.

Beard, R. et al.: Research into Teaching Methods in Higher Education. Guilford: Society for Research into Higher Education 1971 104p.

Brown, J. W., & J. W. Thornton, Jr.: College Teaching: A Systematic Approach. New York: McGraw-Hill 1971 246p.

Smith, G. K.: New Teaching, New Learning; Current Issues in Higher Education, 1971. San Francisco: Jossey-Bass 1971 261p.

Bligh, D.: What's the Use of Lectures? Harmondsworth: Penguin 1972.

Centra, J. A.: Strategies for Improving College Teaching. (ERIC/Higher Educational Research Report No.8. ERIC Document Reproduction Service No. ED 071 616) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1972.

Runkel, P., R. Harrison, & M. Runkel.: The Changing College Classroom. San Francisco: Jossey-Bass 1972 359p.

University of London Institute of Education.: Varieties of Group Discussion in University Teaching. London: University of London Institute of Education 1972 102p.

Brown, P., & Associates.: Creative Teaching in the College Classroom. Los Angeles: University of California, Creative Teaching Information Center 1973.

McAleese, R.: The Systematic Observation of Lecturing: Its Use in Training and Research. (Paper presented at the Social Science Research Council Seminar on Classroom Research Held in the University of Leicester, 26-28 September, ERIC IR 005 368) 1973.

McAleese, R.: The Application of Microteaching Techniques to the Training of University Teachers. (Paper read at the Education Section of the British Psychological Society's Annual Conference, London, ERIC IR 005 366) 1973.

- Scheffield, E. F. (Ed.): *Teaching in the Universities - No One Way*. Montreal: McGill-Queen's University Press 1974 252p.
- Buxton, T. H., & K. W. Pritchard. (Eds.): *Excellence in University Teaching: New Essays*. Columbus, S.C.: University of South Carolina Press 1975.
- Diamond, R. M., P. E. Eickman, E. F. Kelley, R. E. Holloway, T. R. Vickery, & E. T. Pascarella.: *Instructional Development for Individualized Learning in Higher Education*. Englewood Cliffs, N.J.: Educational Technology Publications 1975.
- Donald, B., et al.: *Teaching Students*. Exter: Exter University Teaching Services 1975 286p.
- Adderley, K.: *Society for Research into Higher Education Working Party on Teaching Methods Group*. London: Society for Research into Higher Education 1975 93p.
- Blackburn, R., & Associates.: *Changing Practices in Undergraduate Education*. Berkeley, Calif.: Carnegie Council on Policy Studies in Higher Education 1976.
- Davis, J. R.: *Teaching Strategies for the College Classroom*. Bourder, Colo.: Westview Press 1976.
- Eble, K. E.: *The Craft of Teaching: A Guide to Mastering the Professor's Art*. San Francisco: Jossey-Bass 1976 179p.
- Helm, A.: *Teaching and Learning in Higher Education*. Windsor, Berns: NFER Pub. Co. 1976 134p.
- Hills, P. J.: *Teaching Method. (The Self-Teaching Process in Higher Education.)* London: Croom Helm 1976 144p.
- Jacob, P. E.: *Changing Values in College; An Exploratory Study of the Impact of College Teaching*. Westport: Greenwood Press 1976 174p.
- Roueche, J. E., & J. J. Snow.: *Overcoming Learning Problems; A Guide to Developmental Education in College*. San Francisco: Jossey-Bass 1977 188p.
- Abercrombile, M. L. J.: *Talking to Learn: Improving Teaching and Learning in Small Groups*. Guildford: Society for Research into Higher Education 1978 158p.
- Benson, R. S.: *Guide to Effective Teaching; A National Report on 81 Outstanding College Teachers and How They Teach: Lectures, Computers, Case Studies, Peer Teaching, Simulation Self-Pacing, Multimedia, Field Study, Problem Solving, and Research*. New York: Change Magazine Press 1978 175p.
- Cahn, S. M.: *Scholars Who Teach; The Art of College Teaching*. Chicago: Nelson-Hall 1978 246p.
- Cohen, R. D., & R. Jody.: *Freshman Seminar: A New Orientation*. Boulder, Colo: Westview Press 1978 142p.
- Cole, C. C., Jr.: *To Improve Instruction. (AAHE-ERIC/Higher Education Research Report No.2. ERIC Document Reproduction Service No. ED 153 583)* Washington, D.C.: ERIC Clearinghouse on Higher Education 1978.
- David. W. P.: *The Efficiency and Effectiveness of Teaching in Higher Education*. Albany: State University of New York Press 1978.
- Gaff, J. G. (Ed.): *Institutinal Renewal through the Improvement of Teaching. New Directions for Higher Education, No.24* San Francisco: Jossey-Bass 1978.
- Harrison, S. A., & L. M. Stolurow, (Eds.): *Improving Instructional Productivity in Higher Education*. Englewood Cliffs, N.J.: Educational Technology Productions 1978.
- Kozma, R., L. Belle, & G. Williams.: *Instructional Techniques in Higher Education*. Englewood Cliffs, N.J.: Educational Technology Publications 1978 419p.

- Lindquist, J. (Ed.): *Designing Teaching Improvement Programs*. Washington, D.C.: Council for the Advancement of Small Colleges 1978.
- McKeachie, W. J.: *Teaching Tips; A Guidebook for the Beginning College Teacher*. Lexington: D. C. Heath 1978 338p.
- Milton, O., & Associates.: *On College Teaching*. San Francisco: Jossey-Bass 1978 404p.
- Rudduck, J.: *Learning through Small Group Discussion: A Study of Seminar Work in Higher Education*. Guildford: Society for Research into Higher Education 1978 137p.
- Cronbach, L. J.: *Toward Reform of Program Evaluation; Aims, Methods, and Institutional Arrangement*. San Francisco: Jossey-Bass 1980 438p.
- Hoover, K. H.: *College Teaching Today; A Handbook for Postsecondary Instruction*. Boston: Allyn and Bacon 1980 405p.
- Kenneth, E. E.: *Improving Teaching Styles*. San Francisco: Jossey-Bass 1980 107p.
- McKeachie, W. J.: *Learning, Cognition, and College Teaching*. San Francisco: Jossey-Bass 1980 116p.
- Morill, R. L.: *Teaching Values in College*. San Francisco: Jossey-Bass 1980 169p.
- Noonan, J. F.: *Learning about Teaching*. San Francisco: Jossey-Bass 1980 102p.
- Trillin, A. S., & Associates.: *Teaching Basic Skills in College: [a Guide to Objectives, Skills Assessment, Course Content, Teaching Methods, Support Services, and Administration]*. San Francisco: Jossey-Bass 1980 327p.
- Clift, J. C., & B. W. Imrie.: *Assessing Students, Appraising Teaching*. London: Croom Helm 1981 176p.
- Talley, J. E., & L. H. Henning: *Study Skills: Establishing a Comprehensive Program at the College Level*. Springfield, Ill: C. C. Thomas 1981 73p.
- Bess, J. L. (Ed.): *Motivating Professors to Teach Effectively*. *New Directions for Teaching and Learning*, No.10 San Francisco: Jossey-Bass 1982.
- Clarke, J.: *Resource-based Learning for Higher and Continuing Education*. London: Croom Helm 1982 211p.
- Cole, C. C.: *Improving Instruction: Issues and Alternatives for Higher Education*. Washington, D. C.: AAHE 1982 67p.
- Donald, B., & R. Hoggart.: *Professionalism and Flexibility in Learning*. Guildford: Society for Research into Higher Education 1982 167p.
- Newton, E. S.: *The Case for Improved College Teaching: Instructing High-Risk College Students*. New York: Vantage Press 1982 107p.
- Carolyn, L. E., et al.: *Students of College Teaching: Experimental Results, Theoretical Interpretations, and New Perspectives*. Lexington, Mass: Lexington Books 1983 222p.
- Eble, K. E.: *The Aims of College Teaching*. San Francisco: Jossey-Bass 1983 187p.
- Beard, R. M.: *Teaching and Learning in Higher Education*. London: Harper & Row 1984 333p.
- Fink, L. D.: *The First Year of College Teaching*. San Francisco: Jossey-Bass 1984 119p.
- Loman, J.: *Mastering the Techniques of Teaching*. San Francisco: Jossey-Bass 1984 245p.
- White, E. M.: *Teaching and Assessing Writing*. San Francisco: Jossey-Bass 1985 304p.
- Bergquist, W. H.: *Planning Effectivity for Educational Quality: An Outcomes Based Approach for Colleges Committed to Excellence*. San Francisco: Jossey-Bass 1986 218p.

- Milton, O., H. R. Pollio, & J. A. Eison.: Making Sense of College Grades: Why the grading system does not work and what can be done about it. San Francisco: Jossey-Bass 1986 287p.
- Richard, A. W., & J. A. Burden.: Teaching in the Small College: Issues and Applications. Westport, Conn.: Greenwood Press 1986 188p.
- Elton, L.: Teaching in Higher Education: Appraisal and Training. London: Kogan Page 1987 211p.
- ○
- Rich, P., W. S. Simpkins, R. K. Browne, & T. W. Field.: Research on Teaching in Higher Education: Student Notions of the Ideal Lecturer. *Vestes*, 8(2) 1970 pp187-191.
- Falk, B., & D. K. Lee.: University Teaching: Reality and Change. *Quarterly Review of Australian Education*, 4(4) 1971 pp1-58.
- Gaff, J. G., & R. C. Wilson.: The Teaching Environment. *AAUP Bulletin*, 57 1971 pp475-493.
- Roid, G. H.: Research on University Teaching: A Perspective. *Improving College and University Teaching*, 19 1971 pp252-255.
- Costia, F.: Lecturing Versus Other Methods of Teaching: A Review of Research. *British Journal of Educational Technology*, 1 1972 pp4-30.
- Knapper, C. K.: Improving Teaching Effectiveness. *Canadian Association of University Teachers Bulletin*, 21(1) 1972 pp9-11.
- Chickering, A. W.: College Advising for the 1970s. *New Directions for Higher Education*, No.3 1973.
- De Bloois, M., & D. D. Alder.: Stimulating Faculty Readiness for Instructional Development: A Conservative Approach to Improving College Teaching. *Educational Technology*, July 1973 pp16-19.
- Hedley, R. L., & C. C. Wood.: Improving University Teaching. *University Affairs*, 14(4) Association of Universities and Colleges of Canada 1973 pp2-3.
- Sheffield, E. F.: Approaches(Mostly Elsewhere)to the Improvement of Teaching in Higher Education. *Stoa*, 3(1) 1973 pp65-75.
- Chickering, A. W.: Assessing Students and Programs-A New Ball Game. *New Directions for Institutional Research*. 1974.
- Goldschmid, B., & M. L. Goldschmid.: Individualizing Instruction in Higher Education: A Review. *Higher Education*, 3(1) 1974 pp1-24.
- Good, H. M., & B. Trotter.: Accountability for Effective and Efficient University Teaching. *The Canadian Journal of Higher Education/Stoa*, 4(1) 1974 pp43-53.
- Holsclaw, J. E.: The Development of Procedural Guidelines for the Systematic Design of Instruction Within Higher Education. Los Angeles: University of Southern California 1974.
- Jamison, D., P. Suppes, & S. Wells.: The Effectiveness of Alternative Instructional Media: A Survey. *Review of Educational Research*, 44 1974 pp1-67.
- Probert, S.: A New Direction in Improving University and College Teaching. *Australian Journal of Advanced Education*, 4(2) 1974 pp4-8.
- Sheffield, E. F.: Characteristics of Effective Teaching in Canadian Universities - An Analysis Based on the Testimony of a Thousand Graduates. *The Canadian Journal of Higher Education/Stoa*, 4(1) 1974 pp7-29.
- Shore, B. M.: Instructional Development in Canadian Higher Education. *The Canadian Journal of Higher Education*, 4(2) 1974 pp45-53.
- Stanton, H. E.: Improving University Teaching. *Australian University*, 12(3) 1974 pp264-269.
- Wright, J. C., & R. Kelly: Cheating: Student/Faculty Views and Responsibilities. *Improving College and University Teaching*, 22(1). 1974 pp31-34.

- Foster, S. F.: Teaching Improvement at the University Level - Some Views and Some Prospects. *Journal of Education of the Faculty of Education*, 21 Vancouver: University of British Columbia 1975 pp63-71.
- Good, H. M.: Instructional Development - What? Why? How? *The Canadian Journal of Higher Education*, 5(1) 1975 pp33-51.
- McKeachie, W. J., & J. A. Kulik.: Effective College Teaching. *Review of Research in Education*, Vol.3 1975.
- Sullivan, A. M.: Research on Teaching. *The Canadian Journal of Higher Education*, 5(1) 1975 pp1-11.
- Cumming, G., I. T. Macbean, I. L. McLaughlin, & D. Woodhouse.: Aims and Methods in University Education. *Australian University*, 14(2), 1976 pp177-192.
- Gaff, J. G., et al.: Project on Institutional Renewal through the Improvement of Teaching. *Educational Horizons*, 55 1976 pp97-103.
- Hursh, D. E.: Personalized Systems of Instruction: What do the Data Indicate? *Journal of Personalized Instruction*, 1 1976 pp91-105.
- Shore, B. M.: Success and Failure of Formal Teaching Improvement Efforts in Higher Education. *Higher Education Bulletin*, 5(1) 1976 pp22-34.
- Miller, A. H.: Symposium on Teacher Education for Tertiary Teaching: An Outline of the Needs. *South Pacific Journal of Teacher Education*, 5(1) 1977 pp5-13.
- O'Neil, W. M.: Improving University Teaching and Learning. *South Pacific Journal of Teacher Education*, 5(1) 1977 pp14-21.
- Smith, D. G.: College Classroom Interactions and Critical Thinking. *Journal of Educational Psychology*, 69(2) 1977 pp180-190.
- Webb, J., & A. B. Smith: Improving Instruction in Higher Education. *Educational Horizons*, 55 1977 pp86-91.
- Willett, F. J.: Quality Control of University Teaching: The Responsibilities of a Vice-Chancellor. *South Pacific Journal of Teacher Education*, 5(1) 1977 pp28-33.
- Bogen, G. K.: Performance and Vitality as a Function of Student-Faculty Fit. *New Directions for Institutional Research*, No.20 1978.
- Lindquist, J.: Social Learning and Problem-Solving Strategies for Improving Academic Performance. *New Directions for Institutional Research*, No.20 1978.
- Parker, C. A., & J. Lawson.: From Theory to Practice to Theory: Consulting with College Faculty. *Personnel and Guidance Journal*, 56 1978 pp423-427.
- Cannon, R.: The Design, Conduct and Evaluation of a Course in Lecturing. *Programmed Learning & Educational Technology*, 16(1) 1979 pp16-22.
- Furedy, C.: Improving Lecturing in Higher Education. *The Canadian Journal of Higher Education*, 9(1) 1979.
- Foster, S. F., & J. G. Nelson.: Teaching Improvement in Canada: Data Concerning What and How. *Canadian Journal of Higher Education*, 10(2) 1980 pp120-125.
- Mathis, B. C.: What Happened to Research on College Teaching? *Journal of Teacher Education*, March-April, 31(2) 1980 pp17-21.
- Mauksch, H. O.: What are Obstacles to Improving Quality Teaching? *Current Issues in Higher Education*, 2(1) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1980.
- Menges, R. J.: Teaching Improvement Strategies: How Effective are They? *Current Issues in Higher Education*, 2(1) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1980.

- Levinson-Rose, J., & R. J. Menges.: Improving College Teaching: A Critical Review of Research. *Review of Educational Research*, 51 1981 pp403-434.
- Menges, R. J.: Instructional Methods. In Chickering, A. W., & Associates, *The Modern American College*. San Francisco: Jossey-Bass 1981.
- Sharp, G.: Acquisition of Lecturing Skills by University Teaching Assistants: Some Effects of Interest, Topic Relevance, and Viewing a Model Videotape. *American Educational Research Journal*, 18(Winter) 1981 pp491-502.
- Callas, D.: Rewards and Classroom Innovations. *Community College Review*, 10(Fall) 1982 pp13-18.
- Deci, E. L., & R. M. Ryan.: Intrinsic Motivation to Teach: Possibilities and Obstacles in Our Universities. *New Directions for Teaching and Learning*, No.10 1982.
- Friedman, C. P.: Factors Affecting Adoption of Instructional Innovations: An Example from Medical Education. *Research in Higher Education*, 16(4) 1982 pp291-302.
- Gamson, Z. F.: The New Vitality in Undergraduate Teaching. *Journal of the National Association for Women Deans, Administrators, & Counselors*, 46(Fall) 1982 pp32-35.
- Rutherford, D.: Developing University Teaching: A Strategy for Revitalisation. *Higher Education*, 11(March) 1982 pp177-191.
- Barker, W. L.: Ripple on the Pond: A Teaching Fellows Program Examined. *New Directions for Teaching and Learning*, No.15 1983.
- Ferren, A., & W. Geller.: Classroom Consultants: Colleagues Helping Colleagues. *Improving College and University Teaching*, 31 1983 pp82-86.
- Millman, J.: Improving Instruction through Research. *Improving College and University Teaching*, 31 1983 pp13-15.
- Corcoran, M., & S. M. Clark.: Professional Socialization and Contemporary Career Attitude of Three Faculty Generations. *Research in Higher Education*, 20 San Francisco: Jossey-Bass 1984 pp131-153.
- Gleason, M.: Ten Best on Teaching: A Bibliography of Essential Sources for Instructors. *Improving College and University Teaching*, 32 1984 pp11-13.
- Lawrence, J. H.: Developmental Needs as Intrinsic Incentives. *New Directions for Higher Education*, No.51 1985.
- Powell J. P., & L. W. Andresen.: Humor and Teaching in Higher Education. *Studies in Higher Education*, 10(1) 1985 pp79-90.
- Rodriguez, R. N.: Teaching Teaching to Teaching Assistants. *College Teaching*, 33 (Fall) 1985 pp173-176.
- Cross, K. P.: A Proposal to Improve Teaching. *AAHE Bulletin*, 39(September) 1986 pp9-14.
- Moses, I.: Educational Development Units: A Cross-Cultural Perspective. *Higher Education*, 16(4) 1987 pp449-479.
- Sherman, T. M., et al.: The Quest for Excellence in University Teaching. *Journal of Higher Education*, 58(January/February) 1987 pp66-84.
- Stevens, E.: Tinkering with Teaching. *The Review of Higher Education*, 12(1) 1988 pp63-78.
- Boud, D.: The Role of Self-Assesment in Student Grading. *Assesment and Evaluation in Higher Education*, 14(1) 1989 pp20-30.

3.3 教育工学

- Page, C. F.: *Technical Aids to Teaching in Higher Education*. London: Society for Research into Higher Education 1971 52p.

Carnegie Commission on Higher Education.: The Fourth Revolution: Instructional Technology in Higher Education. New York: McGraw-Hill 1972.

Levien, R. E.: The Emerging Technology; Instructional Uses of the Computer in Higher Education. New York: McGraw-Hill 1972 585p.

Mosmann, C.: Academic Computers in Service. San Francisco: Jossey-Bass 1973 186p.

Rockart, J. F., & M. S. S. Morton.: Computers and the Learning Process in Higher Education. New York: McGraw-Hill 1975 356p.

Yarrington, R.: Using Mass Media for Learning. Washington, D.C.: American Association of Community and Junior Colleges 1979 89p.

○ ○

Kapfer, M. B., & G. M. Della-Piana: Educational Technology in the Inservice Education of University Teaching Fellows. Educational Technology, 14 1974 pp22-28.

Sayer, S., & A. Harding.: Time To Look Beyond Technology To Better Use Of Human Resources. Times Higher Education Supplement, 20 December 1974.

Hershfield, A. F.: Education's Technological Revolution: An Event in Search of Leaders. Change, 12(8) 1980 pp48-52.

3.4 學習

Dressel, P. L., & M. M. Thompson.: Independent Study. San Francisco: Jossey-Bass 1973 161p.

Trivett, D. A.: Academic Credit for Prior Off-Campus Learning. (ERIC/Higher Education Research Report No.6) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1975.

Miller, T. K., & J. S. Prince.: The Future of Student Affairs: A Guide to Student Development for Tomorrow's Higher Education. San Francisco: Jossey-Bass 1976.

Nyquist, E. B., J. N. Arbolino, & G. R. Hawes.: College Learning-Anytime, Anywhere; New Years for Anyone to Get College Course Credits and College Degrees by Off-Campus Study and Examinations. New York: Harcourt Brace Jovanovich 1977 164p.

Claxton, C. S., & Y. Ralston.: Learning Styles: Their Impact on Teaching and Administration.(AAHE-ERIC/Higher Education Research Report No.10. ERIC Document Reproduction Service No. ED 167 065) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1978.

Maxwell, M.: Improving Student Learning Skills; A Comprehensive Guide to Successful Practices and Programs for Increasing the Performance of Underprepared Students. San Francisco: Jossey-Bass 1979 518p.

Beard, R. M., & I. J. Senior.: Motivationg Students. London: Routledge & Kegan Paul 1980 107p.

Frederick, J., et al.: Learning Skills: A Review of Needs and Services to University Students. Report of a Study Requested by the Academic Board of the University of Melbourne. Pakville: University of Melbourne 1981 113p.

Wilson, J. D.: Student Learning in Higher Education. London: Croom Helm 1981 194p.

Wright, J.: Learning to Learn in Higher Education. London: Croom Helm 1982 199p.

○ ○

Stallings, W. M., & E. K. Leslie.: Student Attitudes Toward Grades and Grading. Improving College and University Teaching, 18(1) 1970 pp66-68.

Dressel, P.: Models for Evaluating Individual Achievement. *Journal of Higher Education*, 5(2) 1974 pp194-206.

Gaff, J. G., R. C. Wilson, L. Wood, E. R. Dienst, & J. L. Bavry.: Study II. Faculty Impact on Students. In R. C. Wilson and others, *College Professors and Their Impact on Students*. New York: John Wiley 1975.

Moses, I.: Supervision of Higher Degree Students: Problem Areas and Possible Solutions. *Higher Education Research and Development*, 3(2) 1984 pp153-165.

Weber, D. R.: Independent Study: Direction is the Key to Success. *Innovative Higher Education*, 13(2) 1989 pp85-89.

4. 大学評価

4.1 大学評価

- Centra, J. A.: *The College Environment Revisited: Current Descriptions and a Comparison of Three Methods of Assessment*. (Research Bulletin RB-70-44) Princeton: Educational Testing Service 1970.
- Ladd, D. R.: *Change in Educational Policy: Self-Studies in Selected Colleges and Universities*. New York: McGraw-Hill 1970 231p.
- Lawrence, B., G. Weathersby, & V. W. Patterson. (Eds.): *Outputs of Higher Education: Their Identification, Measurement, and Evaluation*. Boulder, Colo.: Western Interstate Commission for Higher Education 1970.
- Caro, F. G.: *Readings in Evaluation Research*. New York: Russell Sage Foundation 1971.
- Hartnett, R. T.: *Accountability in Higher Education: A Consideration of Some of the Problems of Assessing College Impacts*. New York: College Entrance Examination Board 1971.
- Roberson, E. W. (Ed.): *Educational Accountability Through Evaluation*. Englewood Cliffs, N.J.: Educational Technology Publications 1971.
- Campbell, P. B., & J. S. Beers.: *Evaluation: The State of the Art*. Princeton: Educational Testing Service 1972.
- Mortimer, K. P.: *Accountability in Higher Education*. Washington, D.C.: ERIC Clearinghouse on Higher Education and the American Association for Higher Education 1972.
- Bowen, H. R. (Ed.): *Evaluating Institutions for Accountability: New Directions for Institutional Research*. San Francisco: Jossey-Bass 1974.
- Orlans, H., N. J. Levin, E. K. Bauer, & G. E. Arnstein.: *Private Accreditation and Public Eligibility*. Vols. 1 and 2. Washington, D.C.: Brookings Institution and the National Academy of Public Administration Foundation 1974.
- Harcleroad, F. F., & F. G. Dickey.: *Educational Auditing and Voluntary Institutional Accrediting*. (ERIC/Higher Education Research Report No.1) Washington, D.C.: American Association for Higher Education 1975.
- Hodgkinson, H. L., & Others.: *Improving and Assessing Performance: Evaluation in Higher Education*. Berkeley: Center for Research and Development in Higher Education, University of California 1975 242p.
- Dolan, W. P.: *The Ranking Game; the Power of the Academic Elite*. [Evaluation of Higher Education Committee of the Study Commission on Undergraduate Education and the Education of Teachers.] 1976 108p.
- William, J. G., & Others.: *Mutual Benefit Evaluation of Faculty and Administrators in Higher Education*. Cambridge: Ballinger Pub. Co. 1976 222p.
- Miller, R. I.: *The Assessment of College Performance: A Handbook of Techniques and Measures for Institutional Self-Evaluation*. San Francisco: Jossey-Bass 1979 374p.
- Pace, C. R.: *Measuring Outcomes of College*. San Francisco: Jossey-Bass 1979.
- ○
- Dressel, P. L.: *Evaluation of the Environment, the Process, and the Results of Higher Education*. In A. S. Knowles. (Ed.), *Handbook of College and University Administration*. Vol. 2; Academic. New York: McGraw-Hill 1970.

- Bess, J. L.: Ranking Academic Departments: Some Cautions and Recommendations. *Journal of Higher Education*, 42 1971 pp721-727.
- Pfnister, A. O.: Regional Accrediting Agencies at the Crossroads. *Journal of Higher Education*, 42 1971 pp558-573.
- Hodgkinson, H. L.: Goal Setting and Evaluation. In R. M. Millard and others. (Eds.), *Planning and Management Practices in Higher Education: Promise or Dilemma?* Denver, Colo.: Education Commission of the States 1972.
- Kells, H. R.: Institutional Accreditation: New Forms of Self Study. *The Educational Record*, 53(2) 1972 pp143-148.
- SASHEP Commission Report.: Basic Policies for Accreditation. *The Educational Record*, 53(2) 1972 pp149-156.
- Hillway, T.: Evaluating College and University Administration. *Intellect*, 101 1973 pp426-427.
- Petrowski, W. R., E. L. Broen, & J. A. Duffy.: National Universities and the ACE Ratings. *Journal of Higher Education*, 44 1973 pp495-513.
- Coughlin, E. K.: The Gourman Report: A Mysterious Rating of Universities. *The Chronicle of Higher Education*, May 8, 1978 p5.
- Neumann, Y., & E. Finaly-Neumann.: Examination of Alternative Models of Students' Assessment of their College: Differences Between Hard and Soft Sciences. *Assessment and Evaluation in Higher Education*, 14(1) 1989 pp11-19.
- Falk, B., & D. K. Lee.: The Assessment of University Teaching. (SRHE Monograph 16) Guildford: Society for Research into Higher Education 1971 47p.
- Hildebrand, M., R. C. Wilson, & E. R. Dienst.: Evaluating University Teaching. Berkeley: Center for Research and Development in Higher Education, University of California 1971.
- Phi Delta Kappa, National Study Committee on Evaluation.: *Educational Evaluation and Decision Making*. Itasca, Ill.: Peacock 1971.
- Miller, R. I.: *Evaluating Faculty Performance*. San Francisco: Jossey-Bass 1972 145p.
- Centra, J. A.: The Relationship Between Student and Alumni Ratings of Teachers. Princeton, N.J.: Educational Testing Service 1973.
- Centra, J. A.: The Student as Godfather? The Impact of Student Ratings on Academia. (Research Memorandum RM-73-8) Princeton: Educational Testing Service 1973.
- Centra, J. A., & R. L. Linn.: Student Points of View in Ratings of College Instruction. (Research Bulletin RB-73-60) Princeton: Educational Testing Service 1973.
- Pace, C. R. (Ed.): *Evaluating Learning and Teaching: New Directions for Higher Education*. San Francisco: Jossey-Bass 1973.
- Borich, G. D. (Ed.): *Evaluating Educational Programs and Products*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall 1974.
- Centra, J. A.: Colleagues as Raters of Classroom Instruction. (Research Bulletin RB-74-18) Princeton: Educational Testing Service 1974.
- Doi, J. I. (Ed.): *Assessing Faculty Effort. New Directions for Higher Education*. San Francisco: Jossey-Bass 1974.

4.2 教員・授業評価

- Eble, K. E.: The Recognition and Evaluation of Teaching. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 046 350) Washington, D.C.: American Association of University Professors 1971.

- Miller, R. I.: *Developing Programs for Faculty Evaluation: A Sourcebook for Higher Education*. San Francisco: Jossey-Bass 1974 248p.
- Page, C. F.: *Student Evaluation of Teaching; The American Experience*. London: Society for Research into Higher Education 1974 99p.
- Seldin, P.: *How Colleges Evaluate Professors*. New York: Blythe-Pennington 1975.
- Dressel, P. L.: *Handbook of Academic Evaluation: Assessing Institutional Effectiveness, Student Progress, and Professional Performance for Decision Making in Higher Education*. San Francisco: Jossey-Bass 1976 518p.
- Centra, J. A.: *How Universities Evaluate Faculty Performance: A Survey of Department Heads*. (Graduate Record Examination Board Research Report No. 75-56R. ERIC Document Reproduction Service No. ED 157 445) Princeton, N.J.: Educational Testing Service 1977.
- Centra, J. A. (Ed.): *Renewing and Evaluating Teaching*. *New Directions for Higher Education*, No.17 San Francisco: Jossey-Bass 1977.
- Anderson, S. B., & S. Ball.: *The Profession and Practice of Program Evaluation*. San Francisco: Jossey-Bass 1978 252p.
- Centra, J. A. (Eds.): *Using Student Assessments to Improve Performance and Vitality*. *New Directions for Institutional Research*, No.20 San Francisco: Jossey-Bass 1978.
- Centra, J. A.: *Determining Faculty Effectiveness: Assessing Teaching, Research, and Service for Personnel Decisions and Improvement*. San Francisco: Jossey-Bass 1979 204p.
- Lawrence, J. K., & K. C. Green.: *A Question of Quality: The Higher Education Ratings Game*. AAHE-ERIC/Higher Education Research Report, No.5 1980 68p.
- Barak, R. J.: *Program Review in Higher Education: Within and Without*. Boulder, Col.: National Center for Higher Education Management Systems 1982 193p.
- Webster, D. S., & C. C. Thoams.: *Academic Quality Rankings of American Colleges and Universities*. Springfield, Ill.: C. C. Thomas 1986 209p.
- ○
- Costin, F., W. T. Greenough, & R. J. Menges.: *Student Ratings of College Teaching: Reliability, Validity, and Usefulness*. *Review of Educational Research*, 41 1971 pp511-535.
- McKeachie, W. J., Y. Lin, & W. Mann.: *Student Ratings of Teacher Effectiveness: Validity Studies*. *American Educational Research Journal*, 8(3) 1971 pp435-445.
- Hills, J. R.: *Consistent College Grading Standards Through Equating*. *Educational and Psychological Measurement*, 32(1) 1972 pp137-146.
- Knapper, C. K., B. McFarlane, & J. Scanlon.: *Student Evaluation: An Aspect of Teaching Effectiveness*. *Canadian Association of University Teachers Bulletin*, 21(2) 1972 pp26-29.
- Magin, D.: *Evaluating the Role Performance of University Lecturers*. *Universities Quarterly*, 28(1) 1973 pp84-96.
- Smock, H. R., & T. J. Crooks.: *A Plan for the Comprehensive Evaluation of College Teaching*. *The Journal of Higher Education*, 44(8) 1973 pp577-586.
- Committee "C" on College and University Teaching, Research and Publication.: *Statement on Teaching Evaluation*. *American Association of University Professors Bulletin*, 60(2) 1974 pp168-170.
- Doyle, K. O., Jr., & S. E. Whitely.: *Student Ratings as Criteria for Effective Teaching*. *American Educational Research Journal*, 11(3) 1974 pp259-274.

- Hind, R. R., S. M. Dornbusch, & W. R. Scott.: A Theory of Evaluation Applied to a University Faculty. *Sociology of Education*, 47(1) 1974 pp114-128.
- Kulik, J. A., & C. L. Kulik.: Student Ratings of Instruction. *Teaching of Psychology*, 1 1974 pp51-57.
- Sullivan, A. M., & Skanes, G. R.: Validity of Student Evaluation of Teaching and the Characteristics of Successful Instructors. *Journal of Educational Psychology*, 66 1974 pp584-590.
- Wood, K. L. A. S., & M. A. Straus: Class Size and Student Evaluations of Faculty. *Journal of Higher Education*, 45(7) 1974 pp524-534.
- American Association of University Professors.: Statement on Teaching Evaluation. *AAUP Bulletin*, 61 1975 pp200-202.
- Blackburn, R. T., & M. J. Clark.: An Assessment of Faculty Performance: Some Correlates between Administrator, Colleagues, Students, and Self-Ratings. *Sociology of Education*, 48 1975 pp242-256.
- Centra, J. A.: Colleagues as Raters of Classroom Instruction. *Journal of Higher Education*, 46 1975 pp327-338.
- Frey, P. W., D. W. Lenard, & W. W. Beatty.: Student Ratings of Instruction: Validation Research. *American Educational Research Journal*, 12 1975 pp435-447.
- Greenwood, G. E., & R. R. Renner.: Student Ratings of College Teaching: Their Validity and Use in Administrative Decision-Making. *Science Education*, 59 1975 pp493-498.
- Henry, N. W., & Q. F. Willis.: A Non-Threatening Procedure for the Evaluation of Tertiary Teaching. *Australian Journal of Advanced Education*, 5(1) 1975.
- Kulik, J. A., & W. J. McKeachie.: The Evaluation of Teachers in Higher Education. *Review of Research in Education*, Vol.3 1975.
- Maddox, H.: The Assessment of Teaching by Ratings - A Critique. *Australian University*, 13(2) 1975 pp139-147.
- Marsh, H. W., H. Fleiner, & C. S. Thomas.: Validity and Usefulness of Student Evaluations of Instructional Quality. *Journal of Educational Psychology*, 67 1975 pp833-839.
- Norr, J. L., & K. S. Crittenden.: Evaluating College Teaching as Leadership. *Higher Education*, 4 1975 pp317-333.
- Buss, T. D.: Student Evaluation for Curriculum and Teacher Development. *The Vocational Aspect of Education*, 28(69) 1976 pp19-23.
- Glasman, N. S., & W. H. Gmelch.: Purposes of Evaluation of University Instructors: Definitions, Delineations and Dimensions. *The Canadian Journal of Higher Education*, 6(2) 1976 pp37-55.
- Greenwood, G. E., A. Hazelton, A. B. Smith, & W. B. Ware.: A Study of the Validity of Four Types of Student Ratings of College Teaching Assessed on a Criterion of Student Achievement Gains. *Research in Higher Education*, 5 1976 pp171-178.
- Williams, R. G., & J. E. Ware.: Validity of Student Ratings of Instruction under Incentive Conditions: A Further Study of the Dr. Fox Effect. *Journal of Educational Psychology*, 68 1976 pp48-56.
- Centra, J. A.: The How and Why of Evaluating Teaching. *New Directions for Higher Education*, No.17 1977 pp93-106.
- Centra, J. A.: Student Ratings of Instruction and their Relationship to Student Learning. *American Educational Research Journal*, 14 1977 pp17-24.
- Falk, B.: Evaluation of Teaching: Decision Making about Teachers and Courses. *South Pacific Journal of Teacher Education*, 5(1) 1977 pp41-47.

- Knapper, C. K., G. L. Geis, C. E. Pascal, & B. M. Shore.: If Teaching is Important...the Evaluation of Instruction in Higher Education. (Canadian Association of University Teachers Monograph Series) Toronto: Clarke-Irwin 1977.
- Mackenzie, R. S.: Essential Features of a Faculty Evaluation Program. *Journal of Dental Education*, 41 1977 pp301-306.
- Miller, A. H.: Improving the Facilities for Evaluating Tertiary Teaching: Some Initial Steps. *South Pacific Journal of Teacher Education*, 5(1) 1977 pp47-59.
- Rotem, A., & N. Glasman.: Evaluation of University Instructors in the United States: The Context. *Higher Education*, 6(1) 1977 pp75-92.
- Gaff, J. G., & B. R. Morstain.: Evaluating the Outcomes. *New Directions for Higher Education*, No.24 1978.
- Goldschmid, M. L.: The Evaluation and Improvement of Teaching in Higher Education. *Higher Education*, 7(2) 1978 pp221-245.
- Cranton, P. A.: The McGill Faculty and Course Evaluation System. *The Canadian Journal of Higher Education*, 9(1) 1979.
- McKeachie, W. J.: Student Ratings of Faculty: A Reprise. *Academe*, 65 1979 pp384-397.
- Greenwood, G. E., & H. J. Ramalgi.: Alternatives to Student Ratings of College Teaching. *Journal of Higher Education*, 51(6) 1980 pp673-684.
- Marsh, H. W.: Validity of Students' Evaluations of College Teaching: A Multitrait-Multimethod Analysis. *Journal of Educational Psychology*, 74 1982 pp264-279.
- Bennet, J. B.: Periodic Evaluation of Tenured Faculty Performance. *New Directions for Higher Education*, No.49 1985 pp65-74.
- Eison, J.: Assessing Professional Development Interests of Faculty at a State University. *Journal of Staff, Program, & Organization Development*, 4(Fall) 1986 pp61-65.
- Wilson, R. C.: Improving Faculty Teaching: Effective Use of Student Evaluations and Consultants. *Journal of Higher Education*, 57(March/April) 1986 pp196-211.
- Wilson, C. T.: Student Evaluation-of-Teaching Forms: A Critical Perspective. *The Review of Higher Education*, 12(1) 1988 pp79-95.
- Isaacs, G.: Changes in Ratings for Staff Who Evaluated Their Teaching More Than Once. *Assesment and Evaluation in Higher Education*, 14(1) 1989 pp1-10.

第 二 部

ファカルティ・デベロップメント に関する主要文献紹介

William H. Bergquist, Steven R. Philips, Gary H. Quehl 著
『ファカルティ・デベロップメントのためのハンドブック
——A Handbook for Faculty Development』

(The Council for the Advancement of Small Colleges, 1975年)

大 膳 司*

Faculty Development (以下、FDと省略)の定義は、提唱者と同じ数だけの定義があると言われている。

本書では、「FDとは、個々の教授団、あるいは、教員、人間、組織のメンバーとしての教授団に突きつけられている諸問題に焦点を合わせることによって、個々の教室で生じている教育活動の質を改善するための試みである」と定義している。

本書は、実際にFDを行なううえでの理論的ガイドラインと実践的提案とを示すことによって、教授活動や学習活動を改善するための接近法を援助するようデザインされている。

1. 本書の構成

構成は以下のとおりである。

まえがき	8章 チームティーチング
セクションI FD入門	9章 意志決定
1章 FDへの総合的接近	10章 葛藤の操作
セクションII 教授能力の発達	セクションIV 人格的発達
2章 教授能力発達：概観	11章 人格の発達
3章 教授過程の評価	12章 教育に関する討論
4章 教授過程の観察及び診断	13章 援助技術
5章 教室での訓練	セクションV FDプログラムの実施
6章 教育方法、教育技術	14章 FDワークショップのデザイン
セクションIII 組織発達	15章 FDプログラムのデザイン
7章 組織発達：概観	

本書は5つのセクションから構成されており、各セクションは、数節から構成されている。

セクションIでは、FDを簡単に概観している。続いて、II、III、IVの各セクションでは、それぞれ、教授能力の発達 (instructional development)、組織発達 (organizational development)、人格の発達 (personal development)について扱っている。この3つのセクションが本書の中心部分である。

* 大学教育研究センター助手

最後に、セクションVでは、大学を発展させる数多くの方法が提案されており、各方法ごとのFDプログラムが示されている。

2. 本書の内容

では、各セクションと章の内容を紹介しよう。

セクションI FD入門

1章 FDへの総合的接近法

FDは、米国大学における多くの教授団や管理・運営者にとってますます著名な概念となってきた。高等教育機関は、学生、両親、州および連邦政府から求められている会計責任 (accountability)に加えて、財源の削減、在籍者数の停滞及び減少、教授団の移動の減少、という厳しい現実と直面している。18～22才人口の教育は、高等教育機関が中心となっているので、特に教授団は、教室における教授活動や学生との関係に対する個人的態度や専門家の態度を再検討することが求められている。多くの教授団は、学科の構造や管理体系の再組織化と同様に、新たに教室の運営方法における訓練を受けることが求められている。キャンパス内で行われているFDを支える、3つの基本的な前提は、

- (1) 教育は、大学教授団の専門的役割の中の重要な側面であり、高く評価されるべきである。
- (2) 大学教授団の育成において、教育は、あまり重要な関心がもたれていない。
- (3) 教育は、昇進やテニユアー獲得において、しばしば無視されている。

A. 1960年代のFDへの接近法

教育活動や学習活動を改善するための過去の接近法として、カリキュラムの変更、優秀な学生を入学させる、著名な大学院大学卒の博士号取得者を新たに雇用する、学生/教授団比を下げる、教育資料センターを設置する、あらたな管理システムを設ける、総合的な自己教育を行う、等があったが、それらは、高等教育に生じている劇的な変化に対処することができなかった。

もっとも広く使用された3種類のFDへのアプローチは、①学生/教授団比の削減、②ビデオテープ・システム、教育コンピュータ、学習マシンのような高価な新教育技術の購入、③新鮮な考え方をもった若い博士号を持った教員の確保、であった。

B. 1970年代のFDへの接近法

1970年代の高等教育が直面している新規で困難な諸問題を解決するために求められている重要な教育改善を行うためのFDプログラムは、包括的で、様々な戦略に基づいている。以下でわれわれが提案しようとしているFDに対する接近は、重要な変化が、態度、過程、構造の3つのレベルで生じる、という前提に基づいており、それらの個々のレベルのどれか1つのみに注目するだけではめったに成功しないのである。

セクションII 教授能力の発達

2章 教授能力の発達：概観

教授団は、教育に対して、自分の特別な教育哲学に基づくとか、自分の師の教授法を踏襲するとかいった各自独特な接近法をとっている。

しかし、そのような教育への接近法を取る場合、(1)講義を聴講している学生の学習スタイルを考慮しているかどうか、(2)講義内容や講義を取り巻く環境と矛盾していないかどうか、などの重要な要素を考慮することに失敗している場合が多い。

もし、効果的なFDプログラムを実施しようとするならば、講義内容、教授スタイル、学習スタイル、

教育環境，を考慮しなければならない。

すなわち，効果的な教育を行う上で，それら4つの構成要素は，教師や学生の技術，知識，動機と同様に重要であり，FDの主要な目標というは，教授団が，様々な学習，内容，環境に適応した教育アプローチを計画し実行できるように知識や技術を提供することである，と著者は結んでいる。

続いて，A.教授スタイル，B.学習スタイル，C.教授内容のスタイル，D.教育環境のスタイル，の各段落において，上記4つの要素と関連したいくつかの範疇を簡単にレビューし，E.教授，学習，内容の段落で，それら4つの要素を体系的に統合しようと試みている。

本セクションの残りの4つの章においては，教授能力発展のための4つの構成要素，すなわち，評価，診断，教室での訓練，教授方法や技術，について検討している。

3章 教授過程の評価

評価の持っている，変化を生じさせるという役割は，広範に認識され受け入れられている。体系的で，思慮深く，変化することを望む組織であるならば，現在の運営状態と理想的な結果との不一致について，絶えず評価しなければならない。その評価法の1つに，学生評価 (student evaluation)があり，おそらく，これは，教授団の行為の変化を喚起するもっとも一般的に利用されている方法である。さらに，自己評価 (self evaluation)と同僚評価 (peer evaluation)があるが，これらは，たまにしか使用されていない。しかしながら，多くの教授団は，後者2つの評価法の価値を認識しており，ある場合には，学生評価よりも，こちらの評価のほうを望んでいるものである。

しかし，以下の2つの点に留意しておかねばならない。

1. 自己評価，同僚評価，学生評価は，FDの有効な方法となりうるが，それぞれの方法は，統合して使用されねばならない。
2. 変化の過程は，微妙で，複雑であって，教師が，自尊心を傷つけない程度で，自己のイメージと矛盾した情報に直面した時に，変化が生じるものである。

4章 教授過程の観察と診断

大学教育は，もっとも多く観察されているが，もっとも少なく分析されている活動である。教師としてのキャリアの中で，教授団は，自分の教室で何が起きているのかについて，客観的で，公平に記述されることはけっしてなかった。しかし，そのような情報なしで，教授団に，改善に向けて努力することを期待するのは非現実的である。教室の観察と診断は，この必要な情報を提供する1つの方法である。実際，ここ数年来，教育の診断は，FDの重要な構成要素として認識されてきた。

A. 診断サービスの確立

診断サービスをFDプログラムの中に含めるための効果的な方法は，診断チームを設置することである。その診断チームは，教授団と学生によって構成されるべきである。

彼らには，複雑な資質や技術が必要とされており，単なる技術屋となるべきではなく，むしろ，情報やその分析ばかりか，人間関係の技術の使用経験を持ったコンサルタントとなるべきである。診断者は，標準的な道具や方法を教授者の特殊な必要性に適用するに，融通をきかさなければならない。その際，契約の技術は，教授者が求めている評価にとって本質的なことである。

B. 授業の観察と診断の3つの局面

授業の診断は，3つの主要な活動から構成されている。その各々は，コンサルティング過程にとって本質的なことである。それらの3つの活動は，契約 (contracting)，情報の収集と分析 (information collection and analysis)，情報のフィードバック (information feedback)である。

5章 教室での訓練：マイクロティーチングと授業実験室

A. マイクロティーチング

マイクロティーチングは、1960年代に開発された教育訓練の技術であり、以下に、その典型的な活動例を示しておく。

「例. 4人の生徒を前にして、模擬授業が行われている。それも5分間の授業である。15フィート離れたところに、指導主事がポータブルビデオカメラでそのグループの授業風景を記録したり、ノートをつけている。授業が終わるとすぐに、学生にアンケートをとる。続いて、指導主事のノートや学生がつけたアンケートを検討したり、ビデオテープの一部をもう1度見たりして、指導主事と教師はその授業について話し合う。休憩の後、すべてのプロセスをもう一度繰り返してみる。しかしながら、今度は、別の4人のグループを教えるのである。」

B. 授業実験室

授業実験室は、教授団がすでに習得している教育技術を洗練したり、新たな教育技術を発展させる安全で、統制された環境を提供する。

授業実験室において、使用されるべき技術は、教授団自身によって事前に決定されているという点で、マイクロティーチングとは異なっている。

6章 教育方法と教育技術

総合的なFDプログラムにおける一連の構成要素の1つとして、教育方法と教育技術における訓練は本質的なものである。

教育方法は、教員の必要とする情報を提供してくれるであろうし、また、新たな教育技術の知識を獲得することによって、教師は、教育コースを計画したり、様々な役割を担った学生に自分自身を役立たせるということにおいて、より大きな自由を経験するであろう。

セクションⅢ 組織的発達

7章 組織発達：概観

学生の需要、教授団の役割、機関の目的などについての新たな認識に基づいて革新的な教育課程を展開しようとしている教授団は、しばしば、同僚からの強力な抵抗にあうであろう。たとえ最良に計画された教育やFDプログラムであっても、そうである。

皮肉にも、FDプログラムの成功は、初期の段階でそのプログラムが遭遇する抵抗の程度によって正確に測定できるものである。

以上の理由から、FDプログラムは、変化にともなう組織の諸問題を直接に取り扱わねばならない。しかし、これまでに、高等教育においては、それらの問題は体系的に扱われてこなかったのである。

以下の3つの章において、相互に緊密に関連する組織発達の側面、すなわち、チームビルディング、意志決定、葛藤の管理、に注目する。

第4の側面として、管理の訓練という問題があるが、本書では特に章を設けて扱わない。たいていの管理の訓練プログラムでは、少なくとも、財政計画、管理運営方法、非学術的人事管理、のような重要な領域を扱っている。

8章 チームビルディング (team-building)

過去10年の間に、米国の多くの組織で、仕事集団の有効性を高める方法としてチームビルディングの価値が認識されてきた。特に、もし、この組織が短期間の「一時的な集まり」として機能しなければな

らないときはそうである。

学術組織におけるチームビルディングは、その組織が意志決定したり葛藤を管理する能力を改善してくれる。しかし、チームビルディングは、組織の構成員が意志決定したり、葛藤を管理したりする技術を直接提供するというのではなく、もし、それらの技術が一度獲得されたならば、今後はそれらの技術が完全に使用できるような支持的な雰囲気を組織内に形成するのである。

学術環境におけるチームビルディングは、学科が将来取るべき方向性や学科の役割についての討論からなりたっている。

ブルース・タックマンによって、小集団発展のモデルが提示された。彼の発展モデルは、4つの段階から構成されており、それぞれ、形成 (forming)、混乱 (storming)、規範 (norming)、実践 (performing) と名づけられている。

形成の段階は、試験と依存の過程であり、混乱の段階は、集団内での葛藤が特徴で、規範の段階は、集団の結合を特徴とし、最後に、実践の段階においては、柔軟な集団内の役割を用いて、集団が様々な仕事に対して反応する能力を発達させるのである。

チームビルディングは、その集団が上記のどの段階にあるかを分析することによって、正しく用いることが可能となる。

9章 意志決定

学術組織は、意志決定手段が効率的であるとはお世辞にも言えない。

しかし、意志決定は、効果的な機関や効果的なFDプログラムの実施にとって重要なものである。もし、意志決定手段が、無理解のままであったり、変化しないでこのままであったりするならば、学科や機関レベルで行われている教育に影響を与える重要な決定の改善はほとんど期待できないであろう。

本章では、2つの接近法 (コンセンサス意志決定への接近法と集団機能への仕事、方法、過程接近法) を提示することによって意志決定の問題を扱っている。有効な教育と同様に、有効な意志決定は学習可能な課題なのである。

10章 葛藤の処理

米国の大学における葛藤の利用方法に関して多くの誤解がある。それは、葛藤にたいして個々人の取る異なった態度、すなわち、感情、価値観、目標の相違と結び付いている態度から生じている。

ほとんど誰でも、葛藤に対して様々な態度を示している。というのは、我々は各々、異なった種類の葛藤にたいして積極的な感情をいだいたり、消極的な感情をいだいたりするからである。葛藤は、しばしば、個々人や社会にたいして、無秩序、破壊、死をもたらすかもしれないし、逆に、機会、発展、成長をもたらすこともできる。

このようなわけで、葛藤を拒んだり、押さえたり、排除するということは、成長や進歩の源を拒んだり、押さえたり、排除するということにもなるのである。

A. 4種類の葛藤

破壊よりも成長をもたらすように、葛藤を効果的に管理するためには、生じうる様々な種類の葛藤を考慮しておくことが肝要である。

葛藤には、異なった目標にたいする葛藤、共通目標を達成するための異なった方法にたいする葛藤、希少財にたいする葛藤、同一性に対する恐怖によって生じる葛藤、という4種類の葛藤がある。

B. 葛藤の管理へのSTP接近法

葛藤を解決するための特に有効な接近法の1つにSTP接近法がある。個人間の葛藤や組織内の葛藤

は、その葛藤に影響する状況変数 (situational variables) と、その状況を改善するために提示される様々な目標 (targets), そしてその状況をより望ましい状態へ変化させるための提案 (proposals), に注目することによって管理できるというものである。

セクションⅣ 人格の発達

11章 人格の発達

有効なFDプログラムは、しばしば、教授団が自身の生活目標や価値観を再検討する要因となりうる。そして、人格の変化は、必然的に、教授団の生活の他の面にたいしても意味深い影響をもたらす。このように、FDプログラムを計画する場合には、そのプログラムが、人格を変化させるという効果をもっている可能性についての認識を持っておかねばならない。

FDにおける人格発達の側面には、3つの基本的な前提がある。第1の前提は、そのプログラムが、いくらよくみても不成功であったり、最悪の場合有害であったりする、ということを外面的に示すかも知れない様々の出来事に対して備えておかねばならない。第2の前提は、FDプログラムは、個人的な問題で苦しんでいる人にたいして、個人的な援助を提供しなければならない。第3の前提は、FDプログラムは、治療的事業ではない。すなわち、精神治療でもないし、精神治療の代用でもないのである。

3つの異なったタイプの人格発達のための活動は、以上3つの前提に基づいている。その活動とは、生活設計ワークショップ (life planning workshop), 人格発達ワークショップ (personal growth workshops), そして、支持的・治療的カウンセリング (supportive and therapeutic counseling) である。

FDにおけるこの3つの人格発達に関する構成要素は、教授団から恐怖に思われたり、しばしば誤解されたりしているけれども、人格発達ワークショップ以外の2つの活動は、FDに関心を示しているたいていの教授団に受け入れられている。以下の各章でその2つの活動をそれぞれ扱うこととする。

12章 教育に関する討論

ソクラテスは、「検討されない人生は、生きるに値しない。」と述べている。

実際、われわれの専門職としての生活もまた、まったく検討されておらず、ソクラテスの表現によれば、生かされていないことになる。多くの教授団は、自己の仕事の根底にあるいくつかの基本的な前提、価値観、態度には、直接には立ち向かってはいない。

「なぜ私は教師なのであろうか?」「私はどのようにして教師となったのであろうか?」「私は、教育を通して何を達成したいのか?」このような疑問に答えるために、効果的なFDプログラムは、教授団のために提供されなければならない。

もし、教授団が教育についての価値観、態度、哲学、あるいは前提について明らかにするよう援助されれば、彼らは、専門家として、あるいは1人の人間として、より満ちたりた生活を送れるようになるであろう。

13章 援助技術

カール・ロジャースは、援助的関係の本質的な特徴を、「すくなくとも、当事者の1人は、他人の成長、発達、成熟、機能の上達、他人の生活への対処の改善、を進めようとする意図を持っている。」として定義している。

本章の目的は、FDに携わっている人々の援助能力を改善し、教師、援助者、同僚としての多様な役割における教授団の援助技術を高めることのできる多くの試みを提供することである。

なお、援助的関係の様々な局面を検討する場合、信頼、明示、明快、共感、記述的なフィードバック、理解と受容、という6つの要素が重要なのである。

セクションV FDプログラムの実施

14章 FDワークショップの計画

本書は、FDにたいして訓練志向的な接近法を前提としてきた。その結果、FDワークショップを強調することになる。しかし、ワークショップが、FDプログラムの唯一で、もっとも重要な方法であると考えべきではない。多くの成功したプログラムで、ワークショップを含んでいないものもある。

とは言っても、教授団の専門職としての技術改善を望むFDコンサルタントならば、いつかは、ワークショップを計画し、実施することになるはずである。

そこで、本章では、ワークショップの計画についていくつかの提案をしたい。

A. ワークショップの4つのタイプ

FDプログラムに含めることのできる4つのタイプのワークショップが考えられる。

その4タイプとは、(1)長期滞在のワークショップ(5日～2週間)、(2)短期滞在のワークショップ(2～4日)、(3)長期間のキャンパス内でのワークショップ(3～12時間)、そして(4)短時間のキャンパス内でのワークショップ(1～2時間)、である。

B. ワークショップ設計の基本原則

FDワークショップの実施を計画している人ならだれでも考慮しなければならない5つの点を掲げておこう。

それは、(1)タイミング、(2)内容、(3)緊張感、(4)スタッフと参加者の関係、(5)スタッフとスタッフの関係、である。

15章 FDプログラムの計画

“FD”とは、様々な前提、活動、目標から構成された言葉である。FDプログラムの主要な目標として、学生の学習を促進するということがあげられるが、それには多くの接近法がある。

A. FDの構成要素

そこで、それらの多くの接近法を検討してゆく場合、FDを構成している様々な要素を発見し、関係づけることが有益であろう。

構成要素のリストを示せば、(1)教授能力開発は、評価、診断、伝統的方法の訓練、新しい方法と技術の訓練、カリキュラム開発、の5点から構成されており、(2)組織開発は、チーム教育、意志決定、葛藤の管理、問題解決、管理能力の開発、の5点から構成されており、(3)人格開発は、教育についての討論、職業管理と人生管理、人間関係技術の訓練、人格の発達、治療的助言と援助的助言、の5点から構成されている。

以上、示された構成要素の順序が重要なのである。

B. FDの戦略

上記のFDの構成要素の順序を決定する場合、しばしば機関のおかれた環境とか目標を評価したり、発展の論理的な連続性に基づいてなされてこなかった。

それらの決定は、構成員や機関がどのように変化してゆくのかについての未検討な前提に基づいていた。それらの前提は、ある“パラダイム”を形成してしまっており、そのパラダイムが、検討されず、明白にされていない故に、教授団や個々の各機関は、いかなるパラダイムを抱いているのかとか、別に もっと価値のあるパラダイムがあるのではないかということを認識していない。

そこで、FDプログラムについての新たなパラダイムを認識してもらうために、11の戦略を提示している。

3. 終わりに

本書には格別の思い出がある。1988年の3月、喜多村和之教授（広島大学 大学教育研究センター）にご一緒させていただき、米国における“アクレディテーション”の実態調査を行った。その途中で、ワシントンに立ち寄った際、出版元である the Council for the Advancement of Small Colleges で、本書に出会った。

Joseph Axelrod は、*The University Teacher as Artist* の中で、大学教師の状況をクレタ島のミノス王の迷宮の罠にかかったダイダロスとかれの息子イカロスの状況になぞらえて、今日の教授団がアカデミックの迷宮 (academic labyrinth) の方法に従っている限りは、効果的に教育するために必要な自由な時間を確保できず、もし自由時間を確保できたならば教育の芸術や技術 (the art and craft of teaching) に注意を向けなければならない、と述べている。

そのために、FDが重要な役割を果たす。

最近になって、日本でも、高等教育機関における教育活動に対して関心が持たれてきたが、米国と同様に、高等教育機関における教育活動に関する研究が活潑に行われ、蓄積がなされているとはお世辞にもいえない。

本書は、いかにして大学の教師が教室における芸術家や技術者になれるかに関して、理論的、実践的に多くの提案がなされており、今後、日本においてFD活動をすすめてゆく参考になるものと考えられたいである。

Jerry G. Gaff 著

『教授団の活性化をめざして——TOWARD FACULTY RENEWAL』

(Jossey-Bass Publishers, 1975年, 244頁)

伊藤彰浩*

1 はじめに

本書は、主として1970年代前半期に、アメリカの高等教育機関で実践された様々の教育改善プログラムをレビューし、それらの向上の方途をさぐる書物である。著者自身の言葉を借りれば、本書は「教育改善活動の現段階を示すものであり、大学におけるティーチングや学習にかかわる諸プログラムを比較対照し、鍵となる問題を明らかにし、これまでの試みのいくつかの重要な成果に光をあてようとするものである」。その際に、考察の焦点となっているのは、タイトルにも表れているように「教授団の活性化」であり、本書は広義のファカルティ・デベロップメント全般にかかわる内容を持ったものであるといえる。

著者のガフは、現在 Hamline University の副学長の職にある。彼は1965年に Syracuse University で社会心理学の Ph.D を取得し、その後、Hobart College, University of the Pacific, the University of California, Berkeley, California State College, Sonoma, さらに The Association of American Colleges など教育・研究にたずさわってきた。ガフは、すでに1960年代から実験的な大学改革活動に関わり、その成果を The Cluster College (San Francisco: Jossey-Bass, 1970)にまとめ、さらに1970年代には、本書に見られるようなファカルティ・デベロップメントに関する研究をおこなっている。また、最近是一般教育の問題に関心を持ち、1983年には General Education Today (San Francisco: Jossey-Bass)を執筆している。それ以外にもガフは、ティーチングや学習、ファカルティ・デベロップメント、カリキュラム、教員評価、大学組織改革など大学教育全般にわたって数多くの論考を持っている。

2 本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

第一部 ティーチング・学習改善のための諸プログラム

1. ティーチング・学習改善のための新しい概念
2. 教員開発
3. 教育開発
4. 組織開発
5. 新しい諸プログラムの概観

第二部 プログラムの実施

* 大学教育研究センター助手

6. ティーチング・学習改善のための組織
7. 改善センターの政治学
8. 現職教育プログラムへの財政的対応
9. スタッフに関するプログラム
10. プログラムの影響
11. 将来の展望

上記の構成から明らかなように、本書は大きく2部から構成されている。前半部（1～5章）では、主として教育改善のための3つのアプローチ（教員開発、教育開発、組織開発）の性格が明らかにされ、後半部（6～11章）では、それらのアプローチの実施にともなう問題が組織・財政・人事等の側面から考察されている。著者によれば、前半部はひろく教育の改善に関心を持つ読者すべてを対象とした内容を持ち、後半部は実際にプログラムを担当する実務者に役立つ内容を持っている。なお、本書の巻末には1975年時点で教育改善活動をおこなっている高等教育機関、およびそれらの活動を担当する教育改善センターのリストが掲載されている。

3 本書の内容

次に本書の各章ごとにその内容を要約し紹介していきたい。

第一章 ティーチング・学習改善のための新しい概念

学生数の減少、その質の変化（低学力、マイノリティ、成人学生の増加）、新しい教育方法の登場、教育内容の学際化などに伴って、多くの大学教員たちが、従来の教育方法を改めることを迫られている。さらに、1960年代の高等教育拡大に伴い、その数が急増した教員をいかに活性化するかが、大学にとっても大きな課題になっている。

大学教育についての伝統的な考え方とは、例えば、「教師は生来の才能によるのであって、つくられるものではない」とか、「教育は術（art）であって、科学ではない」といったものであり、この考え方はアカデミック・フリーダムの伝統によって助長され、その結果として「教室は教授たちの城」になってきた。しかし、先述のような背景のなかで、伝統的な考え方は再検討を求められている。すなわち、ティーチングが大学教員にとっての基本的活動であると認識され、各教員の教育能力は改善可能であり、大学の管理者、教授団、職員、学生の連携のもとで教育の改善に最大限の努力がなされるべきだ、と主張されるようになってきている。

こうした認識の変化のもとで、多くの大学で、教員開発、教育改善の新しいプログラムが導入され、それを実施に移すための新しい組織が作られている。そうしたプログラムには、大きく分けて3つのタイプが存在している。すなわち、教員開発 Faculty Development, 教育開発 Instructional Development, 組織開発 Organizational Development がそれである。

第2章 教員開発

教員開発 Faculty Development とは、教授団の各メンバーに焦点が合わされ、彼らの個人的開発をめざしたものであり、「特に教育を行う者としての役割に関して、教授団メンバーの才能を高め、関心を広げ、能力を改善し、その専門的、個人的な成長を助けていくこと」である。具体的には、ティーチングや学習に対する彼らの態度を改善し、彼らの教育問題についての知識を豊富にし、教育技術を向上させ、感受性を高め、学生や同僚との関係を改善し、他の専門的な仕事との関係でティーチングの役割

を考えさせることである。その学問的基礎となるのは、臨床・発達・社会心理学，精神分析学，職業社会学などである。

教員開発プログラムは、セミナーやワークショップなどの形式で実施されることが多いが、その内容は、高等教育機関の多様性，教員のキャリアや年齢に応じた関心の違い，利用できる資源の違い，スタッフの持つ知識の違いなどによって，多様である。例をあげてみれば，次のようなプログラムがおこなわれている。

- ・他の学問領域や大学外の社会についての知識の幅を広げること。
- ・高等教育全般に関する知識，特にティーチング・学習に関する知識を与えること。
- ・ティーチング技術の開発。
- ・教員のパーソナリティの開発。
- ・各教員のティーチングに関するフィードバックを与えること。
- ・学生側の学習の改善を強調すること。

第3章 教育開発

教育開発 Instructional Development とは、授業科目やカリキュラムに焦点が合わされ、学生の学習を促進するための条件や教育内容の改善をめざすものであり、「学生の学習経験の最も効果的で適切な開発をはかることを目的とした、学習理論や教育工学の体系的で継続的な適用」と定義される。すなわち、学生の学習目的を特定化し、その目的達成のために学習内容・方法をデザインし、学生の学習成果の評価を手助けすることである。教育学，教育工学，学習理論，システム理論などが学問的基盤となっている。

教育開発に関するプログラムは、その強調点の違いによって以下のように分類できる。

- ・教材の準備。
- ・授業科目のデザイン。
- ・カリキュラム全体のデザイン。
- ・教師自身の活性化。

第4章 組織開発

組織開発 Organizational Development は、高等教育組織の全体ないしは一部に焦点が合わされ、ティーチングや学習のための効果的な環境をつくることをめざしたものである。すなわち、「組織開発とは、『触媒』役のコンサルタントや、応用行動科学の理論・技術の助けをかりて、組織文化をより効果的で協同的なものにしていくことにより、組織の問題解決能力や活性化プロセスを改善しようとする」と定義される。その学問的ベースとなっているのは、組織にかかわる社会学，経営学，社会心理学などである。具体的な活動としては、対人関係の改善，管理職を対象とした意思決定やリーダーシップの訓練のためのワークショップ，チーム・トレーニングなどが行われている。

ただし、組織開発は、他の分野と比較して、高等教育ではあまり行われていない。なぜなら企業組織とは組織の性格が異なるからである（組織目標が不明確，組織構造が水平的で非集権的，構成員の自律性が高いこと等）。したがって、高等教育での組織開発の実施にあたっては、その特性に応じた多少の修正が必要になってくる。

第5章 新しい諸プログラムの概観

現実のプログラムにおいては、以上の3つのアプローチはしばしば共存している。しかし、これらの

アプローチは、それぞれに異なった焦点、目標、概念的フレームワーク、用語を持ち、しかも、それぞれが異なった専門的背景を持つことに基づく相互の根深い障壁も存在する。けれども、年齢、キャリア、見解、個性において多様な教員のニーズに応えるためには、いくつかのアプローチを併せ持った包括的なプログラムが必要である。プログラムを実施する者は、広い視野と、異なったアプローチに対する寛大さを持たねばならない。

第6章 ティーチングと学習の改善のための組織化

教員開発、教育開発、組織開発などを効果的におこなうための組織的な態勢づくりも重要である。まず、大学の中核的な管理者たち、すなわち副学長、事務長、学部長などは、教育改善プログラムのリーダーシップをふるうことを求められている。また、教授団グループも、大学の内外でティーチングや教員開発に関する委員会を組織し、そこで教育改善プログラムを計画し実行することができる。さらに、教育改善プログラムに対する責任を負った専門的な教職員ポストを設けることもできる（たとえば、University professor 制度、教育開発担当係 Educational Development Officer、学内外のコンサルタント、教員の個人的ボランティア）。加えて、ティーチングや学習の改善を推進する責任を持った組織として教育改善センターを設けることも行われている。

第7章 改善センターの政治学

多くの場合教授団は教育改善センターが実施するプログラムに懐疑的、批判的、警戒的である。プログラムへの支持と参加を得るためには、その内容や実施方法にさまざまな工夫をする必要があるし、学内の権力構造に配慮した戦略が必要な場合もある。しかし、最大の問題は、教授団の無関心をいかに克服するかであり、そのためには、教授団のニーズについての分析を行い、それに基づいてプログラムを立案せねばならない。

教育改善センターの設立・運営には、教員の支持だけでなく、大学当局の支持が不可欠である。すなわち、当局をセンターへコミットさせ、効果的なティーチングや教育開発を促進する方針をとらせ、適当な財政的援助をさせねばならない。その最良の手段は、センターが教授団の広範で強い支持を維持し続けることである。なぜなら、大学の管理者は教授団の関心に敏感だからである。

第8章 現職教育プログラムへの財政的対応

教育改善の費用には、スタッフやプログラムの実施のための費用と、教授団の参加を促進するための費用（授業の免除、研究休暇等の措置に必要な費用）がある。こうした費用は、しばしば私立財団や政府機関の援助をうけて、それぞれの高等教育機関が負担するのが一般的である。しかし、費用の不足や、利用の有効性についての問題も少なくない。したがって、多様な財源から資金を調達すること、プログラムが所期の目標を達成しているかどうかのチェックを行うこと、などに留意しなければならない。

第9章 スタッフに関するプログラム

教育改善の鍵となるのはスタッフである。多くの大学で専門的な教育改善スタッフが置かれている。彼らの専門領域は教育学と教育心理学が多い。スタッフの活動は、ティーチングにかかわる教員の相談にのり、かつ、効果的なティーチングと学習の推進のためのリーダーの役割を果たすことである。しかし、彼らの仕事はキャリアとして確立しておらず、仕事の範囲もあいまいであり、しかも彼らの立場は教員と職員の間でマージナルなところにある。そうした不安定さが彼らの不安を増長させている。

今後は、より幅広い専門的背景や知識をもった専門スタッフが必要であるし、ティーチングや学習の

問題に関して、同僚へのコンサルタントの役目が果たせる教授団メンバーがもっと養成されるべきである。

第10章 プログラムの影響

教育改善プログラムは評価されねばならないが、現在のところ十分な評価はなされていない状態にある。評価をおこなう際に大切なことは、教育改善プログラムが実現可能な事柄と不可能な事柄とをはっきりさせておくことである。たとえば、教育改善プログラムは決して「ダメ」教師の矯正プログラムではないし、経営危機の大学を救うためのものでもない。

概して、教育改善プログラムは、参加者が、教育改善に熱心な人々にかたより、対象として想定されている人々の一部にしかサービスが利用されない傾向がある。しかし、プログラムの参加者の多くは期待どおりの結果を得て満足している。また、小さな単位の組織におけるプログラムの方が効果が大きいという傾向もある。

第11章 将来の展望

1970年頃から始まった大学教育の改善運動は、既に初期の段階を終わり、現在（1975年）のところ過渡期にある。それらのプログラムが存続すべきであるとすれば、以下の諸点の改善が必要である。

- ・教育改善プログラムはすべての高等教育機関に設けるようにすること。
- ・プログラムへの参加者を増やし、ボランティアな活動としてではなく、日常の職務の一環として継続的にプログラムへ参加させるようにしていくこと。
- ・プログラムへの資金援助を増額し、継続的な助成をおこなうこと。
- ・個人レベルや部局レベルばかりでなく、機関レベルでプログラム推進の方針を打ち出すこと。
- ・時限的ではなく、恒常的な教育改善センターを設けること。
- ・教育訓練によりプログラムのスタッフの質を高めるとともに、スタッフは多様な専門領域の出身者にすること。
- ・プログラムの成果は公表され、評価されること。

究極的には、教育改善活動は学生の学習経験にインパクトを与えるものでなければならない。すなわち教育改善プログラムは、学生たちを学習へ動機づけ、それに関心をもたせ、より高度な知的技能を学ばせるという目標を達成するための、教授団の開発をおこなうための事業にならねばならない。

4 終わりに

ここまで本書の内容の要約してきたが、最後に紹介者の感想を簡単に述べておきたい。

本書の魅力のひとつは、大学教育改善に関する様々な実践例が豊富に紹介されていることである。紙数の関係で、内容要約では個別の事例に触れることができなかったが、本書では多様なプログラムの実際やそれらプログラムの実施にあたっての問題点が実に生き生きと描かれている。本書の冒頭で著者は、「プログラムを実施する人々―すなわち教授団のリーダー、管理者、理事といった人々―に、ガイダンスを与え、既存のプログラムを改善するためのガイドラインを与えるのが、本書の目的である」と述べているが、大学教育改善に関わっている日本の読者にとっても、本書の内容はきわめて有益であろう。

第二に、本書で示されている教員開発・教育開発・組織開発という教育改善プログラムの分類カテゴリーは、FD活動の理解にとっても有用な概念的手がかりとなるものであろう。3つのうちのひとつに教員開発があげられているが、それはむしろ狭義のFDの捉え方というべきものであり、広義には他の2つも加えた3つの全体がFD活動の内容に相当するといえよう。そして、これらの3つのカテゴリー

の内容が説明されている本書の前半部は、アメリカにおいてのFDの捉え方を知るための、手ごろなテキストとして利用することができるだろう。

いずれにしても、ようやく近年になって大学の教育機能への関心が高まっているわが国にとって、アメリカにおける比較的初期の教育改善プログラムの実態を明らかにしている本書から学ぶべきものは多い。もちろん、大学教育に対する考え方の伝統が根本的に異なる日本とアメリカを安易に比較することはつつまなければならぬし、実践例の移入に性急であってはならない。しかし、本書の introduction にみられる次のような一節は、われわれにもきわめて切実に響いてくる。

「ファカルティ・デベロップメントや教育改善への関心の高まりは単なる一時的な流行ではない。それらは、ティーチングの軽視という、大学の中で長きにわたってみられた傾向を改めようとする試みであり、学生に対して効果的なティーチングを与えるという、教授団にとって最も重要な専門的活動をおこなうために、教授団の開発をいかにすすめていくか、という根本的かつ積年の課題を解決するための試みなのである」

Paul L. Dressel 著
『大学教育評価のハンドブック
—Handbook of Academic Evaluation』
(Jossey-Bass Publisers, 1976年, 518頁)

関 正 夫*

1 著者のプロフィール

本書は、副題として示されているように「高等教育の意思形成における大学の効果、学生の発達および教授団の成果を評価すること」を目的として執筆された書物である。本書内容の解説をするに先立ち、著者 P.L.Dressel の紹介をしておこう。

彼は1910年生まれのアメリカ人で、1939年ミシガン大学から数学・統計学分野の研究で PhD を取得している。彼は1934年以来、ミシガン州立大学で教鞭をとってきた。彼の専攻はもともと数学と統計学であったが、1940年代中頃から高等教育制度の研究者および行政者として活躍することになったという。この頃から50年代末まで、氏の関心は大学教育における評価の問題にあったとされている。本書執筆の時期、彼はミシガン州立大学の大学研究 (university research) の教授であり、同時に大学自己研究 (institutional research) 担当の副学長の要職にあった。P.L.Dressel の関心は、本書で扱った「大学評価」のほか、大学自己調査 (institutional self-study) やカリキュラム研究などと幅が広く、これらの分野の著書も数十冊にもおよぶ。彼は1981年に退官し、現在、同大学の名誉教授である。氏には、1982年秋、広島大学・大学教育研究センター主催の公開講演会 (第11回研究員集会の一環) で「アメリカにおける大学教育改革」と題して講演していただいたという因縁がある。

2 本書の特徴および構成

P.L.Dressel は本書において、評価に関する全側面について総合的な考察を行っている。しかし彼はカレッジ・大学の教育機関の性格を最重視した観点から本書を執筆しているといつてよい。原題名 “Handbook of Academic Evaluation” を「大学教育評価に関するハンドブック」と訳したのは、著者の意図を反映したかったからである。また、本書は、大学の評価に関与する教授団メンバー、管理職者、大学行政関係者、理事会メンバー等を対象として以下に紹介する観点から、執筆したものである。

著者は、後述の本書構成からも推察されるように、高等教育の重要な全側面を評価する目的や必要性に関して論じている。入学から卒業までの全教育プロセスや学生の学習に影響を与える学園の環境等に関して、また教授団の教育機能および非教育的機能に関して、さらには大学行政職・管理機関・州政府等の役割や効果に関して論及している。

以上に加えて、彼は大学の自己調査 (institutional self-study) に関する分析を行い、重要な評価形式はいかにして組織化されるのか。またその結果はどのように応用されるのかについても論究している。高等教育研究の先進国といわれるアメリカにおいてさえも、本書のように評価に関する総合的考察を試

* 大学教育研究センター教授

みた書物は他にはないといわれている。まさに本書は、Dressel の学識の深さを反映したものである。「大学教育の評価のあり方」を検討するに際して本書は、アメリカのみならずわが国の大学関係者にも多くの示唆を与えるものだといってよい。

本書は、以下に示すように、Ⅰ基礎的考察、Ⅱ学生の経験等の評価、およびⅢ大学のプログラム等の評価の三部から構成されている。

序文

第Ⅰ部 基礎的考察

- 1 評価へのアプローチ
- 2 意思決定および改革の基礎としての評価
- 3 目標の設定
- 4 価値的結果の評価 (Assessing Affective Outcomes)
- 5 社会的責務および社会的目的の達成
- 6 技術的側面 (Some Technical Aspects)

第Ⅱ部 学生の経験および教育的進歩に関する評価

- 7 学生募集 (Recruitment), 入学者選抜 (Selection), 専攻決定 (Classification), 進捗決定 (Placement)
- 8 学習環境
- 9 教育過程 (Educational Processes)
- 10 試験および授業科目 (コース) の評価
- 11 総合的試験
- 12 成績評価 (Grades), 単位認定 (Credits)と代替方式 (Alternatives)

第Ⅲ部 プログラムおよび人的要素に関する評価

- 13 カリキュラム
- 14 大学院教育
- 15 教授団 (Faculty)
- 16 管理運営 (Administration)
- 17 大学自己調査 (Institutional self-study)
- 18 州政府の調整と計画 (State Coordination and Planning)

エピローグ：費用、意思決定・政策

3 本書内容の概要

序文

ここには、高等教育における評価の性格や役割について、著者の長年の研究と経験に基づく確信が7項目にわたって論じられている。ここではその第1の項目を紹介しておく。評価は不可避であり、常に行われている。教授団・管理機関の意思決定は、対象事項に関する評価や価値判断を含んでいるのであるが、必ずしも評価が明確な形でしかも一貫性をもった方法で実施されているとはいえない。したがって、今後、評価は体系的になされ、価値判断が明示的になされるようにすることが重要である。評価の論点は、評価がなされているかどうかということではなく、評価の時期・主体・理由等を明らかにすることにある。

第I部 基礎的考察

(1) 評価へのアプローチ

評価というのは教育プログラム・実施方法・教授団・管理職者等あるいは評価すべきプロセスなどの価値や影響を判断することであると、著者はのべている。本章において従来の評価者たちの仕事を分析し、著者は高等教育における意思決定の基盤として評価の重要性を強調するとともに評価の方法に関して言及している。

最後に効果的な総合的な評価を定義するうえで、重要な要素や概念を11項目に整理しているが、ここではその一部を示しておこう。

- プログラムの意図・目的・目標を明確化すること。
- 判定のための基準を決めること。
- うまくいっているか否かの程度を決め、説明すること。
- プログラムの影響や外部的・非統制の変数を決定すること。
- 価値・利益または社会的有用性（プログラム・目標等の）を評価すること、等々。

評価というのは、意思決定における合理的判断に役立つような、以上の要素・概念に基づく適切な情報が、体系的・公式的手段で収集され、説明されることであると著者は論じている。

(2) 意思決定・改革の基礎としての評価

評価の役割は①意思決定のための基礎的情報、②改革のための基礎的情報に大別できる。体系的評価は、単純化していえば、教育プログラムに固有な仮説・価値が予期された実施方法や期待された達成度とどのように関連しているのか。これらの計画が現実の機能や結果と比べてどのような差異があるのか、ないのかについて明らかにして、意思決定に役立てることである。

決定 (decision) は、①意図した目的、②意図した手段、③現実的な目的、④現実的な手段の4つの側面に即してなされねばならない。その際、(イ) 現状の確認、(ロ) 目標等の再検討、再定義の可能性、(ハ) 用いた手段・実施方法の評価、(ニ) 成果・機能等パターンの再検討、(ホ) 基準・規則等の評価と明確化、(ヘ) 資源 (予算・スタッフ) の配分の変更、(ト) 諸活動の優先順位等の再検討などが行われることが必要になる。

また著者は、評価を①インプット評価、②環境評価、③プロセス評価、④アウトプット評価に分類し、評価を行うことによって生じる変化の可能性を論じている。本章の最後に、評価プロセスを計画するため重要な要素を、(イ) 評価の目的・背景は何か、(ロ) どのような情報を収集すべきか、(ハ) データを組織化し、分析するためにどのような実施方法が講じられているか、(ニ) 報告する手続きは明白であるか、(ホ) この評価自体はどのようにして評価されるのか、以上5つのカテゴリーに分類して整理している。

(3) 目標の設定

本章は、①高等教育の目的 (goals)、②学習過程の目的、③目標 (objectives) のタイプ、④目標分類論 (taxonomic) への批判、⑤行動的目標、⑥教育目標の記述、⑦まとめ、の構成である。目標を同定し、その内容を詳細に決めることは、評価に関する初期的課題と考えられてきた。したがって目標を明確化することは必要であるにもかかわらず、現実には大きな困難があるという。それらの困難は、①用語が混乱していること、②教育の性格・役割に関する哲学上の根本的差異があること、③普遍的・グローバルな関心を現実の目標に移すことが困難であること、④表明されている目標の有用性に対する疑問が存在していることだと著者は論じている。また教育目標の記述に関して、「目標というのは、学習者が

将来どのように行動するのかを表明し、また成果のなかに含まれる知識・技能・態度を示すものである」ことが十分に明確化されるべきポイントであるとのべている。高等教育機関が表明している目標というのは、一般に当該機関の教育を評価する指針としてはきわめて不十分である。しかし今後は高等教育機関の教育プロセスをはじめ諸活動等を評価しうる目標の設定が求められているというのが、著者の本章における主張である。

(4) 価値的結果 (Affective Outcomes) の評価

本章は、①価値の種類、②価値改革のための戦略、③用語論 (terminology)、④価値の評価、と4節において論じている。端的にいえば、本章は、感情的な目標 (態度・信念・価値に関する) を公式の教育プログラムにおいて合理的に定義することが可能であるのか、可能にするためにはどのような問題を検討すればよいのか、といった観点から論じているといつてよい。

(5) 社会的責務 (Accountability) と社会的目的の達成

本章は、①高等教育の社会的利益、②社会的責務に関する困難、③効果的な運営、④システム的な概念、⑤プロダクティビティー・モデル、⑥代替モデル、⑦政策形成・計画化・意思決定、⑧まとめ、の8節構成である。

著者は、本章において、次のように現状を批判的に論じている。大学は教育・研究・サービスに関する広汎な活動をキャンパス内外において実施している。これらの大学の事業は教授団にとっては常識に属することだが、それらの事業の目的・教育目標・社会的責任はほとんど正当化されていない。そのため、大学内の政策は、諸活動の方向を示し、その実施方法に影響を及ぼしているが、諸活動の成果や社会の期待にはほとんど関与していない。また、リーダーシップ (指導性) は理事会、管理職・教授団メンバーに分担されているが、それは期待されるほどには、目標やそれに関連した意思決定や政策形成の際には、発揮されていない。さらに諸活動の結果を評価するプロセスは、大学が社会的責任を正しく果たすうえでのフィードバック機能である。しかし教授団は、結果の同定・評価に関心がなく、大学の本部事務局のプログラム評価の試み等には非難を行うだけである。このように、適当な中心的なリーダーシップ・管理運営が欠如していることが大学に対する外部からの批判・干渉を招きやすくし、その結果、大学計画・調整機能を州政府に委ねざるを得ない事態を迎えることになると、著者は論じている。

(6) 技術的側面

本章では①データ源とデータ収集方式、②改革の尺度、③関係又は比較、④学生の特質、⑤正当性・信頼性・正確性、⑥サンプリング、⑦費用、⑧評価の設計、⑨デルファイ法、といった、大学評価に関する技術的側面について論じられている。従来、評価の技術的側面は比較的軽く扱われてきたが、大学評価に関与する人々は本章の論議を、例えば、本章末尾に示されている参考文献を通して、さらに深め、発展させることが必要であると著者は強調している。

第II部 学生の経験および教育的進歩に関する評価

(7) 学生募集・入学者選抜・専攻決定・進捗決定

本章では、表題にみられるように①学生募集 (recruitment)、②入学者選抜 (selection)、③専攻決定 (classification)、④進捗決定 (placement)、⑤オリエンテーションとカウンセリングなど、学生を教育過程や大学生活に円滑に適応させることに関連した大学の諸活動の評価の問題を扱っている。わが国においては、大学が大衆化し、適性・能力など多様な学生を迎えている今日においても学生募集と入

学者選抜のそれぞれの機能の差異を配慮した上でそれぞれを重視するという発想に乏しい。また入学者選抜が学部・学科別募集であり、同一学科の入学者は基本的に同一カリキュラムである。アメリカではそれらがそれぞれ独自の教育的意義をもつものとして考えられ、それぞれ評価の対象とされていることに注意しておく必要がある。以上の各活動の現状の問題と評価において配慮すべき諸点が本章では詳細に論じられている。

(8) 学習環境

本章は、①環境評価 (assessment)の実施方法、②環境測定の有用性の2節に分けて論じてある。環境評価の実施方法に関しては既存の方法を6つのカテゴリーに分けて論じるとともに、評価のための道具に関するレビューを行っている。従来の環境測定に関しては、それを支える考え方が理論的・普遍的でありすぎて、実践的活動に助言しうるようなものではなかったと批判している。また環境評価は複雑な仕事であり、現状における環境評価の方法は、それによって得られた結果で現実を説明しうるだけの正当性を有していない。したがって、現在のところ、環境評価の問題に洞察を求めるための最善の方法は、これまでに用いられた種々の実施方法を批判的に検討することであると著者は結論している。

(9) 教育過程

学習者にとって学習を促進する教育過程は、1つのキャンパスに限定されるものではない。多様な地域社会の施設、現地調査、労働・学習プログラム、海外研修旅行等々も含まれる必要があるといった広い視野から本章は論じられている。しかし現状を反映して、また、キャンパス内の教育過程の重要性も作用して、本章では主要には狭義の教育過程の評価の問題を論じている。本章の構成は①学習スタイルの多様性、②教育過程の他の要因、③教育過程の構成要素、④教育過程の個別化 (individualization)、⑤教育過程における相互作用、⑥教育過程の評価、の6節から成っている。

著者は、教育過程を分析・評価・改善する多くの試みによって、教育過程は非常に複雑であるという真理は、人々に受け入れられなくなっていると論じている。このことは教育過程をかなり狭義に解していることを反映したものであるとはいえ、アメリカの大学における教育過程に関する研究関心、改善意欲・努力の大きさを推測させるものである。教育過程の評価の基礎を与えるものとして、種々の教育経験が教育過程の構成要素に影響を与える際の原理・一般則を10項目に整理している。

(10) 試験と授業科目の評価

本章は、①試験の目的、②試験のタイプ、③試験の一般的問題、④試験問題 (question)の構成要素、⑤解答のための基準、⑥多岐選択法の構造、⑦まとめ、と8節構成である。著者は、授業科目や教育指導の評価に関する証拠 (evidence)を3つのタイプに分類している。第1のタイプは試験そのものである。試験は授業において、何が重要であるかの当該教師の考え方や授業内容・目標およびその範囲を反映するだけでなく、彼の知的感受性や学問観を反映している。第2のタイプは、試験において学生の示した成果である。その教師の学生に対する期待が試験の水準や成績評価の厳しさに反映する。第3のタイプは、試験結果の扱い方に関するものである。学生の示した成果がフィードバックされ学生の努力を支援したり、また教師にフィードバックされ教師の努力を力づけたり、調整したりするなどの取り扱いの方法が重要だと指摘している。

(11) 総合的試験 (Comprehensive Examination)

本章は、①総合的試験の目的、②タイプ、③商業的に行われている試験、④実施方法と試験問題のタ

イプ、⑤試験結果の有用性、⑥試験による単位認定、⑦問題点と利点、⑧成功事例の特徴、と8節構成である。

アメリカとヨーロッパの大学システムを比較すると両者の試験に対する態度に重要な差がみられる。ヨーロッパでは、教育と切り離して、試験をシステムの一つの主要な機能と考えている。例えば、大学入学資格試験（バカロレア、アビトゥア）、学術試験（ドクター学位等）、教授資格試験等々が存在している。これに対してアメリカの教育者たちは、あらゆる種類の試験をヨーロッパのように重視することに対しては抵抗する傾向がある。そのため、アメリカのカレッジで種々の形式で実施されていた総合的試験（上記のヨーロッパの試験も一種の総合的試験）は衰退しつつある、と著者は論じている。しかし、現状において教育プログラムに不可欠な統合性が欠如していたり、教育目標に対する関心が欠如しているため、そのことが反って、教育プロセス全体にわたる総合的な要件の必要性やその役割の評価を必要とする理由になっている、と著者は調査結果に基づき論じている。

(12) 成績評価・単位認定と代替方式

本章は①評価に関する対照的な見方、②単位時間、③成績評価の目的、④成績評価の性質、⑤成績評価の実体、⑥成績評価の弱点、⑦成績評価における不平等、⑧実施方法・方針の改善、⑨成績平均点（Grade Point Average）、⑩教師への助言と、成績評価問題を中心に論及している。

本章の最後に、成績評価に関する現実的な2つの困難が示してある。第1は、教育の期待された結果は、完全な調和といえるものでなく、ある部分の評定を集積した成績評価であり、そのため多くの点で不十分である。第2は、伝統的に教授団メンバーは教育に関する準備ができていない。したがって、彼等は自己の狭い経験を通して成績評価を行っているに過ぎない。究極的には、カレッジ教員を養成している大学院において評価に関する訓練が責任をもってなされるべきだ、と著者は強調している。

第三部 プログラムおよび人的要素に関する評価

(13) カリキュラム

高等教育におけるカリキュラムの意味は初等・中等教育と異なり、系統性や統一性の観点が希薄であり、明示的でない。しかし、現実には学生の多様性に応じた画一的でないカリキュラムが計画され、実施されているように思われる。著者はこのような現状認識から、本章では、①教育の目的（goals）、②カリキュラムの構造、③履修要件の指定、④学際的授業科目（multidisciplinary courses）、⑤カリキュラムの評価と5節構成で、カリキュラム評価論を展開している。

カリキュラムの評価に関して、第1の方法は古典的な評価方法というべきものであり、歴史的考察および哲学的前提に基づく評価である。第2の方法は、論理的な根拠—仮説と原理—に基づいてなされるものであり、主として専門教育や職業的教育の評価に適用される。もう一つの方法は、カリキュラムの質—開設科目・内容・教育技術・方法等を含む—がどの程度現代的なものであるか、どうかを評価しようとするものである、と論じている。

カリキュラム評価の中で究極的な課題であり、最も困難な課題は、学生がどの程度社会の問題を自覚するようになり、その問題解決に関与する価値を学生がどの程度、内部化しえたのかということである、と著者は指摘している。

今日のアンダーグラデュエイトのカリキュラムにおいては、統一性や系統性が保持されるべきであろう。しかし全体的に明確な目標の欠如・専門職業教育の側からの系統性や指定科目制等の動向は、総合的カリキュラムの展開や評価を妨害する傾向がある、と教授団の対応のあり方に著者は批判の眼を向けている。

(14) 大学院教育

アンダーグラデュエイト教育は複数学科 (departments) の教授団が提供する授業科目群によって構成されている。これに対して大学院教育は多くの場合 1 つの学科教授団の提供する授業科目の、しかもその一部の科目に特定化したものである。そのため大学院教育は、学科教授団別に実施される。しかも権威ある教授たちは、自律性を保持し、学科・大学への考慮を十分拂うことなく、私的な教育プログラムを実施することが可能である。したがって学部段階教育に比べて大学院教育を評価することは一層困難であると著者は論じる。以上の問題意識に立脚して、本章では①プログラムの性質、②学生の進歩に関する評価、③教育のための準備、④大学院教育プログラムの評価の 4 テーマに関して論及している。

日本の大学においても今後配慮すべき点は、③教育のための準備に関することである。著者は本節で、学者間に拡まっている見方、つまり専門分野の能力と研究上の経験が、カレッジ教育のために最も重要な資格である。その上、学部上級生や大学院学生の論文・実験指導が教育上最も重要と考え、大学院修了者が教育界よりも企業・官庁に就職することを承認する教授団が多いことを批判的に指摘している。今後は、大学院学生に対して教育の経験を重視させることが、将来の学部段階教育の改善に結びつくだけでなく、学問それ自体への洞察を深めるという観点からも重視される必要があると強調している。この著者の主張はわれわれ日本の大学関係者にとっても示唆的である。

(15) 教授団 (Faculty)

大学の成果に関する評価を行うときには、当該大学の目的・機能との関連において、教授団の成果を評価することが必要である。ところが、教授団メンバーの中には、教授団こそ大学そのものであるという見方をするものが多い。こういう教授団中心の「誤った見方」は社会的責任の重要性を見落とすにとどまらず、教授団の評価システムの発展の重大な阻害要因となっている。著者は以上のような現状認識に基づいて、本章では、①評価の容認、②教育評価 (evaluation of instruction) の目的、③教育評価へのアプローチ、④学習促進上の教員の責任、⑤学生による評価、⑥同僚評価 (peer rating) と自己評価、⑦理事会の立場からの教育評価、⑧教育に関する研究、⑨教育における非教授的側面に関する評価、⑩非教育的活動 (研究やサービス活動) の評価、⑪専門職としての大学教授、⑫費用と利益、と 12 節構成で教授団の諸側面での成果 (パフォーマンス) およびその評価の観点・方法を論及している。著者は、教授団の研究・教育・サービスの各側面における成果に関する評価の現状を次のように総括している。研究上の成果に関する評価の重要性は広く受け入れられているが、多くは研究の質よりも量 (論文数) に力点がおかれるなど評価の視野が限定的である。教育面の評価は、特に強調されているが、多くは学生による評価等を通して行われるものであり、実際に教育改善に効果をもっているといえる証拠は乏しい。学内外のサービス活動に関する本格的な評価はほとんどなされていない。価値観の多様性、学習者の要求の多様性等により、良い教育に関するコンセンサスを求めることは本来困難であるため、今後においても教育に関する完全な評価システムというのは考えにくい。しかし評価的活動は改善のための基礎としては有効である、と著者は力説している。

(16) アドミニストレーション

本章では、①アドミニストレーション評価の問題点、②組織形態、③アドミニストレーションの成果の基準、④評価へのアプローチ、⑤理事会等の評価の 5 テーマに関して論じられている。アドミニストレーションの問題点の第 1 はアドミニストレーションとは何かの定義が明確になされていないことである。第 2 の問題点はアドミニストレーションの形態等が州により、大学により異なり、複雑であることだと著者は指摘する。しかし、アドミニストレーションの効果的な評価を行うことなしには、大学の自

律性が弱体化しつつある今日的動向に歯止めをかけることはできない。したがって効果的評価の確立を志向して、運営およびそれに関与する人的側面との関連において評価対象・内容を明確に定義することから出発すべきであると著者は論じている。

(17) 大学自己調査 (Institutional Self-Study)

本章では、①自己調査の性質、②基準認定 (アクレディテーション)、③自己調査の方式、④総合的自己調査の特質、⑤必要な調査の決定、⑥自己調査の運営と戦略、⑦自己調査の効果を高めること、⑧自己研究 (institutional research)の役割、⑨定期的評価 (rolling evaluation)という構成で、大学の自己調査に関して論及している。

ここでいう大学自己調査は、当該大学のスタッフによる大学運営の全体的効果に関する計画的・組織的調査 (inquiry)である。通常、自己調査 (self-study)は学内各組織の代表的なメンバーで構成される委員会・専門委員会 (タスク・コース)・研究グループによって実施される。これらの委員会等による自己調査にはその前提として基礎的調査 (ground works)が必要であり、それを担当するのが各大学に設置されている自己研究部門 (Office of Institutional Research)である。この研究部門は専任スタッフを擁し、大学・州・国家レベルのデータ収集や意見調査などを行う。さらに自己調査に必要なテーマ等を検討し、委員会の選出・審議の指針を提示するケースもあるという。また、自己研究部門が、上記のようにデータ収集や調査研究を通して問題の分析、問題の指摘をしたのを受けて、自己調査の委員会は主として新しい政策的な提案を行うなどして、以上の問題の解決に寄与する。このように自己調査委員会と自己研究部門とは役割上の差異があるが、現実には両者の役割に重複するところも少なくない、とされている (本章8節参照)。

(18) 州政府の調整と計画

学生数の増大・大学院の強化など行ってきた州立大学を中心に、州政府の財政的援助が増大し、高等教育における州政府の調整・計画性の役割は大きくなってきた。長年の間に、州の調整機能は多様な権限範囲の多彩な形態をもつに至ったとされている。州レベルの調整のため機関は、州政府の財政的支援をうける公立・私立大学の計画・新規提案・予算決定等以前の段階における各大学活動の評価に関する責任を負っているとみなされている。

本章では①調整の目的、②調整の問題点、③調整に関する評価と各テーマごと各節で詳細に、かつ具体的に論及されている。州政府の調整が各大学に与えている問題点は、州の調整により大学の自律性の喪失は不可避となり、各キャンパスにおける意欲的な指導性 (リーダーシップ)も弱体化してしまうことだと著者は指摘している。この問題指摘は日本の大学においても共通する側面がある。本章は日本でいえば、国家・文部省の高等教育政策に関する評価の必要性和パラレルの問題を扱っているといえるであろう。

エピローグ：費用・意思決定・政策

本書の最終章である本章において、著者は先づ教授団や管理職者が大学の評価を避ける理由を整理して示した上で、評価—政策—管理運営論を展開している。組織は元来、その組織を批判的に検討することを前提とした自己評価とは相反する側面を有する。また外部からの財政的支援が十分に得られる大学の成長期においては、評価や計画性が欠如しても大学の事業は拡張する。逆にいえば大学事業の拡大が、評価・計画性の欠如を隠蔽し、それらの重要性を認識しがたくする傾向があるという。多くの組織は、通常の運営に埋没し、危機が生じるまで、評価・計画の重要性を理解しようとしなない。しかし危機が生

じた時にはもう遅いのである。高等教育機関に評価・計画の能力がないことが明白となれば、その仕事は外部機関が実施するであろう、と著者は警告を発している。一方で、大学が総合的・継続的な評価プログラムに着手したときには、大学にとって一見望ましくない結果が生じる可能性があることも否定できない。しかし現在、高等教育が当面している困難は、十全なる評価機能を欠落しているために、望ましくない結果がすでにもたらされていることである、と著者は論じている。

4 本書に関する紹介者の感想

本書は「大学教育評価のハンドブック」という題目であるが、決してそれはハウツウものではない。大学教育に関連した評価すべき諸対象のそれぞれに関して、現状における問題点、それを評価する目的、評価の観点・方法などについて、数学出身の著者らしく、偏見にとらわれることなく、客観的に従来の研究成果を分析し整理しようと試みている。しかも著者は大学のカリキュラム研究、教授法研究、評価研究さらには大学自己研究等に関する多くの研究蓄積を有しており、この著者が深い見識に基づいて各章に示した提言の多くは、日本の大学関係者にとっても示唆に富むものである。本書成立の背景には、アメリカの大学における歴大な大学・高等教育研究成果の蓄積がある。そのアメリカでさえも、大学教育の評価に関して教授団や管理職者の無関心や抵抗などによる深刻な困難があるという。今日、大学・高等教育研究が未発達であり、大学教育の評価論の蓄積が乏しく、しかも大学教育の現状について危機意識が比較的乏しい日本において、大学教育の評価は果たして可能なのだろうか。本書を通して大学教育評価の困難性を再確認したというのが紹介者の即直な感想である。しかし、大学の自律性の確立を志向し、社会的責任を果たすべく大学教育の活性化の観点から、大学教育評価を積極的に検討しようとする日本の大学の学部・学科教授団にとっては、本書から評価の枠組み、評価の原理・方法等について学ぶものは極めて多いであろうことは、確かなことである。

Shirley M. Clark and Darrell R. Lewis 編

『教授団の活力と機関的生産性：高等教育の批判的展望
—— Faculty Vitality and Institutional Productivity:
Critical Perspectives for Higher Education』

(Teachers College, Columbia University, 1985年, 293頁)

有 本 章*

1 本書の意義

本書は比較的最近になって出版された、FD (Faculty Development/大学教授団の資質改善) に関する書物であり、新しい角度からFDを論じたものとして注目されている。例えば、FDに関する研究文献をレビューした C. Bland and C. C. Schmitz, "Faculty Vitality on Review: Retrospect and prospect," *Journal of Higher Education*, vol. 59, No. 2., 1988. によれば、この文献は従来の研究の域を超えて新しい視点を開拓していることが指摘されている。その意味で、従来の J. G. Gaff, K. E. Eble, W. J. Mckeachie などの手掛けたいわば正統的なFD研究からみれば、タイトル自体からして一見、正面からFDを取り上げていないように見える点で逸脱しているとの印象を与えるかもしれないが、本書が教授団の資質改善の運動や研究のれっきとした一つの潮流に位置づくことは確かである。大学人や大学組織の活力をその相互作用のなかでトータルに解明しようとする、比較的新しい動向を示している基本的文献として取り上げる必要があると思われる。

タイトルが逸脱的であると言っても、例えばいち早くFD研究に取り組んできた J. A. Centra のFD論を包含している点において、授業や教育を重視する立場を踏まえて、教授団の専門職としての資質を高めるといふ、FD本来の基本的観点を踏襲している。さらに R. T. Blackburn, B. F. Reskin などこれまで科学社会学において学問的生産性の研究を展開してきた学者を擁していることは、高等教育と科学社会学研究との連携した業績になっているといえる特色がある。FDは大学人の教育と研究における生産性を高め、専門職的活力を高め、さらに大学組織の活力を高めることであるという観点を強調するとき、大学人の生産性の条件を広く視界に入れ、しかも大学組織を多面的に分析するといった学際的研究が必要であることは言うまでもない。その点、本書は教育社会学、科学社会学、経済学、心理学、教育学、高等教育論などの領域の学者が共同してさまざまな角度から大学人と大学組織の活力を吟味し、解明、展望する試みとなっているところに特徴が存在する。大学教授のライフサイクルや成長発達の視点から科学的社会化や学問的社会化を論究する視点も欠かせない視点であるが、本書はそのような視点をかかなり視野に含めているし、さらには成長発達モデルを最初に提起した R. J. Havighurst の参加を得て同様の視点を導入していることは、成人のキャリアの問題やひいては生涯学習の視点との連動性を示す広がりや膨らみを与えており、この種の研究がとかく狭くなることを抑制する契機になっていると考えられる。これらの点の特徴であり、魅力である半面、研究会の研究発表を集成した論文集であるため、全体に総花的であり、体系性、整合性に欠けるきらいがないとはいえない。率直に言って、その点

* 大学教育研究センター教授

はやや物足りない。しかし、FD研究の幅広い領域に一つの重要な領域を開拓し、従来のこの領域における研究動向を整理していること、しかもこれからの発展が望まれる日本のこの分野の研究活動に示唆と刺激を与える内容になっていることは十分指摘できるといえよう。

なお、編者の Shirley M. Clark はミネソタ大学の教育学及び社会学の教授で、高等教育、青年研究、女性研究を含む教育社会学を専攻しており、また Darrell R. Lewis はミネソタ大学準教育学部長で、高等教育を中心として教育経済学を専攻している。

2 本書の構成と内容

本書は次のように4部12章の構成である。

緒言

第1部 序論

1章 高等教育における教授団と機関の活力 (Shirley M. Clark, Carol M. Boyer, and Mary Corcoran)

第2部 教授団の活力における経験的論争点

2章 高等教育における教授団の生態的变化 (W. Lee Hansen)

3章 教授団の経歴発達：理論と実際 (Robert T. Blackburn)

4章 老齢化と生産性：経歴と所産 (Barbara F. Reskin)

5章 老齢化と生産性：年輩教授団の事例 (Robert J. Havighurst)

6章 教授団の活力に対する個人的および組織的貢献 (Shirley M. Clark and Mary Corcoran)

第3部 教授団ヴァイタリティにおける政策的取捨選択

7章 ファカルティ・デベロップメントによる教授団の活力の維持 (John A. Centra)

8章 経歴中途移動による教授団の活力の維持 (Carl V. Patton and David D. Palmer)

9章 大学外の専門職的コンサルトによる大学教授団の活力の維持 (Carol M. Boyer and Darrell R. Lewis)

10章 集団交渉による教授団の活力の維持 (William E. Becker, Jr.)

11章 早期定年による教授団の活力の維持 (Karen C. Holden)

第4部 エピローグ

12章 機関的反応のための含意 (Shirley M. Clark and Darrell R. Lewis)

編者紹介/執筆者/参考文献/索引

以上の構成について、紙面の制約があるので、要点を紹介することに留意しつつ内容を見てみよう。まず、緒言は本書が出版された目的、動機、あるいは問題意識が述べられている部分である。それによれば、編者達が「多くの教授団メンバーや管理者たちがいかに教授団の経歴が発達し、いかに教授団の経歴発達が専門職的活力や機関的生産性に関係しているとみなされているかに無知であること」に関心を抱いたこと、さらに、高等教育において生じている生態的および経済的動向のなかで、教授団の活力がいかに維持され得るかに関心を抱いたことに、それぞれ研究の起点があるとしている。この観点から、1982年にミネソタ大学で高等教育に関する一連の会議が開催され、系統的研究がなされたが、それに基づいて本書は書かれていることが述べられている。

第1部。序論では、第1部が教授団の経歴的活力の問題について、主として組織行動科学の先行研究

を踏まえた、理論的ならびに概念的論争点を論じることを明らかにしている。そしてまず、本書の主題であるヴァイタリティ (vitality)つまり「活力」とは何かが定義されるべきであるが、この言葉は広く使用されながら、十分な定義がなされているわけではなく、本書においても、必ずしも明確な定義がなされているとはいえない。そのことは次のような表現に見いだされよう。

「vitality は有意義な生産を可能にするような、個人ならびに機関の本質的ではあるが、それでいて目にはみえない、積極的な資質である。ちょうど遂行と活力が関係しているように、個人と機関の活力は深く絡み合い、相互に強化しあっている」(p.3)。

「活力は明確な概念というよりもおそらく不明確な概念である。・・・活力は高等教育における複雑な現象を記述するために最近有効であると考えられている原始的概念 (primitive concept)である。しかし、後述するように、活力が何であるかを正確に言うことはむづかしい。」(p.6)

「われわれは vitality について、辞書による典型的な意味であるところの、肉体的または精神的活力 (vigor)とか、生存しかつ発達するための能力とかに慣れ親しんでいる。われわれの目的からすれば、鍵になる文句は発達すること (to develop)である。単なる生存または存在は十分ではない。存在は目的的で、不断に刷新されなければならない。実際、不断の刷新は活力ある機関と個人にとって John Gardner の鍵概念なのである。」(p.142)

本書は、このような各種の定義を詮索しながら、活力の実態を明らかにすることを試みている。活力についての厳密な定義は難しく、曖昧性が払拭されたという印象は必ずしも得られないが、具体的には、次のようなミネソタ大学の教授団の活力の規定にみられるような内容となるものと解釈されていることが分かる。

「教授団はその教育、研究、サービス活動において生産性を上げるとき活力がある。生産性は出力の量ではなく、教授団の同僚によって判定された出力の質によって性格づけられる。教授団は、重要で新しい知識を創造し続け、しかもわれわれが住んでいる世界についてのわれわれの理解を拡大させるならば、活力がある。教授団はもし大学の授業プログラムがモニターにかけられ、開発され続けられるならば、活力がある。教授団は、教育と研究に対して革新的と伝統的の両アプローチのバランスがとれているときには、活力がある。ミネソタ大学の教授団は、もし知識を求める州、国家、世界の要請に応えるならば、活力がある。時折、この活力は学問のための報賞や褒美によって承認をうける。おそらく最も重要なのは、教授団は、もしそのメンバーが自らの仕事を刺激があり、楽しく、満足のいくものとみなしているならば、活力がある。」(p.10)

このような、活力に関する研究は従来等閑に付されたのではなく、種々の方法によって展開されてきたが、それには、①機関の名声に依拠する方法、②個人の伝記や自伝に依拠する方法、③機関の中の個人の機会構造に注目する方法、④個人の経歴発達に注目する方法、などがある。また、組織行動の視点からみると、①組織変動、②境界維持、③個人と集団行動の内的環境、④統制システム、⑤報賞システム、⑥職業充足とモラル、などのアプローチがある。

これら活力研究の方法を整理した上で、それでは活力は測定できるか、という問題が論じられている。組織の効果を測定する作業は組織研究者によって50年間続けられてきたのに、成果が十分に上がっているかと言えば、そうではなく、組織の効果は十分測定できるものではないという結論にならざるを得ない。なぜならば、効果を測定する基準が明確である場合でも、組織的目標、内容、性格が異なり、基準の特定、分析水準、資料の源泉などに方法論的不一致がみられるからである。同様に、組織一般に限らず、高等教育組織の効果を測定する場合にも問題がみられる。高等教育組織の効果を測定する基準を定めるのがとくに難しい理由は、K. Cameron が指摘しているごとく、①拡散的性格による目標の特定化の困難、②外部統制による危惧のため機関の評価に対する懐疑と防御、③経済的効率重視による量的評

価から、質と量の区別が曖昧になること、④大学が特別の性格をもつこと、等の理由によっていることが理解できる。

以上のような考察のあと、結論として次の諸点が指摘されている。①個人と組織の活力は相互関連していること。②活力のある機関とエリート機関とは重複する場合があるが、活力の概念は必ずしも威信のある機関を意味するのではなく、それらのみを指すのではないこと。③活力を定義するときは、状況的かつ文脈的側面が考慮されなければならない、FDプログラムは画一化されるよりも、むしろ個人化される必要があること。④生産性と効率性は活力の概念に含まれるけれども、そのすべてではないこと。⑤熱狂、エネルギー、精神などと訳される活力の側面にも考慮すべきこと。

第2部は第1部の理論を踏まえて、教授団活力の経験的論争点についての各論が展開されている。第2章は、高等教育の生態的变化に焦点が合わされ、年齢、財政逼迫、入学者数の減少、教師・学生比率、テニユア問題、定年政策などの指標を考慮して、教授団のフロー・モデルが論究されている。その結果次の諸点が指摘されている。①1980年代から1990年代での高等教育の経済状態は思わしくないのも、その間博士号取得者の輩出は十分であっても、雇用は少ない見込みであること。②諸機関の教授団は老齢化し、多くの機関における構成割合は50代60代に偏重するとき、定年制が変更され、定年年齢が引き下げられれば、さらに老齢化が進み、若手の雇用が難しくなること。③老齢化は給料の引き上げ、機関の費用を一層嵩むものにし、高等教育セクターの財政的圧力をさらに高める結果をもたらすこと。④大学教授団の老齢化は、少なくとも早期定年促進政策、経歴中途転出政策、給与構造の変更、テニユア比率を厳しくする政策などによって、潜在的には抑制できるが、現実にはかなりの努力が必要であること。

第3章は、教授団経歴発達 (faculty career development) の視点から、各種理論を検討し、とくに D.J. Levinson の成人期モデル、Bayer and Dutton, Allison and Stewart, Cole, Pelz and Andrews, Blackburn, Behymer and Hall などの専門分野別生産性モデルを踏まえながら、経歴発達論を展開している。生産性は直線型や単一ピーク型よりもサイクル型を描き、グラフ化すれば、Pelz and Andrews が指摘したサドル形 (saddle shapes) になる。しかし、専門分野やさらに下位専門分野において種々のバリエーションが生じるのであって、教授団全体に等質の形を提示するのではない。このような一般的特徴を指摘した上で、著者は経歴には種々の段階の社会化過程 (9段階が区別されている) が存在するとしているところに特色が見られる。

第4章は老齢化と生産性の関係を実証的に研究している。著者は Bayer and Dutton (1977) の研究など先行研究のデータを再検討しながら、各種専門分野---物理学、天文学、数学、化学、化学工学、生化学、生物学、地球科学、地質学、心理学、経済学、社会学など---について個別にその特徴を明らかにしている。その結果、①年齢と生産性には直線的な関係は見い出されず、また老齢化が低生産性に直結するとはいえないこと、②生産性の二つのピークのうち、前者は博士号取得後10年以内に生じ、後者は定年に近づいたときに生じること、③老齢化の単純な効果は顕著ではないこと、等が指摘されている。

第5章は、老齢化と生産性の事例研究である。調査は1975-76年に、59-63歳の社会学と心理学を専攻する男性学者の60代から70代での生産性を分析している。その結果「低生産者は生活している身近な社会環境を気にし、敏感であり、ローカルな準拠集団に志向している。これに対して、高生産者は内的でむしろ抽象的なモチベーションに動かされ、創造性と新しい経験を追求するが、身近な個人的環境の支持に依存しない。」傾向がみられたとしている。(p.105) 比率では、この年齢層の20%は全職業経歴を通じてと定年後において研究と教育に没頭し、約55%は全職業経歴を通じてと定年後に研究活動をほとんど行わず、管理、サービスなどとともに教育活動を行っている。残りの25%は研究とその他の教

育とサービスとを結合している。この調査に用いられた調査対象者を、カーネギー高等教育審議会の大学分類に配置して比較してみると、研究大学をはじめ比較的研究を重視する層に属することが分かる。著者は、このような高齢者にみられる研究生産性の高い形態やその他の形態が混在するという種々のライフスタイルを考慮すると、定年プログラムは画一的なものになるのではなく、それら各種形態に見合った形での柔軟な政策がとられる必要があると結論している。

第6章は、活力は個人と環境の相互作用の所産であるという観点から、ミネソタ大学の研究、教育、サービスにすべて生産的な63名の教員を対象にして事例研究がなされている。専門分野は人文、社会科学、生物科学、物理科学、数学。11%は女性。年齢は30代前半から60代まで。1969年のカーネギー調査によれば、米国の大学教員の77%はその興味が研究より教育、もしくは研究と教育の両方だがどちらかといえば教育へ傾斜していると回答しているが、これに対して、本調査では、51%が両方だがどちらかといえば教育へ傾斜、29%が極めて研究重視と回答している。これらの教員は、「アスピレーションが高く、資質と業績に高い評価と価値を置き、仕事が最高の生きがいであるとしている」(p.125)これらの結果に基づき、著者は、教授団の活力を高める政策として、①創造性や知的活動を促進するような環境的支持、②自由な研究活動の支持、③個人の個々の要求に対する支持、などの必要性を指摘している。

第3部は教授団の活力を高めるための政策を論じている。第7章は従来の機関的政策を吟味し、第8章は中年期の経歴変更の問題を扱い、第9章は大学以外の場での専門職的カウンセリングを検討し、10章では組合化と活力を問題にし、11章では早期定年政策をそれぞれ追究している。これらの詳細は紙幅の関係で省略せざるを得ないが、この中では、第7章がいわゆる伝統的なFD論である。著者 Centra は歴史的にFDの発達を描写したのちに、彼独自の調査(1976)を紹介している。当時2600機関の中で、回答を得られた1,800機関の約60%にあたる1,044機関がなんらかのFD活動を展開していると回答した、としている。さらにその中の756機関について詳細な検討を加えている。それらの結果の中で最も興味を惹くのは、何れの大学でもFD活動が最も必要とされる教員が最低限度にしかそれに参加していない事実を指摘していること(p.151)、総合大学は4年制カレッジやコミュニテイ・カレッジに比べて活動が低調であるとしていること(p.153)、である。そして著者は現在の高等教育の閉塞状態の中で、FD活動が経済的理由によってむしろ後退しているが、この状態の中で、教授団が「燃えつき」(burnout)状態に陥ってしまうという教授団の活力喪失が遠からず高等教育の衰退を招来することになるのではないかと危惧している。ちなみに、本書とは別の書物であるが、H. R. Bowen and J. H. Schuster, *American Professors: A National Resources Imperiled*, Oxford University Press, 1986. においても、この危惧と符合するかのように、経済的要因に惹起された大学教授団の活力減退がアメリカの高等教育の疲弊と衰退をもたらすという警告がみられることは興味深い。

以上の考察を踏まえて、最後に第12章において、総括を行ない、機関の活力と生産性を高めるために必要な政策と人事管理において、本書は次のようなガイドラインを提供していることを確認している。①個人と機関の活力は相互関連しており、教授が移動性を欠如するときには、社会化の質と効果が重視される必要があること。②活力ある機関は、機関類型、資源、学生層、使命などがかかわっているのであって、いわゆるエリート機関がそのまま活力ある機関になるのではないこと。③教授団と遂行に関する理想型は機関類型と使命によって異なること。教育と(もしくは)サービスを強調する機関はFDに力点を置く必要があり、研究や学問志向の機関は学問的生産性を高める努力が必要であること。④生産性と効率性は活力の観念に含まれているが、それらは活力のすべてではないこと。公表や授業における教授団の出力の量的評価以上に、質と効果の問題が存在すること。⑤熱狂、エネルギー、精神などさまざ

まに名付けられている活力には体系的考察がなされなければならないこと。Kanter (1979)によれば、組織の経歴構造の中で、自分を stuck よりも moving であると見なしているものは、自分のアスピレーションを高く保持し、肯定的な自己評価を行い、よく働き、危険に対処し、興味を持続し、学生や同僚との関係がうまく行き、建設的な組織変化を促すことができる、とする。このような構造を如何につくり出すかが、機関において教授団の活力を高めるための課題になることになる。

Kenneth E. Eble, Wilbert J. McKeachie 著

『ファカルティ・デベロップメントによる学部課程教育の改善
——Improving Undergraduate Education
Through Faculty Development』

(Jossey-Bass Publishers, 1985年, 248頁)

相原 総一郎*

1 本書の特徴

本書は、ブッシュ財団から補助金を受けた大学で実施されたファカルティ・デベロップメント活動の報告書である。これまでにブッシュ財団は、高等教育の改善のために様々な援助をしてきた。その一環として、1979年4月から、ミネソタ州と南北ダコダ州の大学のファカルティ・デベロップメント活動に対する補助を始めた。

この補助計画の開始にあたっては、つぎの7点が考慮された。それらは、①補助計画は長期的展望に立つこと、②年間の経費を200万ドルと見込み、最長補助期間を6年とし、総額経費の見積りを1100万ドルとすること、③ファカルティ・デベロップメントへの補助は、これまでの財団の援助活動の延長にあること、④補助計画は学校の個性を考慮すること、⑤ファカルティ自身の計画や提案を尊重すること、⑥補助計画はブッシュ財団のスタッフによって管理されること、⑦全般および個々の学校での計画を内在的および外在的に評価することである。

こうしてブッシュ財団の補助金が、高額な補助としてはミネソタ州立大学システムに989,950ドル、ミネソタ大学に900,000ドルが支払われた。また小額な補助としては、75,000ドルが小規模な私立カレッジに支払われた。これらは学校の予算規模からみると0.03%以上1%未満を占める。そして、補助金は専門性の育成 (professional growth)、教授改善 (instructional development)、カリキュラム改善 (curriculum change)、組織改善 (organizational change) に用いられた。

補助金は、個々の公立および私立の大学の必要に見合って運用された。この必要の多くは、大学の財政困難に由来するものであった。この補助金によって、多くの学校ではファカルティのモラルと学術水準の維持がなされた。また、多くの学校でのコンピュータの導入や教育課程の変更 (職業教育と教養教育の調整) を援助した。

補助の過程から、つぎの5つの仮説がファカルティ・デベロップメント活動を成功に導くであろうと設定された。

1. ファカルティがファカルティ・デベロップメント計画を彼ら自身の計画と感ずること
2. 計画には、大学の運営側から多くの協力が必要であること
3. 外部よりも内部の専門家に企画を委任すること
4. 短期的な企画よりも長期の継続活動を実施すること
5. ファカルティの専門性の発展は、必ずしも学生の学習能力の発展にはならないこと

* 大学教育研究センター助手

本書の著者の1人である Eble は、Utah 大学の教授である。彼はこの15年間に、合衆国とカナダの200校を越える大学で教授学やファカルティ・デベロップメントの顧問をしてきた。彼は、学士号と修士号を Iowa 大学から授与され(1948, 1949)、英語学の Ph.D を Columbia 大学から授与されている(1956)。

もう一人の著者である Wilbert J. McKeachie は、心理学の教授であり、Michigan 大学の教授・学習調査センターの元センター長である。彼は、アメリカ心理学会、アメリカ高等教育連盟、アメリカ心理学財団の学会長を務めた。また彼は、アメリカ大学教授の教育・調査・発行委員会の委員長でもあった。現在は、国際応用心理学会の教育、教授、学校心理学の部会長である。彼は名誉学位を Northwestern 大学、Denison 大学、Eastern Michigan 大学、Cincinnati 大学から授与されている。

2 本書の構成

本書の構成は、つぎのとおりである。

第1部 ファカルティ・デベロップメント活動の革新

第1章 ファカルティ・デベロップメント活動の革新

第2章 ブッシュ財団のプログラム：ファカルティ・デベロップメントのための外部資金

第3章 私立大学でのプログラム

第4章 公立大学でのプログラム

第2部 ファカルティ・デベロップメント・プログラムの企画と実行：ケース・スタディ

第5章 小規模リベラル・アーツ・カレッジでのプログラム：College of Saint Teresa と Dakota Wesleyan University

第6章 中規模リベラル・アーツ・カレッジでのプログラム：Augsburg College, College of Saint Thomas と Macalester College

第7章 Carleton College と Saint Olaf College でのプログラム

第8章 ミネソタ州と北ダコダ州の大規模公立大学でのプログラム

第3部 効果的なファカルティ・デベロップメント・プログラム：結論と提言

第9章 ファカルティを知ることの重要性：現在の関心と態度の分析

第10章 ファカルティ・デベロップメント・プログラムの評価：違いがあるか？

第11章 展望：学部課程教育の改善のためのファカルティ・デベロップメント・プログラムの設立

第1部は、ブッシュ財団が企画したファカルティ・デベロップメントへの補助計画の概観の提示である。第1章では、ファカルティ・デベロップメントの概念規定とその意義が設定される。そして、第2章でブッシュ財団がファカルティ・デベロップメントに補助を開始するに至った経過とこの補助計画の基本的な方針が提示される。第3章と第4章は、ブッシュ財団から補助金を交付された私立大学と公立大学について、それぞれの学校の沿革と補助金の規模や用途が紹介される。

第2部は、ブッシュ財団によって助成されたファカルティ・デベロップメント活動の効果の検討である。この第2部では、個々の学校類型ごとに典型的な学校が選ばれ、詳細なファカルティ・デベロップメント活動の評価が行われている。それは、まず第5章で小規模なりベラル・アーツ・カレッジの活動、ついで第6章で中規模なりベラル・アーツ・カレッジでの活動、そして第7章で名門の選抜度の高いリベラル・アーツ・カレッジでの活動を評価している。また、第8章は公立大学での活動の評価である。

第3部は、本書の結論部分である。ここでは、ファカルティ・デベロップメント活動の検討から導かれた結論と提言が示される。まず第9章で質問紙法などを用いてファカルティの現状が明らかにされる。

つぎに第10章でファカルティ・デベロップメント活動の評価が先に提示された仮説の検証とともに実施される。そして、第11章に今後の展望が示されている。

3 本書の主要報告

本書の主要報告部分は、第2部である。ここでは、ブッシュ財団から補助を受けてファカルティ・デベロップメント活動を実施した大学について、各学校類型ごとに詳細にFD活動の評価を行っている。設定された学校類型は、①在学者が1,000名未満の小規模私立大学、②在学者が1,000名から2,000名の中規模私立大学、③選抜度の高い名門私立大学、④大規模公立大学の4つである。これらの大学から得られた知見は、他の大学のFD活動にも役立つであろう。したがって、それぞれについて紹介する。

① 小規模私立大学

小規模な私立大学の多くは、学生数の減少や学生が求める教育内容の変化、カリキュラムが豊富で授業料の安い公立大学との競争などから財政難にある。そのため、ファカルティの給与は低くおかれ、図書館などの整備も不十分であるといった状況にある。本書では、the College of Saint Teresa と Dakota Wesleyan の事例が紹介されている。これらの学校に共通するのは、ファカルティの給与が高くないこと、近隣に大学がないこと、過半数のファカルティがPh.D.を取得していないこと、財政上の問題からファカルティを削減していること、学生の需要に見合ったカリキュラムの改善を求められていることである。

たとえば College of Saint Teresa のFD活動は、つぎのように実施された。

College of Saint Teresa は、学生数が約600名の女子大学である。学生の30%は看護コースに在籍している。常勤のファカルティは63名で、このうちPh.D.の所持者は24%、M.A.の所持者は69%であった。

ブッシュ財団からの補助金の一部は、これらファカルティの上級学位の取得にあてられた。それは、看護プログラムの基準認定（アクレディテーション）を維持するためである。また、聴講する学生が少ないある政治科学のファカルティが商法を学習するための便宜としても補助金の一部が用いられた。

さらに、ビデオテープやコンピュータなどについてのワークショップが開催されたり、ファカルティの雇用や昇進、テヌアのあり方が検討された。

これら College of Saint Teresa で実施されたFD活動をまとめると、1.ファカルティの専門性の向上、2.ファカルティの学際的訓練、3.教授方法の改善、4.大学組織の改革となる。

こうしたFD活動の結果、学生の留保率は65%から85%へと上昇し、ファカルティに対する学生の評価も高まった。この他、ブッシュ財団の補助金はファカルティの研究旅費などにも用いられた。これはファカルティのモラルの維持に効果があった。

② 中規模私立大学

中規模のリベラルアーツカレッジは、小規模のリベラルアーツカレッジに比べて財政上の基盤は強い。しかし、潜在的な学生の減少や学生の興味の変化に直面している。本書には、Augsburg College と College of Saint Thomas と Macalester College の事例が紹介されている。

まず Augsburg College では、FD活動が教授能力の向上として、ワークショップの開催とコンピュータ使用の講習会、助言能力の向上などに用いられた。また専門性の向上として、夏期調査補助金の交付や論文執筆プログラムの提供などにも用いられた。

College of Saint Thomas では、補助金の多くは、夏期セミナーに用いられた。セミナーの目的は様

々で、セミナーの長さも2週間から4週間と多様であった。ファカルティは、それぞれのセミナーに14名から20名が参加した。このファカルティの参加に対しておよそ2,000ドルが助成された。また、3年間のセミナーが開催され、3名のファカルティと15名の学生が1週間に1回の割合で討論会をもった。また、現職ファカルティの教授能力向上セミナーに対しても援助がなされた。

さらに Macalester College では、つぎの4項目に対してFD活動が実施された。①1,000ドルまでの調査補助金、②2,000ドルまでの海外研究の補助金、③500ドルまでの教授／学習セミナーやファカルティ合同セミナーへの参加のための補助金、④750ドルまでの第2,3学年生への調査奨励金である。Macalester College の他にみられない特徴は、まず補助金を享受するにはファカルティは企画を立てなければならないことと、ブッシュ財団からの補助金が将来のFD活動のために貯蓄されたことである。

これら3校のなかでは、Augsburg College の財政がもっとも緊迫しており、ファカルティの給与についてみるならば、Augsburg College のファカルティの給与が3校の中でもっとも低くなっている。一方で、Saint Thomas College のファカルティの給与は、ミネソタ州の上位25%に入り、また Macalester College の給与は、ミネソタ州のたいていの私立大学よりも高くなっている。

これら3校の補助金を用途と活動形態で整理するならば以下である。

- (1) 個人活動への補助 (Macalester) 対 集団活動への補助 (Saint Thomas)
- (2) 教科への補助 (Macalester) 対 教授技能への支援 (Augsburg・Saint Thomas)
- (3) 学校全体の活動 (Saint Thomas) 対 各コースの活動 (Augsburg・Macalester)
- (4) 企画への補助 (Augsburg) 対 参加者への補助 (Saint Thomas)

これらの中規模私立大学へのブッシュ財団からの補助金は、次の点で有効であった。まずファカルティのモラルの維持である。たとえば Augsburg College では、ブッシュ財団の補助金がなければファカルティのモラルや学生の留保率に深刻な問題が生じたであろうと推測される。次に補助金は、大学が抱える間接的な問題の展開にも役立った。たとえば College of Saint Thomas における共同体感やファカルティ相互のコミュニケーションの増加などである。

③名門私立大学

本書では、名門私立大学として Carleton College と Saint Olaf College の事例が紹介されている。

Carleton College と Olaf College は、ミネソタ州ノースフィールド地域にあるカノン川の両岸にある。両校とも、アカデミックなプログラムの提供と同窓生の協力体制が重視されており、卒業生の過半数は大学院へ進学する。そして、卒業後にミネソタ近郊に在住する学生は半数以下である。

Carleton College では、ファカルティは学生の高水準の学習要求に答えなければならないので、教授／学習の関係が厳しい。また、Carleton College は都会から離れており、ファカルティの多くは研究大学の出身者が多いために、彼らは学問の主流から離れたと感じている。これら Carleton College の特徴をまとめると以下になる。

- (1) 威信の高い学校であるために、ファカルティは高い見識を要求される。
- (2) テヌアのないファカルティには発刊の圧力がかかるので、調査をすることで自己同一性を維持しようとする。
- (3) 学部の規模が小さいために、ファカルティは他分野の専門家と同僚になれない。
- (4) ファカルティと学生の一体感は、大規模な大学よりも強い。
- (5) 研究大学の専門志向に対してアマチュア志向がある。
- (6) 物的設備が足りない。

こうした学校の特徴を考慮して、ブッシュ財団の補助金はファカルティの学術能力の向上に用いられ

た。したがって、学生の学習能力の向上については、長期のFD活動が大学の知的な風土を形成し、それが学生の学習を改善することが望まれている。

一方、Saint Olaf College では、確かに過去のFD活動の目的はファカルティの学術能力の向上であった。しかし、Saint Olaf College は、とりわけ大学生活における宗教と道徳を重視する。それで、一般教育の改善を目的とするFD活動を実施した。たとえば、コースの改善やサバチカルなどである。

私立の名門カレッジのFD活動から2つの要点が明らかとなった。それは、(1)大学の伝統や目的や日常活動と一致したFD活動の必要性、(2)どのようにファカルティの調査や奨励金やその他の活動が学生の学習の向上につながるかを決定することの困難さである。

これらのカレッジでは、ファカルティは学生の学習や学校の教育の質の向上よりもファカルティ自身の関心にしがってプログラムを計画しようとする。しかし、学術研究と授業の間に明確な関連がなければ、学術研究を援助するプログラムによって授業の質が向上されるとは思われない。したがって授業を強調するFD活動の支援は、教授能力は獲得できるし、それは学術研究と同じく重要であるという信念を要請する。

④大規模公立大学

大規模な公立大学へのブッシュ財団の補助金の事例としてミネソタ州立大学とノースダコダ大学の事例が紹介されている。

ミネソタ州立大学は、ミネアポリスのセントポールにあるミシガン州でもっとも大規模な大学である。1983～84年度の在学者は、夜間学生を含めて64,179名であった。ミネソタ大学は、ファカルティのサバチカルのために900,000ドルを申請した。

ノースダコダ州立大学は、グランドフォークスにあるノースダコダ州でもっとも大きい大学である。学生数は、約10,000名である。ノース・ダコダ州立大学は、375,000ドルを申請した。

ミネソタ州立大学が、1981年にブッシュ財団に補助金を申請した際に示された大学の特徴は次の5点であった。

1. 大規模な研究大学である。大学の広報課によれば、全米で上位6位に位置する。
2. 本学では、昇進とテヌアは研究と教授の両方の活動を重視する。
3. 学部学生は45,000名、大学院生が7,000名である。学部学生に対する大学院生の比率は、他の研究大学より少ない。Teaching Assistants は約2,000名。ファカルティは約3,000名である。
4. ミネソタ州において唯一の Ph.D. を授与する大学である。
5. 都市に位置することと学部の規模の大きさから通学大学 (Commuter University) である。

大学当局は、これまでのFD活動の経過を考慮して、ブッシュ財団に半額の給与を支給する1年間休暇のサバチカルに対する補助を申請した。このプログラムは、900,000ドル規模の3年計画で、1982年の7月から実施された。

一方、ノース・ダコダ州立大学は、ミネソタ大学と比べると小規模な大学である。しかし、上級学位を授与しており、ファカルティの62%は Ph.D. を取得している。この大学では、広範なFD活動が、研究活動だけでなく教育活動にも実施された。ノースダコダ州立大学の特徴は、フル・タイムの監督者とFD活動の各種委員会を設置したことである。

これら大規模な公立大学におけるFD活動の評価は次のようである。まず第1に、こうした大規模校でFD活動を実施するには、次の4点に配慮しなければならない。

- (1) 個人と学校の双方のFD活動の必要性の認識と責任分担の明確化
- (2) ファカルティへの配慮

- (3) 運営委員会とファカルティの強力での確な指導力
- (4) 学生の学習を直接および間接に改善する活動への援助

しかし第2に、FD活動の実践にあたっては、研究への志向がある大学ではFD活動の意義を主張しなければならないが、多数のファカルティに影響を与える方法の発見はもっとも困難である。

4 まとめと展望

本書の第3部「効果的なファカルティ・デベロップメント・プログラムの評価：違いがあるか？」において、ブッシュ財団による補助活動のまとめと展望が示される。まず第9章においてはアメリカ合衆国のファカルティの現状が提示される。そして、第10章でブッシュ財団の活動の評価が行われ、第11章で今後の展望が示される。個々の詳細は以下のようである。

アメリカ合衆国のファカルティの特徴は、まず年齢に関して、ファカルティの高齢化が進行していることである。すなわち、ファカルティの年齢のメディアンは40代の中頃にある。また性別でみるならば、看護プログラムをのぞいて男性が多い。そして、Ph.D.の取得状況は、学校の規模と関連する。すなわち、小規模な学校では25～30%のファカルティしかPh.D.を取得していないのに対して大規模校では75%がPh.D.を取得している。これはテヌアについても同様で、学校の規模が大きいほどテヌアの取得率も多くなる(テヌアの取得率は、35～70%)。

給与に関しては、これも在籍学生数とある程度関連する。“Annual Report on the Economic Status of the Profession 1983-1984” AAUP (American Association of University Professors) によるならば、ファカルティの平均給与は学校類型ごとに24,600ドルから41,100ドルである。しかし、教育義務は給与と逆比例する。すなわち、私立の小規模大学で教育義務が重いのにに対して公立の大規模な研究大学では教育義務が軽い。

このようにファカルティの研究・教育条件は決して恵まれているとはいえない。しかし、調査からファカルティのモラルは高いことが明らかになった。ファカルティの態度をインタビューや質問紙から調査したところ、ファカルティの23%しか現職の変更を考えていなかったのである。これは、他に職を見つけることができないからではなく、彼らの多くは教えることに満足しているからであった。

また調査から、学校の運営側からの援助とファカルティの満足との相関が高いことも明らかになった($r=.55$)。したがって、学校運営側はファカルティの自立感や学習の継続に対して援助すべきであろう。FD活動は、同僚とのコミュニケーションや共同作業などを促進し、ファカルティのモラルを向上させるであろう。

次に、ブッシュ財団の補助によるFD活動の評価である。

まず有効なFD活動の実施には、個別のプログラムについての評価が必要である。すなわち、どのようなプログラムがどのようなファカルティのどのようなタイプの学校でどのような問題の解決に有効であるかを評価する必要がある。これには理論の構築が要請されるが、FD活動ではこの理論化がもっとも遅れていることが指摘される。

そして、初めに示した仮説の検証がなされる。まず①ファカルティの自主性は成功に関連することが明らかとなった、そして②運営側の援助に関しては、否定する事例は認められなかった、③内部の専門家か外部の助言者かについては、外部の助言者も有効であり、コンピュータの使用法に関しては内部の専門家の方が有効であることが明らかとなった。さらに④短期の活動か継続的な活動かについては、全般にみて継続活動の方が支持された。また⑤ファカルティの選好については、ファカルティはサバチカルやファカルティ個人への補助金を望むが、カリキュラムの改善やワークショップなどの集団活動の方がFD活動には効率的であると結論が下された。

以上の検証を通して、FD活動は効果があったという結論が下された。また、大学の訪問とインタビューは、質問紙と同様に、情報の収集と結果の評価に有効であることが確認された。

最後に今後の展望である。近年、アメリカ合衆国でも18歳人口の減少にともない、これまでの高等教育の拡張が停滞を余儀なくされている。しかし、1990年代の後半には、高等教育の拡張期に採用されたファカルティの引退により新規採用のファカルティが増える。したがって、将来のFD活動は新規採用のファカルティに対して次のようなことを考慮しなければならないであろう。

(1) 若いファカルティは、時間の圧力を感じるであろう。

したがって、教育義務の減少や学術研究の保証などが重要になる。

(2) 若いファカルティは、テストの仕方や討論の指導、学生へのフィードバックの基礎技術を必要とするであろう。

(3) 若いファカルティは、同僚からの援助を必要とするであろう。

また、学生側についてみるならば、非伝統的な学生の増加は次のような考慮をFD活動に求めるであろう。

(1) 非伝統的學生を理解すること

ファカルティは伝統的學生であることが多い

(2) 社会の変化に対応した教授法を学ぶこと

今後の状況の変化にともない、これらの事柄が考慮されねばならなくなるであろう。

アーネスト・L・ボイヤー著（喜多村和之・館昭・伊藤彰浩訳）

『アメリカの大学・カレッジ』

（リクルート出版，1988年，363頁）

関 正 夫*

1 著者のプロフィール

アメリカの教育事業の発展に関して長年にわたり貢献してきた，世界的にも有名なカーネギー教育振興財団の会長 Ernest L. Boyer が本書の著者である。彼は1928年に生まれ，南カリフォルニア大学卒で，サイコロジー，コミュニケーション分野でMAおよび Ph.D を取得している。1970年から77年までニューヨーク州立大学（SUNY）システムの総長を務め，その後，カーター政権のもとで連邦教育長官（U.S. Commissioner of the Education）を3年間歴任している。1980年から上記カーネギー教育振興財団会長に就任しており，その後，教育改革に関連した報告書を数々と公表してきたことで知られている。訳者によれば，彼はクラーク・カー（『大学の効用』（訳書）東京大学出版会，1969年）やデイビッド・リースマン（『高等教育論』（訳書）玉川大学出版部，1986年）等とともにアメリカ教育界を代表するオピニオン・リーダーのひとりとなされているという。

著者の高等教育に関する著書としては，SUNYの総長時代に公表した“Educating for Survival”（Changing Magazine Press, 1977）のほか，上記財団会長時代には，Arther Levine と共著で“A Quest for Common Learning-The Aims of General Education”（1981），Fred M. Hechinger と共著で“Higher Learning in the Native’s Service”（1981），さらに単独で大著“High School: A Report on Secondary Education in America”（1983）（邦訳『アメリカの教育改革—ハイスクール新生の12の鍵』リクルート出版部，1984年）を出版している。

2 本書の特徴および構成

本書が対象としているのは標題から明らかのように，カレッジである。カレッジとは学部段階の教育を実施する機関であり，そこにおいては日本流に言えば，大学1年から4年までの一般教育と専門教育によって構成される学士号取得課程の教育が行われている。

訳者によれば，本書はカーネギー教育振興財団が100万ドルの巨費と3年間にわたる歳月を投じて行った調査に基づくものである。この調査は，5000人の教師，5000人の大学生，1000人の管理職員，1000人の高校生，1000人の高校生の親を対象としたアンケート調査と全米29大学に対するインテンシブな訪問調査を主軸としたもので，これまでに実施された4年制大学に関する調査のうちで最も組織的包括的なものの一つと評価されているという。また本書は，訳者がのべているように同財団の学部課程研究シリーズ（既刊；“Mission of the College Curriculum”（1977），“Curriculum: A History of the American Undergraduate Course of Study Since 1636”（1977），“A Handbook on Undergraduate Curriculum”（1978））の最後を飾る報告書であり，ある意味で，同財団の学部課程教育に対する関心の集大成とみることもできるのである。

* 大学教育研究センター教授

本書は、1980年代前半期に全米的に話題を呼んだ連邦教育省者の教育改革提言“Nation at Risk”（1983）（邦訳『危機に立つ国家』黎明書房、1984年）の大学版に相当するほど大学関係者のみならずジャーナリズムからも注目された。またある大学では全教職員に本書が配布され討議の資料とされたことも伝えられており、アメリカの大学においては大学教員や管理職員にとって本書は必読書とされているという。

さて本書の構成は、次の通りである。

- プロローグ 大学—分断された家
 - I 高校から大学へ
 - 第1章 進学への期待と大学選択
 - 第2章 大学進学の適正化
 - II 大学の使命と伝統
 - 第3章 オリエンテーション—伝統の確認
 - 第4章 2つの基本目的
 - III 教科課程
 - 第5章 言語—第一の必要条件
 - 第6章 一般教育—総合必修科目の提案
 - 第7章 専門化—拡充専攻の提案
 - IV 学びの時
 - 第8章 大学教授職—教師として、学者として
 - 第9章 教室における創造性
 - 第10章 学習用資源—書物とコンピューターの利用
 - V キャンパス・ライフ
 - 第11章 教室外の生活
 - 第12章 学生寮
 - 第13章 奉仕活動への参加
 - VI 多彩な目的・多様な形態
 - 第14章 広がるキャンパス
 - 第15章 大学の運営
 - 第16章 成果の測定
 - VII 大学から社会へ
 - 第17章 就職と継続学習
 - 第18章 たんなる有能さから社会への貢献へ
- エピローグ—よい大学を見分けるためのガイド

3 本書内容の概要

アメリカは世界で最初に、機会の開放を原則とする高等教育システムをつくりあげた。今や世界諸国の羨望の的とされるアメリカ高等教育システムの心臓部ともいうべき学部課程の教育経験の活力をむしろ失っている次の8つの問題がある。

①高校教育と高等教育の不連続の問題、②大学の使命・目標の混乱、③教授団の義務と職業関心の競合、④教授・学習における同調性と創造性の対立、⑤大学生生活の質的变化、⑥大学の管理運営の問題、

⑦大学教育の成果の測定、⑧大学と外部世界のギャップ、本書では以上を緊急の問題として、それぞれを柱（各部）にしてその解決を指向した方策等が論じられている。紙数の制約もあるため、以下には本調査研究の課題、FD（教員開発）活動、カリキュラム、教授・学習方法、大学教育の評価に関連した各章について、勧告の形で示された主要な提言を紹介することにする。

II 大学の使命と伝統

第3章. オリエンテーション—伝統の確認

提言：新入生たちはその大学を知ることによって、共同体意識が成長し、忠誠心が生まれ、教育的経験の質が向上する。…最初のステップとして、われわれは、新入生全員のために、オリエンテーションの最初のセッションを学年の開始前に開き、それを第1学期にわたって展開させるよう勧告する（p.71）。

第4章. 二つの基本目的—多様性と統一性：個人性と社会性：私的責任と公的責任

提言(1)：「個人性」—学生たちは自分の目的をとげるために大学の門をくぐり、自分の適性に従って新しい知識を身につけた、生産的な自立的な人間になり、大学を終えた後も学びつづけてきた。個人の利益に奉仕することは、つねに高等教育の第一の優先課題なのである（p.92）。

提言(2)：「社会性」—個人性が尊重され、多様化が普遍化している中だからこそ、社会性の要求を強く主張しなければならない。…狭い職業主義が多くの大学を支配する時代にあって、学生たちが自分たちが学んだことを自分を越えた関心事と結びつけることが「学部課程の教育」に課せられた課題である（p.92～3）。

III 教科課程

第5章. 言語、第6章. 一般教育、第7章. 専門化—拡充専攻の提案で構成され、新しいカリキュラム論が展開されているが、その主要な内容については第16章で大学教育の成果の評価との関連でふれるため、ここでは割愛する。

IV 学びの時

第8章. 大学教授職—教師として、学者として

提言(1)：すべての研究型大学において、教えることも研究と同じように高く評価され、すぐれた教育が終身在職権の獲得や昇進のための同等の価値をもった基準とされるべきことを求めたい。…多くの研究型大学では優秀研究教授（distinguished research prof.）の表彰が行われている。われわれは、それに加えて、各大学が「優秀教育教授（distinguished teaching prof.）」の制度を設け、すぐれた授業を行う教授を、身分や給与の面で優遇することを提案したい（p.153）。

提言(2)：教授団の燃えつき（バーン・アウト）症候群が高等教育界では問題とされるようになっている。学部課程の教育を行う大学では、教室の活気が非常に重要であり、常に熱意を持ち続ける教授がいなければならない。けれども教員開発に、予算の一部を割くといった、明らかに重要な措置がほとんど実施されていない。従ってすべての大学が、全教授の専門職としての成長を重視し、彼らが知的に生き生きとした状態でいられる環境を整えることを、強く主張したい（p.159）。

提言(3)：7年ごとのサバティカル休暇制度は、教授団の活性化のために実施されている最も一般的な手段であるが、この制度はあまり普及していない。従ってサバティカル休暇がすべての高等教育機関で行われるようになり、…教授団の成長を促進し、ひいては大学と学生の両者に利益をもたらすものとな

るように運営されることを、われわれは主張したい (p.159)。

提言(4)：その他にも多様な手段が必要であろう。とくに教授団が新しいアイデアを実施したり、自分たちの教授法を改善するために利用できる基金を設けることを提案したい (p.159)。

提言(5)：教員開発プログラムには、…交換教授制度や客員教授制度も含まれることになるだろう。それを援助するために大学の経費から適当な額が支出されると同時に、民間の財団や企業からの寄付がその費用を負担すべきことも強く提案したい。…われわれは全国の大学をいくつかのグループに分け地域的な教授交換ネットワークが形成されるべきことを提案したい (p.160)。

提言(6)：教授団の活性化のためには、同僚に対して優先事項を決めることのできる学科長（デパートメント・チェアパーソン）のイニシアティブやリーダーシップが必要である。…今日の学科構成は、カリキュラム全体に目を配ることのできるリーダーが、緊急に必要とされており、学内の教授相互の媒介役を果すリーダーが求められている。そして、学科長がそのリーダーシップを果すべきである。さらに学科長は教員開発において非常に重要な役割を果すことになる。従って他の教授に対してリーダーシップを発揮するための準備の機会として、学科長を対象とした地方ごとのセミナーやワークショップを開催することに、各大学はもっと関心をはらうべきである (p.162)。

提言(7)：4年制大学の全教員のほぼ25%が非常勤である。大学によってはその割合はさらに高い。…非常勤の教員は不利な境遇におかれており、彼らは研究室を持たず、大学で過ごす時間は短く、しかも一般に短期間で契約して雇われている。…従って、共同体の一員としての彼らの意識は低下せざるをえない。…（たしかに）非常勤の教員を雇うことで、大学側は経済的にも利益となり、かつ大学教育の内容も豊かにできる。…（しかし）専任教員と非常勤教員との間には、一定のバランスが保たれるべきである。とくに、学部教育課程の教員のうちで、非常勤の割合は20%を越えてはならず、かつ非常勤教員を雇う場合にも、それが教育上、正当化されるものでなければならないことを、われわれは提案したい (p.162)。

第9章. 教室における創造性

提言(1)：最も優れた教師が1年生の授業を担当すべきであり、授業の規模は教師や仲間の学生と活発な知的交流が可能な程度の規模にとどめられることを、われわれは強く主張したい (p.172)。

提言(2)：われわれは民主主義者として、機会の平等を尊重しており、同時に活力ある社会の建設のためには、才能あるものを優遇する何らかの方法が必要である。したがって大学の内外において成績向上へのやる気をかきたてるために、競争的手段を用いるのである。われわれはそうせざるを得ないのであり、さもないと世の中のすべての領域での基本的指導性を失ってしまうだろう。しかしながら民主主義が十分に実施されるべきものならば、協調も不可欠である。…大学という共同社会の目標は、根本的なところで、大学の教育プログラム、とくに教室の授業の仕方と関連している。したがって、教室のなかで、競争だけでなく、協力の重要性を強調していくために、学生を共同のプログラムに参加させたり、ときにはグループに課題を共同で行わせたり、さらには、大規模の授業をゼミナール用の小グループに分割するといった特別の努力がなされなければならない (p.175)。

提言(3)：優れた教育の中には、注意深く学生を評価することも含まれる。そしてこの重要な任務こそ、多くの教師が十分に訓練をうけてこなかったことなのである。教師は、かつて自分が受けた試験と同じ方法で、学生を試験する。…そこにおいては、しばしば想像力よりは記憶力が重視され、創造的な思考よりも、詰め込みが重んじられる。…したがって、学生の評価に関しては、教授たちを対象としたセミナーが開催され、教師が、よりよい評価法を学び、いかにしたら思慮深くかつ簡明な批評を学生たちに与えることができ、どのようにして学生の学習状況の長所・短所を理解できるかを学ぶための手段が講

ぜられるべきことを、われわれは強く主張したい (p.179)。

提言(4)：各教師の仕事ぶりは、次のようなフォーマルな形で評価されるべきであろう。①年長の教授による、授業参観、学生や同僚教授との面接を通して仲間の教授を評価する。②学生による授業評価(自由記述を含む)。③授業の進行過程の小休止時における、教師と学生の授業についての話し合い (p.180)。

提言(5)：教授法の教育に関しては、大学院はほとんど役立っていない。…概していえば、大学の教育法は自己流なのだ。だから教授が終身在職権を得てしまえば、授業の改善を求められることはまずないのだ (p.180)。…したがって、教師となるための準備は、大学院の時点から、教育助手として指導教官の注意深い指導のもとで、始められるべきである。…若手の教授も指導を受けるべきである。…一年間の教育研究プログラムへの参加とか教育経験豊富なベテラン教授との若手教員の接触などがなされるべきである。…ベテランの教授でも教育の改善は可能である。教授・学習センターなどに自発に参加する教授たちの授業テープを記録し、自己評価および批評などの共同プログラムは、彼等の授業の技術をみがき、自分の授業態度を反省するための、有力な手段である (p.181-2)。

提言(6)：すぐれた教育(ティーチング)を学部課程の中心に位置づける。すべての大学教師は授業の内容や方法を改善するために絶えず努力しなければならない。いいかえれば、それは講義概要のレベルから、実際に学生が学んでいることの分析にまで掘り下げていくことである。それはまた、個々の学生が達成する成果を最大限に高めるために、どんな教授法がよいのかを試してみることである。そして、さらにはカリキュラムの内容や配分方法の改良のために、学生の学習の発達に関する文献を用いることでもある (p.184)。

VI 多彩な目的・多様な形態

第14章. 広がるキャンパス

提言：現在最も緊急に求められていることは、国境を越えてキャンパスを拡張させ、より広く世界的共同体(ワールド・コミュニティ)と連携していくことであろう (p.257)。伝統型の学生に大学キャンパスの外での学習活動を行なわせ、世界全体に彼等の視野を広げさせようとする気運の高まりにわれわれは支持を与えたい。学生は大学を休学して一学期間留学を行うことにより、大学の外に視野を広げ、自分自身のプログラムを実施し、あるいは実習生として働き、海外旅行や留学を行うよう奨励させるべきである。大学とは、たんにひとつの場所を意味するのではなく、ひとつの生き方であることを学生は学ぶべきである (p.260)。

第15章. 大学の運営

提言(1)：活力をもった大学となり、配慮のいきとどいた意思決定がなされるためには、より多くの人々を大学運営に参加させなければならない (p.270)。……われわれは大学の教育・研究の中核に関連したすべての重要事項の決定権をもつ全学的な評議会を、教授団が積極的に支持するよう強く求めたい。そしてそうした組織がリーダーシップをとって全学的に議論を展開させるべきである。…さらに学生自治会に大学が強い支持を与えるべきこと、また学生に対しては大学生活全般にわたってより十分に意見を聞くことも提案しておきたい (p.274)。

提言(2)：学長が身につけている、ないしは身につけるべき最も重要な資質は、説得力である。すなわち指導者の説得の巧妙さの程度によって、大きな目標がアピールする程度も変わってくる。学長が法律家や経営者や科学技術者等と区別されるのは、…学長はすべてを包括的に考え、ものごとのカテゴリーの壁を越え、さまざまな考えを統一していくことにおいてでなければならない。…学長は大学に大きな

違いをもたらすものである。その違いをもたらすのは、学長に与えられた職務権限よりも、目標の指示に関わるものである (p.275)。

提言(3)：優れた管理運営とは、組織の形態によって判断されるのではなく、構成員の誠実さ (インテグリティ)、すなわちより大きな目標の実現に協力しようとする個人の意思によって判断されるべきである。…管理運営に関してはすべての人々に発言が与えられねばならない。そして、そこにおいて重要な鍵となっているのが誠実さなのである (p.276)

第16章. 成果の測定

提言(1)：学部教育課程をもつ大学にとっての第一の義務は、文章と口頭で表現する能力を学生に身につけさせることである。…大学では高度の言語能力が身につけられねばならない。学生は批判的に考え、想像力 (推理) を働かせ、文章や口頭での効果的な意思伝達により微妙な意味のニュアンスも表現できなければならない。こうした知的・言語的水準の評価は、すべての授業において、すなわち学部教育全体を通してなされるべきである。そして学生の言語能力は、最終的には、注意深く指導された卒業論文や口頭発表によって評価されるであろう (p.284-5)。

提言(2)：学部教育課程の第二の教育的要素は一般教育である。…全学生に教育されるべき一般的知識のコアについて関心が高まりつつある。(その際) 教育者は、一般教育で教えるべき知識内容よりも、むしろ一般教育の理念のほうに重きをおいている傾向が見られるが、この傾向は問題である。…(他方) 一般教育の目標や内容を前もってきちんと定めることなしに、学生に一般教育の試験 (例えば全国的に標準化された ACT, ETS などの試験を目的があいまいなまま) 実施しているところが多い (p.285)。

提言(3)：学校教育課程第三の要素は専攻 (メジャー) であり、学生の専攻領域の能力を評価することへの関心も現在高まっている。4年次では専門分野ごとに全国的に標準的な試験 (公認会計士試験、全米教師試験等々) を受けている。…しかし現在の評価のパターンでは、…一般教育と専門教育の評価が分離されたままになる。より根本的で重要な目標が見落され、瑣末な事柄が評価されてしまう危険がある (p.286)。……各科目ごとに行われる評価は個々の科目についての学生の理解度を計るべきである。そして全学レベルでの評価は、学部教育課程の全体目標に焦点を当てたものでなければならない。そしてその評価によって学生が気づかされねばならないことは、真に教育のある人間は、各学問領域相互を結びつけ、究極的には自分の学んだことを自分の人生に関連づける、ということなのである。とくに自分の専攻領域を歴史的・社会的・倫理的関心と関連づけた卒業論文を、学生に書かせることをすすめたい (p.287)。

提言(4)：さらに学生は4年次には20名以内で構成されるセミナーに参加して口頭で自分の報告を発表し、仲間の学生の論文を批判するようにすべきである。このようにして文章と口頭のコミュニケーションを通して各学生は明快に思考し、効果的にかつ総合的に考えを整理する能力を、学部教育課程の最終段階で示すようにすればよい (p.287)。

提言(5)：最後にすべての大学で卒業研究討論会 (シニア・コロキウム・シリーズ) が開催され、…学内の人々の前で自分の卒業論文を発表すべきことを提案したい。…各学生の発表とそれに引き続く討論により、大学教育の成果が、知識の統合と学習内容の応用能力を基準に評価されるということが、全学生に明らかにされるであろう (p.287)。

提言(6)：評価する際に考慮すべき、教育・研究面以外の学生生活の側面もある。…大学は学生に記録帳を用意させ、そこに例えば、自治会、クラブ、文化活動、さらに最も重要なこととして、ボランティア活動等の、大学の一員として参加した活動を記録させる。この記録帳は社会的・文化的目標に向けての学生の進歩の度合いを示すことになる (p.289)

提言(7)：大学教育の効果を測定することは、結局のところは、機関としての大学を評価することである。大学の使命を、すなわち大学がめざすべき目標を、明確に捉えたときにおいてのみ、大学教育を評価するための基準を得ることができる。…したがって大学教育にたずさわる者は、みずからの仕事を評価する方法を常に探し求めねばならない。大学関係者は、大学の諸目標に密接に関わるところの社会的関係責任を果すための、建設的で信頼できる手段を探し求めなければならない (p.290)。

第18章. たんなる有能さから社会への貢献へ

提言(1)：大学の卒業生には果すべき市民的義務がある (p.306)。…… (さらに) 今日の学生は、自国を越えた国民と文化について知らねばならない (p.308)。…… 世界はまた村とはいえないが、確かにわれわれの近隣という感覚は今より掘げなければならない…世界の諸々の現実 (緑の喪失, 飢え等) と、これが課している諸々の義務について、すべての学生に理解させなければならない (p.308)。

提言(2)：カレッジ的な大学教育の成果は、確かに学生の教室における達成度によってははかられべきものである。そしてさらにはその学部課程の経験の達成度は、大学卒業生の職場や大学院での達成度によってははかられるべきものである。しかしながら究極的には学生はそれよりもはるかに広大な理念 (ビジョン) によって鼓舞されるのでなければならない。学生が大学で獲得した知識を活用しつつ、新しい規範を発見し、共通の善を進めていくのでなければならない。学部課程の経験とは最良の面が発揮された場合には、学生の有能性 (コンピテンス) の育成から目的意識をもった行動 (コミットメント) へと動かすのである (p.312)。究極のところ、大学は個々の学生に人生の諸般の面に賢明な判断力を身につけるよう奨励すべきである。…目標は学生を一定の思想に教化することではなくて、彼らを思想の世界の中に自由に解き放たせ、倫理・道徳的な選択も徹底的に検討しなおすことが許され、信念が形成されるような雰囲気を提供することである。…究極においては、学部課程の経験の質は、このような特質によってははかられなければならない (p.313)。

本書のエピローグでは、個々の大学への関心という形で、上記の勧告・提言に立ち戻り、高校生や父兄に、よいカレッジを見分ける指針について言及している。いうまでもなく、それらはそのカレッジが良い学部課程教育を行っているかどうかを判断するための基準だといってよい。

4 本書に関する紹介者の感想

本書は、現代アメリカのカレッジ教育論・改革論—その中核的テーマは個人性と社会性を中心とした—であるといってよい。入学から卒業までの教育過程および学生の大学生活の全体と学部課程教育に関連した大学の管理運営のあり方から社会とのつながりについて、きわめて包括的に、カレッジ教育に関する高度な内容を平易な文章で論述している。勿論そこには訳者グループの中にアメリカ高等教育研究の第一人者やアメリカの大学一般教育に明るい研究者が存在しており、しかも彼らの名訳が、原書の持ち味を十分にひき出していることを忘れることはできない。

膨大な調査研究に基づく研究報告書をこのように平易な形で、比較的到手頃な大きさの書物にまとめ上げ、大学教育のあり方を国民に広く問いかけようとする著者 E. ボイヤーの教育改革への姿勢からも学ぶべきものは多い。しかし本書の核心は、いうまでもないが、著者のカレッジ・大学教育に関する高い見識、深い洞察力と膨大な実証データに基づいて大学教育論を展開していることである。新制大学発足以降、モデルをアメリカの高等教育に求め、学ぶことが期待されながらカレッジ教育の本質を理解する努力が不十分であった、われわれ日本の大学関係者が、学部課程教育の再検討を行う際に本書から学ぶべきことはきわめて多いと思う。本書は、21世紀の大学教育のあり方を考えようとする日本の大学関

係者にとって必読文献の一つとして広く読まれるべきものである。このような意味もあって本研究プロジェクトの主要メンバーは本書の翻訳を企画し、ここにその概要を紹介することにしたのである。

文献紹介執筆者

- 関 正 夫 広島大学 大学教育研究センター教授
(比較大学教育論/科学技術教育)
- 有 本 章 広島大学 大学教育研究センター教授
(大学・高等教育論/教育社会学)
- 大 膳 司 広島大学 大学教育研究センター助手
(高等教育論/教育社会学)
- 伊 藤 彰 浩 広島大学 大学教育研究センター助手
(高等教育史/教育社会学)
- 相 原 総一郎 広島大学 大学教育研究センター助手
(高等教育論/教育社会学)



『ファカルティ・デベロップメントに 関する文献目録および主要文献紹介』

(高等教育研究叢書 4)

1990 (平成2) 年3月20日 発行

編 者 伊 藤 彰 浩

発行所 広島大学 大学教育研究センター
〒730 広島市中区東千田町1-1-89
TEL (082) 241-1221 内線 (3706)

印刷所 中本総合印刷株式会社
〒732 広島市南区大州五丁目1番1号
TEL (082) 281-4221(代)

ISBN 4-938664-04-6

RHE

ISBN4-938664-04-6